

IS—マテリアルズの魂 を持つ者—

レリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISを起動してしまった一夏の親友、姫終龍輝は一夏の他に男性適性者がいるかを調べるために適性検査を行ったが、一夏と同じくISを起動してしまい、一夏と共にIS学園に通うはめに。そこで龍輝はどんな出会いをするのか。女子校の中で龍輝と一夏の居場所はあるのか。

目次

74	お気に入り登録1000人突破記念	62
	第九話	55
	第八話	50
	第七話	44
	第六話	37
	第五話	28
	第四話	23
	第三話	16
	第二話	7
	第一話	1
	オリ主と機体の説明	

	お気に入り登録2000人達成&正月スペシャル	229
	第二十話	221
	第十九話	207
	第十八話	197
	第十七話	186
	第十六話	173
	第十五話	165
	第十四話	153
	第十三話	130
	第十二話	120
	第十一話	103
	第十話	94

第三十三話
第三十二話
第三十一話
第三十話
第二十九話
第二十八話
第二十七話
第二十六話
第二十五話
第二十四話
第二十三話
第二十二話
第二十一話

462 449 406 390 363 349 341 322 309 293 281 264 248

オリ主と機体の説明

オリ主

姫終 龍輝（ひめらぎ りゆうき） C.V. 櫻井 孝宏

一夏と同じ男性 I S 操縦者。容姿は黒と所々に赤色の髪の毛のロングで顔は G G O のキリトに似ている。目がオッドアイとなっており、右目が赤、左目が青となっている。オッドアイは他人が見れば気味が悪いと言われると思いい、前髪を伸ばして右目を隠すようにしている。生身で I S に勝てる程の実力者でもある。一夏とは小学の時に席が隣だったため話したら馬があい、それからは一夏の悩み等を聞いたりしている。今では親友。箒と鈴とも知り合い。一夏と受験高校が一緒だったため一緒に行動してたら一夏とはぐれて、探したけど見つからなかったため、教室に向かおうとしたら「立ち入り禁止」とかかれたドアの隙間から光が見え、中を覗いたら一夏が I S を起動していた。適性検査をしたら検査用の I S を見にまもっていた。ちなみに束とも知り合いで束と一緒に自分の専用機を製作した。機体の名は「ガンダムバハムートマーナガラム」。詳しい説明は下に。そして龍輝は秘密にしていることがある。それは、I S の武装としても使えるし生身でも使える武器『ダークマテリアルズ』を所有していること。こ

の事は束と一夏は知っている。ただ、一夏は〈バルニフィカス〉は知っているけど他のマテリアルズは知らない。もちろんシユテルたちのことも知らない。主に使うのは〈バルニフィカス〉とヘルシフェリオン〉の二つ。〈シユベルトクロイツ〉と〈スピリットフレア〉は強すぎるためリミッターを掛けている。どうしてもというときにこの二つは使う。模擬戦等ではマテリアルズは使わない。基本的にバハムートに装備されているものを使う。

マテリアルズの武器を所有しているからチヴィットのマテリアルズ四人が龍輝と共にいる。量子化はできるけど彼女達はロボットではなく生きてるので量子化はせずと龍輝の周りを飛んでいる。ちなみに四人とも自分の武器は使える。四人とも龍輝のことを主と慕っている(シユテルは「マスター」、レヴィは「ご主人」、ディアーチェは「主」、ユーリはシユテルと同じく「マスター」と呼んでいる)。

オリ主の説明はこれで終了です。長くなつてすみません。

ガンダムバハムートマーナガラム

機体のベースはエクストリームガンダムtypeレオスII V.s. を改造した。機体の色は赤。龍輝は愛称で『マナ』と呼んでいる。この機体はバックパックを交換することができる。だが、バックは二つしかない。両腕と両足はバルバトスレクスのを装備している。ライフルはウイングガンダムフェニーチエのバスターライフルカスタムをEW版に変えて下部の小型ライフルをAGE-2ノーマルのハイパードズズライフルを小型化にして装着したライフル。名を「バスタードズズライフル」と言う。このライフルはバスターライフル改とドズズライフル改を分離して二丁として持つことができる。両腕と両足をバルバトスレクスを使用しているから両腕と両足に装備されている機関砲やヒールバンカー等もある。あと、バルバトスレクスに装備されているテイルブレードも装備されている。テイルブレードは機体の背部に取り付けられているのではなく、腰に装備されているギラーガの尻尾の先端にテイルブレードが装備されている。もちろんワイヤーを使ってテイルブレードを飛ばせる。後の武装はエクストリームtypeレオスIIと同じ。隠し武装も存在する。

レオスバック

本来のバハムートマーナガルムの姿。typeレオスIIのバックパックを使用した物。通常はこのバックで戦う。レオスパックはオーライザーパックと違い、汎用に優れたパック。

オーライザーパック

その名のとおり、オーライザーのウイングを使ったバック。レオスのウイングの部分をオーライザーに変える。このバックに換装すると、バスタードツズライフルがGNバスタードツズライフルに変わる。このオーライザーパックは機体の背部にエクシアの太陽炉を装備し、オーライザーのウイングの内部にはダブルオークアンタの太陽炉を装備して、ツインドライヴシステムを遥かに凌駕するサードドライヴシステムを使用する。このオーライザーパックは火力と機動力を高めたバック。このバックを装備している時は単一仕様能力ヘトランザムを使用できる。第二次移行した後のトランザムは強化され、ヘトランザム・インパクトと呼ばれるものになる。通常のトランザムは粒子放出量を三倍にするがトランザム・インパクトはその名の通り、爆発的な粒子放出量を行う。粒子放出量はおよそ八倍である。

黒龍パック

第二次移行したバハムートの姿。龍輝が開発したレオスパックの面影はなく、バハムートの疑似人格『マナ』が独自に設定したもの。第二次移行したバハムートはマナが大規模改造をしたことで神装機竜のバハムートに酷似した姿になった。だが、腕や足などの武装がついている部位は変更されておらず、そのかわりに装甲の強度や武装の強化が施されている。そして、オーライザーパックでのみ使用可能だった単一仕様能力が使えるようになった。単一仕様能力は〈暴食（リロード・オン・ファイア）〉。ここもマナが神装機竜のバハムートにある能力をコピーして実装したもの。そして、マナが生まれたことで出現した大型剣〈烙印剣（カオス・ブランド）〉が使用可能になった。マナもシユテルたち同様、小さくなつた姿で龍輝の周りを飛んでいる。ちなみにマナも〈烙印剣〉を使用できる。

???
パック

第二次移行したオーライザーパックの姿。今はまだ龍輝が使用していないため、詳細がない。龍輝はマナに詳細を見せてもらっている。龍輝は知っている。が、黒龍パックが強すぎるため、ほとんどそれで片付けてしまう。

これで機体の説明は終了です。

第一話

(何故こうなった?)

どうも、初めまして姫柊龍輝です。俺は今ISS学園の教室にいます。右斜め前には俺の小学からの親友であり、事の発端でもある織斑一夏がいる。

そもそもなんで俺もISS学園にいるのかというと、一夏が受験高校で迷って部屋に入ったらISSがあつて、触ったら起動したから全国の男子に適性検査を行つて、俺がやったら見事にISSを起動しちやつたんだよね

そして現在にいたる。

(一夏のやつ緊張してるな。まあ当然か)

「はい、皆さんおはようございます！このクラスの副担任を勤める山田真耶です。全員揃ってますね？ではSHRを始めますね」

（山田先生か。よし、覚えた。 というより一夏は先生の話ちゃんと聞いているのか？）

「では、自己紹介に入りたいと思います。出席番号1番の人から順にお願いしますね」

（自己紹介か。ここで失敗すれば大変な不名誉を与えられそうだな。ちゃんと考えとこ）

一夏と俺に向けられているたくさんの視線が余計プレッシャーとなる。

（そろそろ一夏の番だけど、あいつ気づいてるのか？心配だ）

「織斑君、織斑君！織斑一夏君！」

「は、はい！」

山田先生に呼ばれて立ち上がる一夏

(やっぱ気づいてなかったか)

「ご、ごめんなさいね、織斑君。何度も大声出しちゃって。次の自己紹介、織斑君の番なんだけどもお願いしていい？」

いやいや、先生。話を聞いてない一夏が悪いから謝らなくて大丈夫ですよ。

「あ、謝らないで下さい。俺が悪いんですから。あと怒ってもいいので」

「良かったあ。生徒を怒らせたらどうしようかと思いましたが。では、織斑君、自己紹介お願いします」

「はい。えと、織斑一夏です。．．．．．以上です！」

ガタタツツ!!!

(おい!!それだけ溜めて以上かよ!!間があるから続きを考えてるのかと思つたらこれかよ……。クラスの女子半分が机ごと倒れたぞ)

そんなことを考えてると一夏の頭に物凄い勢いで降り下ろされる物体が……。

スパアアンツツ!!

「痛っ!?!」

(うわ、あれ痛そう。て言うかあの人、確か)

「お前は自分のあいさつもまともにできないのか」

「げえっ!?!千冬姉!?!」

スパアアツツ!!

二度めの出席簿アタックが一夏の頭に降り下ろされる。

(てかあれ出席簿かよ!?!出席簿で叩くとあんな音するの!?!初めて知ったわ。あと千冬さんお久しぶりです)

「学校では織斑先生と呼べ。諸君、私がこのクラスの担任を勤める織斑千冬だ。ひよつこの貴様らを育てるのが私の役目だ。返事はいかイエスだ。それ以外は認めん」

厳しすぎやないですかね?

「きゃ・・・」

(ん?)

静かになるのはやつ！

「織斑先生、会議は終わったのですか？」

「ああ。すまないな山田先生、朝のSHRを任せてしまって」

「いえ、大丈夫です。それでは自己紹介の続きをお願いします」

「では、次に姫終君、お願いします」

（もう俺の番か。んじゃやるか）

「姫柊龍輝です。その織斑一夏とは小学校からの付き合いで、良く一緒に遊びました。前髪で右目を隠してるのはある事情で言えないです。このクラスで精一杯やっつけていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします」

(よし、ちゃんと出来た)

「ありがとうございます。では次の方、お願いします」

「これでSHRを終わりにします。皆さん、お疲れ様でした。これからは授業になりますので準備の方をしっかりと行ってくださいね」

(やっと終わった。さて、一夏のところにも行きますか)

「よう、一夏。さっきの自己紹介はダメダメだったな」

「龍輝か。てかお前はよくあんなに喋れるよな。緊張しないのかよ？」

「そりやしてたさ。でもこういうときだからこそ落ち着いてやるんだよ」

「その落ち着きが出来ないんだよなあ。俺は」

「ちよつといいか？」

「ん？」

第二話

「ちよつといいか？」

「ん？」

（あれ？こいつは）

「おう、箒か。どうした？」

（やっぱ箒か。昔とそんなに変わらないな）

「ああ。すまない、一夏を借りるぞ」

（なんか初対面みたいな感じに話してくるんだけど？）

「ん？ 箒、龍輝のこと忘れたのか？」

「なに!?! 龍輝だど!?!」

「いやなぜそこまで驚く？俺ちゃんと自己紹介したよな？」

「ほら、小学の頃、一緒に遊んだろ？」

「箒ん家の道場で三人で剣道やったろ？」

「お前、本当にあの龍輝なのか!？」

「何が『あの』なのかは知らんがそうだ」

「そ、そうか。どこかで聞いたことがある名前だと思っていたがそういうことだったか」

「え？俺、友達に覚えられてないの？うわ、めつちや悲しいわ」

嘘泣きを始める俺。ちなみに一夏は俺がふざけてるってのを知ってるから必死に笑いを堪えている。

「えっ！いや別に忘れていたのではなく！その、なんていうか・・・」

「ぷっ！あははははは!!」

我慢出来なくなった一夏が笑いだした。おい一夏、そこはもうちよつと踏ん張れよ。

「なっ！だ、騙したな!!」

「悪い悪い。ちよつとふざけてみようかと思つて」

「私をからかうなっ!!」

「元はと言えば箒が俺のことを忘れてたのが原因だろ」

「うぐっ!・・・そ、その、すまない」

「いいっていいって。箒とはそんなに遊んだことないからな」

「にしても箒、お前は昔とそんなに変わらないな」

「一夏こそ変わらないではないか」

「どっちもどっちだよ」

「お前は変わりすぎだ!」

「え?そう?」

「うんうん」

「髪の色を変えるなど、不良がすることだぞ。」

「いや、これ地毛だから」

「「え!」」

「箒はともかく、なんで一夏も驚くんだよ!」

「知らなかったからだよ!それが地毛だなんて初めて聞いたわ!!」

「あれ、言ってなかったつけ?ごめんごめん。ところで箒。お前、一夏に用があ

るんじゃないのか?」

「あつ、そうだった。一夏、ちよつと廊下で話そう」

「おう、いいぜ」

「いつてらつしやい」

（さて、本でも読むか。次の授業の準備もしたし）

「ちよつとよろしくて？」

「ん？なんだ？」

「まあ、なんですよ、その返事は！」

ウザイヤつか・・・。

「で？なんの用だ」

「貴方、ISを動かすのは素人でしょう？代表候補生で、実技試験で試験官を倒したわたくしが教えてさしあげようかと思ひまして」

「試験官なら俺も「俺も倒したぞ、試験官」・・・一夏か」

俺の言葉を遮ったヤツは誰だコノヤロウ！と思って振り返ったら一夏だった……。

「え？貴方、試験官を倒したのですか？」

「おう。まあ、倒したというか、試験官が突っ込んで来たからかわしたら壁に激突して試験官が気絶したんだけどな」

「それ自滅じゃん」

「じゃ、じゃあ、まさか貴方も？」

「ああ、倒したぞ」

「俺みたいに不戦勝だったのか？」

「んなわけあるか。ちゃんと勝負して勝ったわ。瞬殺だったけど」

「お前、武器なににしたんだよ」

「ん？使いなれてる戦斧にしたけど？」

「あれなら瞬殺だな。納得したわ」

「わたくしを無視しないでくれませんか!？」

「ああ、まだいたの？で、俺にI Sについて教えてくれるんだっけ？」

「そうですね。代表候補生のわたくしから教えてもらえるなんて光栄に思いな

「なあ、龍輝」

「なんだ？一夏」

「代表候補生ってなんだ？」

ズゴツツ!!

「貴方！代表候補生を知らないんですの!？」

「一夏、代表候補生っていうのは国家代表を決める候補生のことだ。俺たち一般人からしてみればエリートに近い」

「そう！エリートなのですわ!!」

「だが、織斑先生のような世界最強からしてみればまだまだひよっこだ」

「貴方、バカにしてるんですの？」

「じゃあ、織斑先生の前で自分はエリートだって言えるのか？」

「うぐっ！」

「一般人だらけのこの教室で自分だけはエリートだと思わない方が良いぞ」

「言わせておけばっ！」

キーンコーンカーンコーン・・・

「また来ますわ。逃げないでくださいまし！」

誰も逃げねえよ・・・。

「お前ら席につけ。授業を始める」

第三話

「この授業はI・Sについてやっていくが、その前にクラス代表を決めようと思う。自薦他薦問わない。誰がやる？」

「私は織斑君を推薦します！」 「私も！」 「私も！」

「え、俺！」

(一夏、頑張れよ！)

「じゃあ私は姫柊君を推薦します！」 「私も！」 「私も！」

「俺も!?!」

「織斑、姫柊。やれるか？」

「ちよつと待つてください！織斑先生！俺じゃなく一夏で良いじゃないですか

!!

「おい！龍輝！お前、裏切るなよ!!」

「黙らっしゃい！こういうのはお前が適任だろ！」

「確かに織斑君もいいけどさっきのアレ見てればクラス代表は姫柊君でいいか

も」「確かに」

「はあ!?なんで俺!?!」

「よっしゃ!!」

「よっしゃじゃねえぞ!一夏!織斑先生、遅れて申し訳ないですけど発言良いですか?」

「構わん」

「ありがとうございます。なあ、君たち!なんで俺で決定という方針になってるのか理由を聞きたい!」

「だって姫終君、試験官を瞬殺だったんでしょ?」

「オルコットさんのことを論破してたし。」

「では、クラス代表は姫終でいいのか?」

「」「はい!」

「織斑先生、俺に拒否権は?」

「あるわけないだろ」

ですよねえ……。

「ちよつと待つてください!」

ん?

「納得いきませんわ! 物珍しさだけでこんなきよくとu」発言よろしいですか?
! 織斑先生っ!!」……ツ!!」

展開が読めた俺は強制的にオルコットの話を中断する。

「構わん」

「ありがとうございます!」

「貴方! 人の話を遮るなんて失礼ではありませんの!?!」

「その先を言ってみろ。俺だけじゃなく、日本という国を敵に回すぞ。その言葉だけで代表ならともかく候補生の独断で国家戦争になつても知らんぞ」

「っ!!」

「怒りに身を任せるとは、とうとうときこそ落ち着くんのだ」

「姫終の言うとおりで。落ち着くことがなによりも大切なことだ。発言があるのなら姫終の様に確認を取れ」

「はい……」

席に座るセシリア・オルコット。これで少しは反省と落ち着きを取り戻してほしいな。

「さて、話を戻すぞ。確認だが女子たちは皆、姫終がいいのだな？」

「はい！」

「そうか。だが、他薦された織斑もいる。そこはどうするかを織斑と姫終の二人で考えろ」

「織斑先生、発言よろしいでしょうか？」

「構わん。少しは落ち着きを取り戻せたか？オルコット」

「ありがとうございます。なんとか取り戻せたかと思いません。それでわたくしは

わたくしを自薦します」

「ふむ、こうなるとどうすればいいか悩むな」

「でしたら、織斑君と姫終君とオルコットさんの模擬試合というのはどうでしょうか」

山田先生が悩んでいる織斑先生に提案をする。にしても模擬試合か。後であの人に連絡しよっと。

「ふむ、三人とも、それでいいか？」

「「はー」」

「よし、では織斑と姫終とオルコットの三人で来週の月曜に第二アリーナで模擬試合をする。各自、準備を怠るなよ？」

「「はー」」

第四話

時が経つのは早いものでもう一週間経って、俺と一夏は今第二アリーナのピットにいる。

「なあ、龍輝」

「なんだ？一夏」

「お前、この一週間なにをした？」

「イメージトレーニングと素振り」

「素振りはなにを使ったんだ？」

「戦斧」

「あれで素振りやってたのかよ」

「そうだよ。ところで、箒はなぜここにいる？そして一夏の専用機が届くはずだが遅くね？」

ピットにはなぜか箒がいる。

「私はお前たちの応援だ。それに私は一夏の特訓相手だ。ここにいて何が悪い」
「そこまで言っていないんだけど？」

腕を組ながら睨んでくる箒。コワイよ。

「だよな、もう少しで試合が始まるのに。っていうか俺より龍輝の専用機はどうなんだよ」

「俺か？俺は企業が作ったISを使うなんてまっぴらごめんだから先日、あの人に連絡して今日届くようにしてもらったよ」

「龍輝、あの人は？」

箒が気になったのか、俺を見て聞いてきた。ここは素直に言いますか。

「束さんだけど？」

「なっ!?!お前は姉さんに専用機を作ってもらったのか!?!」

「正確には、俺が作つてるところを束さんが見つけてちよつと手伝ってくれた

ただだ」

あの時の東さん、めっちゃ目がキラキラしてたな。

「姉さんが持つてくるのか？」

「うんや、違う。もうそろそろ届くと思うんだけど」

ピットの出撃口から空を見上げる。

(ん？あれは……。ヤバツ!!)

ヒューン……ドカーン!!

俺が先程までいた位置に落ちてきた物体をギリギリでかわす。

「あつぶねえ。東さん俺のこと殺す気？」

『織斑、姫終、お前たちがいるピットに何が落ちてきたんだ』

ピットに通信してきた織斑先生が聞いてきた。

「ご迷惑おかけして申し訳ありません。俺が頼んどいたヤツが降ってきたんです」

『送り主は？』

「東さんです」

『まったく、あのバカは』

もつとましな送り方を知らんのかとか思ってたそう……。そして一夏と箒は啞然としてるけど無視しよう。

落ちてきた物体は六角水晶のような形をしており、近づいたらセンサーかなんかが反応して、扉が開いて中身を確認する。

「さすが束さん。最適化もすんでるし、アレもある。ん？なんだこの箱は？」

深紅の色をしたISを見て確認したあと、待機状態の赤いネットワークスにして身につけた俺は、ISの足元にあったダンボール箱を手に取り、中身を確認する前に箱の蓋が開かれ、中から黒い影が四つ俺に向かってきた。

うえっ!?

「会いたかったよ！ご主人〜!!」

「やっとお会い出来ました。マスター」

「我らをほったらかしてどこをほつつき歩いておった!」

「み、皆、マスターが困ってるよ」

「「ええっ!」」

「皆、久しぶりだな。なかなか会えなくてごめんな」

四つの影、人形のような大きさの子たちが俺を押し倒して、腹の上に乗っ

てる。

「り、龍輝、その子たちは？」

なんとか正常に戻った一夏が俺に聞いてきた。

「ん？ああ、お前らは初対面だったな」

俺は腹の上に乗ってる四人をどかして立つ。

「ええっ!？」

なぜまた驚いているのかというと、どかした四人が宙に浮いてたからだ。

「ほら、ちゃんとあいさつしなさい」

俺がそういうと右側にいる子からあいさつを始めていく。

「僕はレヴィ・ザ・スラツシャー！よろしく！」

水色のツインテールをした少女、レヴィが元気にあいさつする。

「私はシュテル・ザ・デストラクターです。よろしくお願いします」

濃い栗色のショートカットの少女、シュテルはなぜか猫耳と猫の尻尾がついている。

「我は閻統べる王、ロード・ディアーチエである」

白と黒色のショートカットでカラスを彷彿とさせる羽を羽ばたかせているディアーチエ。

「ユーリ・エーベルヴァインです。よ、よろしくお願いします」

黄色のロングヘヤーの少女、ユーリが緊張気味にあいさつをする。

「この子たちは俺の家族、四人揃ってダークマテリアルズっていうんだ。ちなみにシユテルの猫耳とかは俺が初めて会った時からあるからなぜあるのかは俺もわからない」

「へ、へえ〜」

「織斑君！織斑君！」

「ん？」

「山田先生どうしたんですか？」

「一夏の専用機が届いたんですか？」

「はあはあはあ……。そうなんです！やっと届きました！これです！」

そう言って出てきたのは白を基調としたISだった。

「織斑君の専用機、『白式』です！」

「これが、俺の専用機……」

「二夏、惚けるのは後で今は出撃準備をするぞ」

「お、おう！」

「いくら模擬試合といっても試合には変わらない。全力でいくぞっ！」
「おう！」

第五話

「つて言ったが・・・」

「初期化と最適化は試合をしながらやれ」

気合い十分で行こうとしたら織斑先生が来て一夏に無茶振りをする。

「ええっ!？」

いきなりの命令に戸惑う一夏。ここは助け船を出すか。

「織斑先生、さすがに一夏でも試合をしながら最適化をやるのは辛いかと」

「なら、姫柊は行けるのか？」

「どちらも終わってますし、すぐに出れます」

「そうか。なら、姫柊が先に試合を始めろ。その間に白式の初期化と最適

化を終わらせる」

「了解」

「龍輝！ありがとな！勝てよ！」

織斑先生の話を聞いて俺に感謝の言葉と当たり前前のことを言っ

る。

「当然だ。あんなヤツに負けてたまるか」

「龍輝」

「箒?」

「応援してる」

箒からの激励は嬉しいな。

ピピッ!

(ん?メール?)

着信したメールを見る俺

『あなたが言っていた自分で作ったISの初陣、楽しみにしてる。観客席から応援してるから』

ルームメイトからも激励のメッセージを受け取れるなんてな。こ

りや、期待に応えなくちやな！

「行くぞ！ 『マナ』!!」

そう言つて俺は赤いネックレスを握つて叫ぶ。俺の体を眩い光が包み込み、光が収まつて出てきた俺は深紅の I S を纏つていた。

「なっ!?! 全身装甲だ?!」

「それが前に言つてた、お前が作った I S かよ」

俺の I S を見て驚いている箒と平常を装つてる一夏。

「ああ、これが俺が作った専用機、『ガンダムバハムートマーナガラム』だっ

!!」

『試合の出場者は発進位地へ移動してください』

「さて、初陣だ。派手に暴れるぞ！ マナ!!」

バハムートのツインアイが激しく光る。

「ご主人の機体を見るの久しぶりだなあ」

「レヴィ、ちゃんとマスターの応援をします」

「わかってるよ、シユテルん！」

そういや以前にシユテルたちにマナを見せたっけな。

『発進シークエンス完了。発進、どうぞ』

「姫終龍輝、ガンダムバハムートマーナガラム！出る！！」

「悪い、待たせたか？」

ピットから出ると、上空にオルコットがいた。

「いえ、わたくしも準備に手間を取りました」

「そうか。んじゃ、始めるか！」

バスタードツズライフルを構える俺。

「その前にお話しておきたいことがありますの」

「なんだ？」

そう言つてバスタードツズライフルを下ろす俺。この時に話しておきたいんだろう。オルコットの目がそう言っている。

「その、先日の件は大変申し訳ありませんでした。あの後、一人で考えて自分がどれだけ舞い上がっていたかを思い知りました。あのまま怒りに身を任せていたら、

とんでもないことを言おうとしてました。強引にわたくしの発言を止めてくれて感謝します」

そう言つて頭を下ろすオルコット。

「いや、俺もあんな強引なやり方ですまなかつたな」

「そんな事ありませんわ。あの方法以外わたくしも思いつきませんでしたし。このことだけは試合前に言っておこうと思つてました。これで正々堂々戦えます！」

スターライトmk. IIIを俺に向けるオルコットの目はなんの迷いもない目だった。

「そりや良かった。んじゃ改めて、始めようか！」

『試合開始！』

第六話

試合が開始され、オルコットは俺にスターライトmk. IIIIを向けて撃ってきたがなんなくかわす。かわしてすぐにバスタードツズライフルの下部に装着された小型ライフル『ドツズライフル改』で撃つ。狙いはオルコットではなく、オルコットの周辺を。なぜオルコットを狙うのではなく周辺なのかというと、オルコットの動きを見るためだ。

「そのライフル、わたくしのスターライトmk. IIII以上の威力を持つているのではなくて？」

そう言ってきたオルコットに俺は驚く。ドツズライフル改だけを撃つてるのに主砲のバスターライフル改の威力を読んだというのか。

（さすが代表候補生だな。んじゃこれは切り札としてしまうか）

そう思ってバスタードズライフルを背部にマウントし、ウイングに装備されている二本の剣、『ソードビット』を手に取り、ビーム刃を展開し、オルコットに向ける。

「次はこれでいくよ」

「懐には入らせませんわ。行きなさい！ 『ブルー・ティアーズ』!!」

オルコットのブルーティアーズのウイング部から四基のBTが放たれ、

俺に迫る。

「あいにくそれはこちらにもあるよ。行け！ ファンネル！」

「なっ!？」

俺もバハムートのウイングから四基のファンネルを展開する。

「お前のBTと俺のファンネル、どっちが強いかな！」

オルコットのBTと俺のファンネルが撃ちあつて爆発した。爆発したのはオルコットのBTだった。

「くっ！」

「隙だらけだ！」

体制を崩したオルコットに近づく俺。と、ここでオルコットの口角が上がる。

「あいにく、『ブルー・ティアーズ』は六基ありましてよ！」

背部に装備されてた大砲が俺に向けられ、ミサイルを放つ。

「あいにくこつちも六基あるんだな」

「えっ？」

六つの光が疾り、ミサイルを破壊する。爆煙から出てきた俺を見たオル

コットは目を見開いている。それもそのはず、俺の周りには六基のファンネルが浮遊しているからだ。

「まさか、貴方もBTを使うなんて……。しかもわたくしと同じ六基だなんて……」

「そうだよ。使うのは久々だけど鈍つてないみたいで良かったわ。んじゃ、お話はこれくらいにして今度はこちらから行くぞ！」

オルコットに突っ込む俺は、ある準備をする。

「くっ！」

オルコットはスターライトmk. IIIで俺を近づかせないように撃ってきたが、ヒラリヒラリとかわし、オルコットのスターライトmk. IIIを真つ二つに切る。そこでオルコットはソードに切られると思つたのか、目を強く瞑つた。だが俺は、先程準備したものを使用することにした。俺はオルコットに体を向け、腹部に内蔵された隠し武装、『カリドウス複相ビーム砲改』の砲口が火を吹き、爆煙に包まれた

オルコットは自由落下を始める。

「よつと。よし、ビーム砲の直撃は免れてるな」

オルコットをキャッチして、オルコットを確認する。そう、龍輝は腹部砲を放つ瞬間にわざと軌道を変えてISのシールド部分に撃つたのだ。だからセシリアはかすり傷一つおつておらず、逆にブルーティアーズのシールドエネルギーが『0』と表示されていた。

『試合終了。勝者、姫終龍輝』

試合終了のアナウンスが流れ、俺はオルコットを抱えたまま、ピットに戻った。

ちなみに龍輝と一夏の試合は龍輝がさっさと終わらせたいという理由で、初心者（一夏を）相手に戦斧『バルニフィカス』を使用し、開始一分で龍輝の勝利となった。この試合をピットで見てた箒は顔を青ざめていたという。その中に唯一喜んでいたのはレヴィだった。目を覚まして、箒からその後の試合を聞いたオルコツトも顔を青ざめていたらしい。

第七話

模擬試合が終わった翌日、俺は模擬試合での疲れがとれない体を休ませるべく、寮の自室に向かっていた。

「まさか、I Sを纏った状態でバルニフィカスを使って暴れると筋肉痛になるとは思わなかったわ・・・」

そう、セシリアとの試合の後にめんどくさくなつて龍輝はちよつと本気出して一夏との試合をさっさと終わらせようと考えてバルニフィカスを使ったが、身体に慣らせる必要があるのか、身体のあちこちが筋肉痛となっていたのだ。

「はあ、早くフカフカのベッドにダイブしたい」

そんなことを言っていると、自室に着いた。

(おっと、入る前にノックしなくちゃな)

龍輝のルームメイトは当然女子だ。ノックもせずに入るとルームメイトが着替えているかもしれないから入る前にノックをするというのを心掛けている。どつかのバカ(一夏)がノックもせずに入つてルームメイトの下着姿と直面して成敗されたらしい。らしいというのは俺は近くにいたが、あえて無視した。無視をした理由は単に巻き込まれるのが嫌だったから。

まあ、そんなことはさておき、ノックをする。

コンコン・・・『どうぞぞ』

よし、入室OKをもらった。では入ろう。

「ただいま〜」

「おかえり、龍輝」

「ただいま、簪」

この子は更識簪。特徴的である水色の髪の毛のショートカットで瞳の色が赤という俺の右目と同じ色をしていて俺のルームメイトである。簪は俺の目がオツドアイというのを知っている。知っている理由は、俺が風呂上がり前に前髪を整えないうで出てきたところを簪が見て、その時に俺がオツドアイというのを知った。嫌うどころかカツコいいって言ってくれた時は嬉しかったな。

（今度、わざと前髪を整えないでクラスに入ってみるか。簪が嫌う人なんかいないと思うって言うてくれたわけだし）

「ねえ、龍輝。帰ってきて早々悪いけどここっつてどうすればいいかな」

「ん、構わなねえよ。どれどれ……。ああ、これはこうした方がコイツに合うんじゃないか？」

「それはわかってるんだけど、そのやり方がわからなくて困ってるんだ」
「これはこうすればいいんだよ」

そう言うて俺は簪の手が置いてあるマウスに手を重ねる。

「っ!!」

顔を真っ赤にする簪。

「あつ、すまん。嫌だったか?」

簪の反応に気づいた俺は、すぐに手をどかす。

「う、ううん。別に。寧ろ嬉しかった・・・」

「えっ?」

今、簪はなんて言った?俺と手を握るのが嬉しかったんだよな?

「えっ、あつ、い、いや、なにを言ってるの?私は」

(彼女は俺のことが・・・、いや、まさかな)

俺はその考えをやめる。

ドンドンツツ!!

「うえっ!?!」

突然の物音にビビる簪と俺。

「やっと帰ってきた!ご主人!」

「待ちくたびれました」

「王である我を待たせるとはいい度胸だな、主よ」

「待ってました。マスター」

「なんでお前らはクローゼットから出てくるんだよ!」

そうツツコミを入れる俺だった・・・

第八話

「・・・で、なんでお前らはクローゼットの中に入ってたんだ？」

突然、クローゼットの中から出てきたレヴィ、シユテル、ディアー
チエ、ユーリに聞く。

「それは私が説明します」

説明してくれるのは『理』のマテリアル、シユテル。彼女なら分か
りやすく説明してくれるだろう

「まず、この部屋に入った時間はマスターのルームメイト、カンザシが
入ってくる十分前です。この部屋の入室許可はタバネ様がチフユにあらかじめお願い
してくれていました。部屋に入った後はマスターのお帰りをお待ちしていたら先に
ルームメイトが帰ってきたので、私たちをみたら驚くと思ってクローゼットの中に隠れ

ました」

「それでクローゼットの中にいたのか。それと簪とは初対面なんだからあいさつをしとけ。織斑先生の呼び方も呼び捨てじゃなくてさんをつけろ、俺の教師なんだから。簪、俺の家族が驚かしてしまつてすまない」

「えっ、家族？」

家族という言葉に若干驚いている。無理もない。なんせ、人形サイズの女の子たちが宙に浮いてしゃべつて、その上家族なんて言われたら誰でも驚く。

「そう、俺の家族だよ。四人揃つて『ダークマテリアルズ』つて言うんだよ。ほら、あいさつは？」

「僕はレヴィ・ザ・スラツシャー！よろしくね、ご主人のルームメイト！」

「シユテル・ザ・デストラクターです。以後お見知りおきを」

「我はロード・ディアーチェだ。よろしく頼む、主のルームメイト」

「ディアーチェが上から目線じゃないなんて・・・」

「主！それはどういう意味だ!!」

「いやだつてディアーチェは大抵上から目線じゃん」

「主よ、外に出ようではないか。アロンダイトを喰らわせてやるぞ！」
「この辺一帯が消し飛ぶからやめてください、ごめんなさい」

顔を赤くしながらとんでもないことを言ってくるディアーチエに
謝る俺である。

「ディアーチエ、自己紹介の途中です。マスターもディアーチエをから
かわないでください」

「ごめんなさい・・・」

(主、ユーリに怒られてしまったではないか)

(ユーリに怒られるなんて滅多にないぞ。なにかあったのか？つとや
バい、ユーリが黒い笑みを浮かべてこっち見てる。念話で話してるのバレてるな。ディ
アーチエ、一旦やめよう)

(承知した、主。またユーリに怒られるのはごめんだからな)

ディアーチエと念話で話してたがユーリの黒い笑みを見て念話を

中斷する。

「マスターとディアーチエの茶番でうるさくしてしまつてごめんなさい。私はユーリ・エーベルヴァインです。よろしくお願いします」

「ちや、茶番・・・」

ユーリの毒舌が二人にグサツと刺さり、落ち込む二人。

「事実ですから弁解もできないですね。マスター、王」

シユテルの言葉が俺とディアーチエにさらにダメージを与える。

「今日のユーリはなんでそこまで怒ってるの?」

「マスターのルームメイトが可愛いからです。ユーリはいわゆる嫉

妬をしています」

シユテルが説明する。それを聞いたユーリと簪が顔を赤くす

「し、シユテル！私は別に嫉妬なんかしてません！／＼／＼」
「私が可愛い・・・私が可愛い・・・／＼／＼」

「シユテル、さらつと爆弾発言しないでくんない？簪がショートし
かけてるから。おい簪、戻ってこーい」

顔を赤くしてる簪の顔の前で手を振る。

「はっ！」

「おかえり、簪」

「り、龍輝は私のこと、可愛いって思ってる？」

顔を赤くしながら俯いて聞いてくる簪

「可愛いと思ってるけど？」

(ヤバイ、後ろからものすごく殺気を感じる・・・)

本心をいうと後ろから殺気を感じる。おそらくユーリだろう。

「ッ！そ、そう／＼／＼」

は内緒だ。

「よ」

再び顔を赤くして俯く簪。その簪を見て俺はドキツとしたの

「あつ、ごめん、自己紹介がまだだったね。私は更識簪。簪でいい

「では、私たちも名前で呼んでください」

シユテルがそういうと、他の三人は笑顔で頷く。

「うん、シユテル、レヴィ、ディアーチェ、ユーリ」

(さっそく仲良くなれたな。良かった良かった)

簪とシユテルたちは楽しそうに会話をしている。彼女たちの顔は眩しいくらい笑顔だった。

第九話

「ところでシュテルたちはどこで寝るんだ？」

「マスターと一緒に寝ます」

「え？」

シュテルの言葉に驚く簪

「そうか、んじや寝るか。もう夜遅いし」

「待って、龍輝。なんで普通に一緒に寝ようとしてるの？」

「前は毎日一緒に寝てたけど」

「へえく・・・毎日一緒に寝てただく・・・」

「あの、簪さん？目に光が灯ってないよ？あと後ろになんか黒いオーラが出てるけど!?!」

「マスター、カンザシはなにか勘違いをしているのでは？」

黒いオーラを漂わせて近づいてくる簪を見て冷静に分析するシュテル。

「お、落ち着け、簪。シュテルたちは俺のかぶる布団の上に寝てるんだよ。川の子みたい寝てるんじゃないんだよ。……たまに俺の隣に寝てことはあつたけど……」

「最後の部分だけ詳しく説明してくれるかな？」

最後に余計なことを言ってしまったと後悔してももう遅い。詳しくを強めに言いながら先程のユーリと同じような黒い笑みで近づいてくる簪。

「説明するからとにかく落ち着け！」

「ふう。じゃ、説明するよ。俺が寝る時は必ず布団や腹の上でシュテルたちは寝てるんだけど、朝起きると隣にシュテルたちが寝てるんだよ。シュテルとレヴィが隣

で寝てて、次の日はユーリとディアーチエが隣で寝てるんだよ。俺自身はまあいつかって流してる」

お茶を飲んで一息ついたところで説明を開始する

「ふうくん……。そうなんだ……」

(ねえ、簪がまだ不機嫌なんだけど。誰か助けて)

(マスター一人で頑張って下さい)

(ファイト!ご主人!)

(ご自分でまいた種なんですからご自分でどうにかしてください)

念話で救援を要請したところ、拒否された。しかもなぜか最後のユーリだけ冷たいと思うのは俺だけだろうか。

「シユテルたちはライバルとして見たほうがいいかな……」

念話で話してる間に簪はなにか言ってるがよく聞こえなかった。

「で、簪。納得してくれたか？」

「全然してないよ♪」

「ごめんなさい」

笑顔で言われると逆にすごい威圧を感じてすぐに謝る俺である。

「それじゃあ今夜は私も龍輝の布団と一緒に寝るね」

「え？いや待て、待ってください。なんで簪も一緒に寝ることになるんですか

？」

「龍輝は私と一緒に寝るのは嫌？」

「う……」

頬を赤くし、涙目の上目遣いで見てくる簪。

(そんな目で見えるなあ！)

「一緒に寝ようか・・・」

「やった！」

簪の上目遣いに負けた・・・

「じゃあ、はやく寝よ♪」

「はいはい・・・」

一緒に寝ることが決まった後の簪はすごい上機嫌で笑顔である。

（寝る準備に時間がかかるはず・・・。その時間を利用して寝る時間を少しでもなくすしかない。そうでもしないと俺は理性との戦闘で勝てるかわからない）

「簪、寝る前の準備をしと「できたよ」はやっ!？」

考えた作戦が音をたてて崩れた。

「準備できてないのは龍輝だけだよ」

咄嗟に布団を見るとすでにシユテルたちが寝る態勢に入っていた。簪は寝間着に着替え終わっている。

「わかったよ、すぐに準備するよ」

(こうなったら俺が寝る準備を遅らせて・・・)

「まさか準備を遅らせようなんて考えてないよね・・・」

「まつさかく。そんなことしないよ。さあ、はやく寝ようか」

簪の目に光が灯っていない状態で考えを見破られた。

「そっか♪疑ってごめんね」

(あつぶねえく。咄嗟に言いくるめたけどシユテルたちにはバレてるな。みんなして睨んでるし)

(マスター、カンザシには黙っておきます)

(すまん、ありがとう。シユテル)

シユテルが念話でそう言ってくれたから安心・・・(なので後で私たちに頭ナデナデしてください)したのもつかの間、シユテルが言ってきた。断ったら簪に言うという脅迫付きで。さすが『理』のマテリアルである。

(さすがシユテルは計算高い・・・。シユテルに弱みを握られると後でなにをお願いされるかわかったもんじゃないから今後は気をつけよう)

そう思った俺だった・・・。

「じゃ、寝ようか」

「うん♪」

布団に入る簪と俺。

「龍輝、こつち向いて」

「向かい合わせはさすがに勘弁してもらえませんか・・・」

「じゃあ、仰向けで」

「まあ、それなら」

仰向けになると簪が左腕に抱きついてきた。

「あのっ！簪さん!?!なんで俺の腕に」

「最後まで言わないで。私だって恥ずかしいんだから・・・／＼／＼」

「お、おう／＼／」

「私ね、龍輝と一緒にいるとすごく落ち着くんだ」

「そうか」

「だから、こうしててもいい？」

「いいよ」

「ありがとう。ところで龍輝、龍輝のあのISはガンダムだよな？」
「やっぱり簪はガンダムとか知ってたか。そうだよ、俺の専用機はガンダムだよ」

「私もガンダムを再現しようとしたけど難しくできなかったんだ」

「なにをベースにする気だったの？」

「んー、フリーダム」

「そりゃ難しいわ」

「龍輝のガンダムはエクストリームガンダムベースでしょ？あれもフリーダムと同じように複雑だと思っただけ。あの子ももう少して完成なんだけどなかなか進まないんだよな」

「まあ、確かに複雑だったな。ある人物がちよつと手伝ってくれたから予想より高性能になったけどな。わからないところがあればいつでも言ってくれ」

「ありがとうね」

「おう。じゃあ寝ようか。おやすみ、簪」

「おやすみ、龍輝」

朝、目を覚ますと、簪が俺の腕と足にしがみついていた。

(これじゃあ動けない。しかも抱き枕にされてるし)

「っ！」

(なんだ、今の。殺気に似たような視線を感じたが・・・)

(マスター、おはようございます。先程の視線はいつたい)

(シユテル、おはよう。さっきの視線だが俺もわからない。クラスでは女子からの視線が多いけど、簪といるときだけ妙な視線は感じてたんだ。こんな殺気染

みた視線は初めてだったけどな)

「んう、あ、龍輝おはよう」

念話でシユテルと話してると簪が起きた

「おはよう、簪。ところではやく離れてくれないか？」
「え？・・・っ！／／／」

状況を確認した簪がすぐに顔を真っ赤にした

「ご、ごめん！」

飛び起きる簪

「いや、大丈夫だよ。それより、簪はよく眠れたか？」
「う、うん。よく眠れたよ」

「そうか、それは良かった。さ、はやく着替えて朝飯食いに行こうぜ」
「うん！」

(さっきの視線は簪に言わない方がいいな。簪に被害が及んだら大変だ

し)

さ、今日も一日頑張りますか！

お気に入り登録100人突破記念

「さて、ここが束さんに指定されたポイントのはずだけど」

ども、姫終龍輝です。俺は今、数時間前に束さんからメールで『リュウ君に会わせたい人がいるからこのポイントに来てね』と届いたので織斑先生から外出許可を貰い、指定されたポイントに来たのだ。ちなみに海辺だ。

（会わせたい人って誰なんだろう……。見当もつかん）

『ハロー、リュウ君』

「ッ!?!」ビクッ!

何もないとところから急に声がした。

（どこから束さんの声がつ!?!）

周りをキョロキョロしてるとまた東さんの声がした。

『やははは、驚かせてごめんね。ちよつと待つてて』

水面に黒い影が見え、水面から出てきたのは潜水艦だった。

「ああ、そーいや、東さんのラボは潜水艦だったな」

前に一度行った時のことを思い出していると、ハッチが開いて『どうぞ』という東さんの声がしたので潜水艦の中に入る。

「やあやあ、久しぶりだね〜リュウ君!」

「お久しぶりです、東さん」

東さんにあいさつをした後、後ろから気配を感じ、振り替えると女の子に抱きつかれた。

「お久しぶりです、龍輝お兄様」

「クロエも久しぶり。あと、気配を消しながら近づかないでくれませんかね

？」

「それでも気配を感じとったお兄様も流石です」

「ちよつとびつくりしたけどね」

「クーちゃん、クーちゃん。私のこともお母さんって呼んでいいんだよ？」

「束様は束様です」

「そのやりとり以前も見たぞ・・・」

俺に抱きついてきた少女はクロエ・クロニクル。以前束さんが研究所を破壊した時にいた子を拾ってきたんだとか。クロエは年齢的に俺の年上になるのに、兄と慕っている。以前その事を聞いたなら「お兄様はお兄様です」と言われ、年齢は言わない方がいいとその時思った。

「ところで束さん、俺に会わせたい人って誰ですか？」

「おお、そうだったね。んじやちよつと待ってて〜」

「わかりました」

なにか準備でもあるのか東さんが奥の部屋に入っていった。俺は近くのイスに座り、東さんを待つてると。

「お兄様、お茶です」

「お、ありがとうございます。クロエ」

クロエがお茶を持ってきてくれた。お茶を一口飲むと、体の真まで暖まる。

「うまいな」

「ありがとうございます。練習しておいしく淹れることができるようになったんですよ」

「料理の方はどうだ？」

「個人的にはまだまだだと思っっているのですが、東様はいつもおいしいし、か言ってくれなくて」

「じゃあ、今日のお昼食べさせてくれないか？腕を上げたクロエの料理を食

べたいからな」

「はい！頑張って作ります！」

「楽しみにしてるよ。料理でわからないところがあれば言ってくれよ」

「ありがとうございます！」

以前、ラボにいた時にクロエに料理を教えていた。俺は料理は出来るけど一夏ほどではないので人に教えられる立場ではないと思っているのだが、クロエが教えて欲しいと言ってきたので教えた訳だ。

「お待たせ、リュウ君」

奥の部屋に入っていった東さんが戻ってきた。

「東さん、会わせたい人はどこですか？」

「えつとね、今私の後ろに隠れてるんだけど」

（東さんの後ろに隠れられるほど幼い子なのか？）

と思った次の瞬間

「お、お兄ちゃん」

「え？」

声のした方を見ると東さんの後ろから顔を出している少女が見えた。

「え、まさか、琴音か？」

「うん、久しぶり。お兄ちゃん」

東さんが連れてきた少女はまさかの俺の妹の姫柊琴音（ひめらぎことね）だった。

「な、なんで琴音が東さんのところにいるんだ？ 琴音は中学校どうした？」
「私が説明するよ、リュウ君」

動揺しながら疑問に思っていることを聞くと東さんが説明してくれる。

「えつとね、コトちゃんは今中学校で軽いイジメにあってるの」

「なっ!?!なんで琴音がイジメられるんですか!?!まさか・・・」

「そのまさかだよ、リユウ君。イジメの理由はね、君がI Sを起動させちゃったからなんだよ」

「やっぱり俺のせいで琴音がイジメられてたか。で、イジメの主犯格はどうせ女性権利団体の娘とかですよね」

「ご名答だよ。女性権利団体の娘を筆頭にいろんな嫌がらせを受けてきたんだよ。コトちゃんは」

「俺のせいでごめんな、琴音」

「ううん、お兄ちゃんが悪い訳じゃないよ」

「で、東さんが琴音と一緒にいる理由は何らかの方法で琴音が東さんに連絡をとり、ラボに運んだというわけか」

「正確には運んだというより拉致られた感じだったけどね」

「東さん、どういうことか説明してくれませんか?」

最後に琴音が言ったことを束さんに問い詰める俺。この段階で気づいた人はいるかもしれない、だからあえて言おう。俺はシスコンだ!!

「え、えつとく、リュウ君、顔が怖いよ〜」

「大事な妹を拉致るなんて、騒ぎがおきたらどうするんですか」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと人目のつかないところでやったから☆」

「拉致ったこと認めてるじゃないですかっ!!」

「うきゅツ!!」

めつちやドヤ顔で言い放った束さんにチョップする俺。

「うう、リュウ君痛いよ。割りと本気でやったよね?」

チョップした部分を擦りながら聞いてくる束さん。

「はい。本気でやりました。で、俺を呼んで琴音と再会させてどうするつもりなんですか?」

「よくぞ聞いてくれました！実はコトちゃんは我がラボでは生活できないのだよ。理由はわかるね？」

「逃亡生活だから中学生の琴音を同伴するわけにはいかないってところですよね」

「正解☆だからコトちゃんはリュウ君のところで生活ってことで」「は？」

束さんの突然の発言に固まる俺。

「え？琴音がIS学園の寮の俺の部屋で生活？いやいやいやいや、ちよつと待つてください束さん」

「お兄ちゃんは私と生活するのは嫌？」

上目遣いで見てくる琴音が言ってくる。

「いやいや、そんな事はないぞ。妹よ。ただ、寮長が許してくれるかどうかわからないんだよ」

「それなら問題ないよ！今朝、ちーちゃんに言ったらOKだって！」
「準備が早すぎる・・・」

そこで俺は気づいた。外出するのに織斑先生から許可をもらった後、寮長室を出る際に「久しぶりの再会だな」って言ってたことを。あれは東さんとの再会ではなく、琴音との再会の意味だったのだ。

「寮長から許可を貰っているのならいいか」

「じゃあ、お兄ちゃん。これからよろしくね♪」

「おう。また一緒に生活できるな」

「うん！」

『皆様、お昼の用意ができました』

クロエが通信で言ってきた。

「はい！すぐに行くね〜クーちゃん！ほら、リュウ君もコトちゃんも早く

！」

「すぐに行きます！クロエの料理楽しみだな」

「クロエ姉ちゃんの料理はおいしいよ。私も教えてたからね」

「琴音からも教わったのか。こりや早く食べたくなくてきたな。急ぐぞ、琴

音！」

「うん！」

琴音と話していたらいつの間にかお昼だったようで、クロエが作った料理を食べてから帰ることに。ちなみにクロエの料理はすごくおいしかったらしい。

「そういうばお兄ちゃん、シユテルたちはお留守番なの？」

「いや、留守番でも良かったんだが皆が一緒に行くときかなくてな。目立つから量子化して……」

「ど、どうしたの、お兄ちゃん。急に顔が青くなっただけ。まさか……」

「東さん、このラボで模擬戦ができる場所ありますか？」

「あるよ、着いてきて」

顔を青ざめながら東さんの後を着いて行って、広い場所に出た。そこで俺は皆に退室して貰い、シユテルたちを呼び出す。目の前に光が集まっていき、シユテルたちが姿を現す。全員武装した状態で。

「マスター、どれだけ私たちを待たせるのですか？」

ルシフェリオンを構えながら聞いてくるシユテル。

「僕たちずっと待ってたんだよ」

バルニフィカスを大鎌モードにするレヴィ。

「主よ。なにか言い分はあるか？」

アーチエ。

シユベルトクロイツに黒い光を集めて魔力砲の発射準備万全のデイ

「うふふふふ」

ユーリに至っては新武装《魄翼》を展開して黒い笑みだ。

（案の定、皆怒ってるな。こうなったら戦うしかないな。勝てる自信マジでないけど）

「皆、ごめんな。正直に言う、忘れていた。だから、鬱憤をはらしてくれ。俺も全力で応えよう！」

俺はバハムートを展開する。

「マスター！」

「ご主人ー！」

「主ー!」

「マスター!」

一斉に攻撃を仕掛けてくる皆に俺も立ち向かう。結果として俺は負けました。途中までは良かったんだがユーリの新武装《魄翼》になす術もなく敗れた。《魄翼》を作ったのは俺だがあそこまでの高性能とは思ってもみなかった。

「忘れていて申し訳ありませんでした。シユテルたちは琴音のこと聞いてたか?」

「はい。すっかりと」

ボロボロの俺がシユテルたちに謝りながら琴音のことを聞くと、量子化してても話は聞こえるらしく、最初から最後まで聞いてたらしい。

「私たちはいいのですが、カンザシにはお伝えしなくてよろしいのですか?」
「そうだな、簪には言っとくか。メールしとくわ。『俺たちの部屋に一人増え
ても大丈夫か?』と」

ピピッ!

「返信はやっ!?!どれどれ」

送って数秒で返信が来たことにびっくりしながらメールを見ると『女の子?』とあつたので『俺の妹』と返信したらまたすぐに返信が来て『いいよ』とあつた。

「よし、相部屋の女子から許可もらつたぞ。琴音」

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんの相部屋の人つて女の子?」

「あの、琴音?目に光が灯つてないよ?」

「女の子?」

「はい、そうです・・・」

「へえく・・・」

(まづい・・・)

言い訳する。

そう思った俺は過去の簪の時と同じように目に光が灯っていない琴音に

「琴音、相部屋が女子というのは仕方ないんだ。部屋がいっぱい女子と相部屋するしかなかったんだ。考えてみる、IS学園は女子高だぞ。そこに異例の男子が二人も入ったんだぞ。仕方ないと思ってくれ。頼む」

「まあ、確かに仕方ないよね。そこに私が住まわせてもらえるんだからわがまま言わないよ」

「わかってくれただけで感謝してるよ」

簪の時のように大事にならなくてよかったと思つた。

「じゃあお昼も食べ終わって一暴れしたから帰るか。東さん、琴音のことありがとうございました」

「私からもありがとうございました」

兄妹揃って頭を下ろしてお礼を言う。

「いいってことよ。じゃあ、リュウ君、コトちゃんのことよろしくね」

「はい！」

「ところで学園にはどうやって帰る？私が送る？」

「マナで帰ろうかと思ってます。そして後者はどうやって送るのが気になるんですが」

「送り方は移動用ロケットだよ」

「マナで帰ります！」

束さんの送り方は異常だと思った。

（てかロケットを移動用としてつくるか普通!? さっきから思ってること失

礼だな、俺）

「うん、確かに失礼だね」

「さらっと心を読まないでください。ごめんなさい」

「罰として私が送るね」

「罰って・・・」

「お兄ちゃん、これはお兄ちゃんが悪いよ」

というわけで東さんお手製の移動用人参型ロケットで学園に帰ることに。
ちなみに琴音も一緒だ。

「あの、東さん！これって安全ですよね!？」

「大丈夫だよ、ちよつとGがかかるくらいだから」

「そのGってちよつとじゃないよね!?!めっちゃかかるよね!？」

「お兄ちゃん、口閉じてないと舌嚙むよ」

「まさか琴音はすでにこれに乗ってるのか」

「うん、ここに連れてこられたときにね」

「おいこら天災科学者ー!! 中学三年生になんてもん体験させてんだー!!」

「舌嚙んでも知らないよ、リュウ君。では、発射☆」

ピッ!

ゴオオオオオオンツツツ!!!

「うおおおおおおおっ!?」

ロケットに乗って琴音から聞いた瞬間東さんに文句言つてると当の本人は構わずにロケットの発射スイッチを押し、俺と琴音に乗せたロケットはIS学園に向かつて発射された。

その後、舌を噛まずに無事にIS学園に着いたがロケットから降りた瞬間織斑先生からこっぴどく叱られた。織斑先生のお叱りが終わった後、部屋に戻り簪に琴音を紹介した。上手くやっていけるかなと思っていたが、案外早くに仲が良くなり、琴音は簪のことを「簪お姉ちゃん」と呼ぶようになった。

簪と琴音が話に花を咲かせる間に俺は、琴音をイジメてた奴らにどん

な復讐をしてやろうかと考えていた。

（復讐するとしてももう中学には連絡いつてるから大丈夫か。イジメてたやつが急にいなくなっただけに行っただかと思っただら、I S 学園に転校したと聞いたらどうなるかな。女性権利団体が琴音を誘拐して俺と琴音を殺そうとしてくるかもしれないからな。琴音には自衛の武装を渡しておくか）

まだ琴音は中学三年生だが、I S 学園で保護するということ形になった。もちろん、I S 学園で中学の勉強をして、来年 I S 学園に入学するという話にもなっている。

第十話

朝食を食べ終え、簪と通学中。

「ねえ、龍輝。右目隠さなくていいの？」

簪が心配そうに聞いてくる。それも当然、俺は今前髪を少し整えたけど右目は隠していない。

「このままでいいんだ。この秘密はいつかバレるだろうからな。それに、この右目にも向き合わなきやいけないと思ってるな」

「そっか。右目の赤い瞳、きれいだよ」

「ありがとう」

「そういえば、中国から代表候補生が転入してくるらしいよ」

「中国か・・・」

(中国と聞くとあいつが頭に浮かぶが……。はたして誰が来るのやら)

簪から転入生が中国だと聞いてある人物を思い出す。

「じー……」

「な、なんですか？ 簪さん」

「中国の代表候補生は龍輝と何かしら関係があるよね？」

「なんでわかった？」

「女の勘だよ」

「へ、へえ……。ま、まあその代表候補生が俺が知ってるやつとは限らないかな。それにあいつは一夏狙いだからな」

(女の勘というのはどうしてこんなにも鋭いのだろうか)

その勘が好きの人に対することならより鋭くなるのは当然だろう。

「最後の言葉を聞いて安心したよ」

「なんて？」

「なんでもない」

簪の言葉が聞き取れなかったので再度聞こうとしたら「なんでもない」でしめられた。

「そつか。とりあえず早く教室に行くか。校舎まで入って遅刻したらシャレにならないからな」

「そうだね」

「んじゃ、またな」

「じゃあね」

俺と簪はそれぞれの教室に向かった。俺は教室に着いて入りながらあいさつをする。

「おはよー」

「おう、龍輝。おは．．．」

「り、龍輝．．．」

「お二人ともどうかありませんでしたの？あつ、龍輝さんおは・・・え？」

あいさつをすると一夏から順に箒、セシリアがあいさつをしようとするが、三人とも途中で固まってしまった。否、クラスの全員が固まってしまった。理由は簡単、龍輝の目を見たからだ。

「り、龍輝。その目はいったい？」

「自己紹介の時におっしゃっていた右目の事情とはそのことだったんですの？」

箒とセシリアが動揺しながら聞いてくる。が、一夏だけは。

「出すようにしたんだな。その目」

「ああ。覚悟を決めたよ」

そう、一夏は龍輝の目を知っていたのだ。

「皆、この右目はカラーコンタクトじゃないんだ。正真正銘俺の目はオッドアイ

なんだ。気味が悪ければ言ってくれ、次からは右目を隠すようにするから」

「だからそれを嫌うやつはいないって。なあ、皆！」

一夏がクラスの皆に聞く。すると次々に。

「織斑君の言うとおりだよ！姫終君！」

「最初は驚いたけど嫌うことなんてないよ！逆にキレイで見とれちゃった！」

「赤と青の瞳もイケてるよ！」

「みんな・・・」

「な？言つたら？」

「ああ。みんなありがとう」

(簪、君の言うとおりだったよ)

「一夏はこのことをいつから知ってたんだ？」

「中学の時だよ」

「それなら私も知らないのは当然か」

「箒と再会しても龍輝の目のことは黙っとくつもりだったしな。龍輝に口止めされてたし」

「口止めとは用心深いな」

「当たり前だ。この目で友達が一人減ると思ってみろ。絶望だぞ」

「いや、そこまでか・・・」

「まあ、この目の話は終いだ。もっと聞きたいことがある人は放課後とかにでも来てくれ」

「「はーい！」」

クラスの半数以上が返事をしたことに思った。今日は早く帰れないだろうなど。

「そーいや今日、中国の代表候補生が転入してくるんだってな」
「その子のクラスは2組らしいよ」

その情報をどうやって入手したのだろうか。

「中国か・・・」

俺の話聞いた一夏が考え始めた。

「一夏、中国の代表候補生があいつとは限らないぞ」

「そ、そうだな」

二人して中国で心当たりがある人物を想像するがそれはないと思いたい。

「今度のクラス対抗戦は私たち1組が優勝よ！」

「そうね！なんてったって私たちのクラスには専用機持ちが三人もいるんだから！」

「専用機を持つてるのは1組と4組だけでしょ？楽勝よ！」

クラスの女子が言い始める。

「ひどい言い方になってしまいが忘れるなよ。俺らはあくまで応援だ。戦うのは

一夏だぞ」

「大丈夫だよ、姫終君！」

「応援頑張るから！織斑君、頑張つて！」

「お、おう。なあ、龍輝。俺、お前にフルボッコされたのになんでクラス代表なんだよ？」

「前にも言ったろ？俺は面倒だったから辞退したし、セシリアは一夏に任せるつて辞退したからだよ」

「お前は昔から面倒事を俺に任せてきたよな」

「くだらない悩み事を俺に相談してきたのはどこのどいつだ？」

一夏が昔のことを言ってきたので俺も一夏に昔のことを言つてやる。

「お前たちの話はどつちもどつちだぞ」

「その通りですわね」

話を聞いていた箒とセシリアに呆れられていた。

ガラッ!

「その情報古いよ」

まだ先生たちが来る時間でもないのに扉が開き、聞き覚えのある声があったので一夏と俺は扉を見る。

「あれ?」

「マジか・・・」

「2組にも専用機持ちが増えたのよ。この中国代表候補生、鳳鈴音がね!」

そこに立っていたのは一夏のセカンド幼馴染で俺の友人の鈴だった。

第十一話

「この中国代表候補生、鳳鈴音がね！」

腰に手をやり、胸を張る鈴。

「鈴じゃないか！」

「久しぶりね、一夏」

「中国で元気にやってるかと思つてたたまさか代表候補生になつて日本に戻つてくるとはな」

机に寄りかかりながらそういう俺。

「あら、龍輝も久しぶりね」

「久しぶりだな、鈴」

鈴に顔を向け、右目を見せる。

「ちよ、あんた、その目どうしたのよ!？」

「うん、予想通りの反応をありがとう」

中学時代を一夏と鈴と俺の三人で過ごしたが右目を知っていたのは一夏

だけだ。

「一夏！あんたは龍輝の目のこと知ってたの!？」

「そうだよ」

「二人の秘密ってことだったのね」

「理解が早くて助かるよ」

(鈴はこういうところは鋭いからな)

「龍輝、あんた今失礼なこと考えてない?」

「そんな事ないぞ」

(危ない危ない。なんでこうも皆は俺の考えを読むの?)

「そんな事より鈴、入り口を塞ぐとある人に迷惑がかかるぞ」

「ある人って誰よ」

「姫柊の言うとおりだ」

せつかく遠回しに注意してやったのに無駄だったようだ。鈴は顔を青くしながら声がした方向、後ろに顔を向けると織斑先生が立っていた。

「ち、千冬さん!？」

スパアアアアンツツ!!!

教室に鳴り響く音。久々の出席簿アタックが鈴の頭に炸裂した。

「学校では織斑先生と呼べ。それと早く自分の教室に戻れ」

「は、はい……」

叩かれた部分を涙目で擦りながら教室を出ていきながら。

「二夏、また来るから！」

そう言い残していった。

「お前ら席につけ。HRを始めるぞ」

「これで午前の授業を終わりにする」
「起立、礼！」

『ありがとうございます！』

クラス代表の一夏の声に合わせて礼をする。

「龍輝、昼飯食いに行こうぜ」

「おう、行くか」

「私たちもいいか？」

食堂に向かおうとすると箒が声をかけてきた。隣にセシリアもいる。

「おう、んじや四人で食うか」

「あ、ああ。悪いな、一夏と一緒に飯を食いたいだろうに」

後半を箒に小声で言う。

「か、構わない。龍輝にはあの中国のやつについて聞きたいことがあるからな」

箒も同じように小声で言ってくる。

「察してると思うが鈴は一夏狙いだからな」

「またライバルが増えた・・・」

そう言い、うなだれる箒。

「俺としては箒が一夏とくつついて欲しいんだがな」

「な、ななななな／＼／＼!?」

顔を真っ赤に染め、慌ててる箒。

「龍輝はなぜ私に協力してくれるのだ?」

「箒とは一番古い付き合いだし、一夏もなんとなくだが箒を意識してる時があるしな。それに、一夏はセシリアと鈴には合わない気がするんだよ。だが箒とは合う気がするんだよ。一番信頼しているからなのかわかんがな」

「龍輝・・・」

「つ／＼／ほら、さっさと食堂に行くぞ。一夏たちに置いてかれる」
「あ、ああ」

(我ながら恥ずかしいことを言ってしまったな)

顔を少し赤くしながら少し前にいる一夏たちに今の自分の顔を見られな
いように下を向く。

「ふふ」

「な、なんだよ」

「いや、龍輝があそこまでカッコいいことを言うのだなと思ってな」

「うるせつ／＼／」

「ありがとう、龍輝。おかげで少し楽になったよ」

「そりゃ、よかった」

「たまにカッコいいことを言うのも悪くないと思うぞ」

「その通りだよ、龍輝」

「どわっ!？」

「えっ!？」

箒と話してたら後ろから突然声が出たことに驚く箒と俺。二人して左右に飛びながら後ろを確認すると簪がいた。

「か、簪。驚かすなよ」

「龍輝の姿が見えたから追いかけたの。びつくりした？」

「うん、マジでびつくりした」

簪と話してる間に箒は呼吸を整えている。

「龍輝、その者は？」

「俺のルームメイトだよ」

「篠ノ之さん、だよ。篠ノ之博士の妹さん」

「あ、ああ。あの、お前は？」

「私は更識簪。龍輝のルームメイト。よろしく、篠ノ之さん。私のことは簪と呼んでいいから」

「あ、ああ。私は篠ノ之箒だ。私のことも箒と呼んでくれて構わない。よろしく、箒」

狙っている相手が違うからかすぐに仲良くなる箒と箒である。一方、龍輝は。

（案外早く仲良くなったな）

と思っていた。

「箒、昼飯は箒と食べるから一夏に言っといてくれ」

「わかった。ではまたな、箒」

「うん、またね。龍輝、よかったの？」

箒が走って一夏たちのところに向かっていたところで箒が聞いてきた。

「いいよ、箒が気ままずくなるだろうしな。一人で食べるんだったら一緒に食べ

「た方がご飯もおいしいだろ」

「ありがとう、龍輝／＼／」

「どういたしまして」

顔を赤くしてお礼を言ってくる簪が可愛いと思った俺だった。

「んじゃ早く食堂に行くか。午後の授業遅刻したら織斑先生から鉄槌がくだりそうだからな」

「それ、織斑先生に言つといてあげようか？」

「すいません、マジで勘弁してください」

「冗談だよ」

笑っている簪の顔を見てこの笑顔を守りたいと思う俺だった。

その後、食堂での一夏たちの席が騒がしかったのは言うまでもない。

二日後、束さんと会って琴音と一緒にI S学園の寮に帰った俺は、簪に琴音を紹介して琴音の専用機を作る準備に入った。

（確か琴音はガンダムだとSEEDが好きだったっけ。中でもアカツキは大好きだって言ってたな。よし、専用機はアカツキでいくか。オオワシパックにシラヌイパックとオリジナルパックもつけるか）

琴音は簪と一緒に寝ているのでそのままアカツキを製作を始める。

次の日、俺は一夏たちに琴音を紹介するついでに琴音の専用機を披露するためにアリーナにいる。

「みんな、今日は俺の妹を紹介するよ。琴音」

「は、はじめまして。姫終琴音です。いつも兄がお世話になっております！まだまだI Sについては素人なので、みなさんよろしくお願いします！」

恥ずかしながらあいさつをした琴音に一同は驚いていた。唯一琴音のこ
とを知っていた簪は拍手をしている。

「り、龍輝に妹がいるとはな」

「二夏、お前は知らなかったんだな」

「知らなかったよ」

簪が一夏に龍輝の秘密をまた知っているのかと思い、一夏に聞いたが、この事は一夏には話していなかったので知らないのも無理はない。

「龍輝さんとはまた違った雰囲気ですわね」

「くっ・・・私より胸が大きいじゃない・・・」

鈴は琴音の胸を見て悔しがっていた。琴音の胸は箒ほどではないが、大きいほうである。

「そして、琴音。今日は琴音にこんなプレゼントがあるんだ」

そう言い、ポケットから金色のプレスレットを琴音に渡す。

「お兄ちゃん、これってまさか・・・」

「琴音の思ってる通りだよ。それは琴音用の I S だ」

「「ええっ!?!」」

直、一晩で I S を作っちゃうなんてびっくりだよ
「龍輝、昨日から徹夜で何をやってるのかと思つてたら I S 作つてたんだ。正

「コアの方は東さんから貰つてたからな。すぐに完成したよ。琴音、I S を展

開してみてください。こいつの名前はアカツキだよ」

「え？金色でアカツキって・・・まさか!？」

「新しいISのお披露目だ！派手にやるぞ、琴音！」

「うん！おいで、アカツキ！」

上にかかげたプレスレットが光だし、琴音を包み込み、光が収まったら黄金のガンダムが姿を現していた。

「アカツキガンダム。琴音ちゃんには合ってるね」

「ガンダムがもう一機!？」

「ガンダムって龍輝のやつだけじゃないの!？」

「この世で唯一ガンダムを作れるのは龍輝だけってことか」

「黄金のガンダムとはな」

簪が冷静に琴音のIS、ガンダムの名前を当て、セシリアと鈴が驚いており、一夏と箒は感心していた。そんな時、アリーナの指令室では織斑先生と山田先生がモニターで見れていたが、山田先生は驚いており、織斑先生は笑っていた。

「お兄ちゃん、すごいよ！私、アカツキに乗ってる！」

「アカツキが好きだったのを思い出してな。それで琴音の専用機はアカツキにしようって決めてたんだ。他のパックを展開してみてくれ」

「わかった！」

アカツキのパックパックをオオワシからシラヌイに換装する琴音。

「シラヌイパックは重力下でも使用可能だぞ」

「重力下でドラグーンが使えるなんてすごいね」

簪が驚きながら呟く。

「あれ？お兄ちゃん、見たことも聞いたこともないパックが一つあるんだけど」

「ああ、それは俺が考えたオリジナルパックだ。展開してみろ」

「『イフリートパック』？とりあえず換装！」

黄金だった装甲がやや赤みがかかり、間接部の装甲が黒から赤に変わり、バックパックはドラゴンを彷彿させる赤い翼が現れ、手には炎を纏った巨大なハルバード『カマエル』が握られていた。

「そのバックでもヤタノカガミは使えるぞ。背中の翼はデイスティニーをベースに作った。カマエルはIS非展開でも武器として使える。カマエルの炎はルシフレリオンのデータを使ったんだ。あと、カマエルは砲撃形態『メギド』に変えられるぞ。威力はルシフレリオンのデイズターヒートのおよそ二倍だ」

「凄すぎて言葉が出てこないよ、龍輝」

「こんなのを一晩で……」

「ウソでしょ……」

簪が驚きを越えて呆れており、セシリアと鈴は頭をかかえている。一夏と簪に関しては簪の言う通り、言葉が出てこなくなっている。

「琴音、少し俺と模擬戦してみるか？」

「いいの？ お兄ちゃん」

「さつきからウズウズしてるのバレてるぞ」

「あつ、やつぱり？じゃあお兄ちゃん、お願い」

「おう。んじゃ行くぞ！」

　　琴音の専用機、アカツキは不具合をすることもなく、琴音にマッチしており、模擬戦では俺に負けてしまったが、代表候補生と同じぐらいの実力を見せた琴音に一夏たちは驚いていた。

第十二話

「琴音との模擬戦を終えた俺はバハムートを解除し、一夏たちに特訓のメニューを伝える。」

「琴音は休憩で簪は見学な。一夏たち全員は同じことをしてもらおうぞ」

「どんなことするんだよ、龍輝」

聞いてきた一夏に俺はニヤリと笑う。

「なに、一夏たちでチームを組んでもらってそのチームワークがどれくらいなのか知りたくてな。一夏たちはISを展開しろ。簪は訓練機な。俺はこの二つを使う」

ルシフェリオンと魄翼を展開する俺。

「え、まさか龍輝さんはIS無しでISを展開してるわたくしたちと戦うとい

うのですか?」

「その通りだよ、セシリア」

「あんたバカじゃないの? そんなの特訓にもならないじゃない」

鈴が呆れてながら言ってきた。

「ところがなるんだな。代表候補生としては二人目の男性操縦者のデータをとれるチャンスだぞ。どうせ国からデータをとってこいとも言われてるんだろ」

俺の言ったことが凶星らしく、二人の代表候補生は顔をしかめた。

「そ、そんなに言うんなら仕方ないわね。早くやりましょ」

「鈴さんの言う通りですわ、早く始めましょ」

「データとりに夢中で一夏と筈を忘れるなよ」

全員武器を構え、セシリアは空に向かった。鈴の甲龍には衝撃砲が備わっているが、双天牙月を構え地上にいる。

（遠距離の攻撃はセシリアに任せて鈴は接近戦のデータをとるってどこか。まあ、データはとらせないがな）

その頃、観客席から見学をしている簪と琴音は仲良く喋っていた。

「うわゝ．．．お兄ちゃんマジだ．．．」

「え、そんなにすごいのか？あの杖と五枚の翼は」

「うん。あの杖は『ルシフェリオン』。杖じゃなくて槍に近いかな。エクセリオンモードじゃないだけまだマシの方だよ。ルシフェリオンは全てを焼き尽くす炎を出して、その炎を収束して撃つ砲撃が強力なの。五枚の翼は『魄翼』といって、機動力と防御力がずば抜けて高いの。防御力はどんな攻撃も防ぐってお兄ちゃんが言ってたよ。魄翼での最大加速は瞬時加速を上回るって。一夏さんたちはたぶんなす術もなく一瞬で負けると思う」

「へ、へえゝ．．．」

琴音の分かりやすい解説を聞いた簪はこれからの惨劇を思い浮かべ、顔がひきつっていた。

「一夏、あの槍に近い物は知っているか？」

『いや、俺が知ってるのはバルニフィカスだけだ』

簪は訓練機の打鉄を展開しており、手には打鉄の日本刀に近い武装『葵』を龍輝に向けている。通信で一夏にルシフェリオンと魄翼のことを聞いたが、残念ながら詳細はわからないままだ。観客席での琴音の言葉は一夏たちには聞こえていない。

「んじゃ、特訓を始めるぞ。よーい、スタート！」

龍輝の気の抜ける合図と共に上空にいるセシリアがスターライトmk. IIIの引き金を引き、発射されたレーザーが龍輝に襲いかかり、爆発が起こる。

「やっぱり特訓にならなかったじゃない」

鈴が風天牙月を下ろす。

「龍輝、やっぱりIS同士で試合とかしないと特訓にならな・・・」

ドゴオオンツツ!!!

「うおっ!?!」

「な、なにっ!?!」

「えっ!?!」

一夏が心配しながらいまだに煙が上がっている龍輝のいる場所に向かおうとした瞬間、一夏の真横になにかが落ちてきた。急な出来事に三人は驚く。落ちてきた場所を見ると・・・。

「え、セシリアっ!?!」

そう、落ちてきたのは上空でレーザーを放ったセシリアだった。

「油断しましたわ……」

「お前、空にいたよな!?何があつた!?!」

一夏がセシリアに駆け寄り、事情を聞く。

「前の模擬試合より弱くなったか?セシリア」

「え?な、なんで龍輝が空にいるんだよ……」

セシリアは一夏に助け起こされながら依然として空を見上げてると思つたら空から声がしたので空を見上げると、龍輝が宙に浮いていた。箒と鈴は驚いており、固まっている。

その瞬間を観客席で見ていた簪は驚いていた。

「龍輝、何をしたの?」

「やっぱり目で追えなかった？ 簪お姉ちゃん」

「まさか、琴音ちゃんは龍輝が何をしたのかわかったの？」

「うん。あの速度なら私でも目で追えるよ。簡単にいうと、お兄ちゃんはセシリアさんが放ったレーザーが当たる直前に魄翼を使って一瞬でセシリアさんの後ろに回り込んで、ルシフェリオンをメイスのように使ってセシリアさんを叩いたの」

「龍輝容赦ないね。データとりができるとか言ってたのに」

「お兄ちゃんは初めからデータなんかとらせないつもりだったと思うよ。だから容赦なくやったって感じ。今度手合わせしてもらおうかな」

琴音の最後の言葉を聞いた簪はやっぱり兄妹だから琴音も龍輝と同じぐらいの身体能力を持っているのではないかと思っただった。

「それじゃさっさと終わりにするか。ルシフェリオン、チャージ開始」

ルシフェリオンに炎が集まっていく。

「チャージなんかさせないわよ！ 龍砲！」

甲龍に装備されている衝撃砲が龍輝に発射される。

「遅い」

龍輝は衝撃砲を難なくかわす。

「うそ!？」

「チャージ中は動けないとは誰も言っていないぞ! ルシフェリオン、チャージ完了! 焼き尽くせ! デイザスターヒート!!」

ルシフェリオンから収束砲が一夏たちに発射され、一夏たちが固まっていた場所は大爆発をおこした。

「シユテル、ユーリ、ルシフェリオンと魄翼はどうだ?」

爆煙で一夏たちが確認できないため、龍輝はシユテルとユーリを呼び出

し、ルシフェリオンと魄翼の状態を確認する。

「はい、ルシフェリオンは正常に稼働しています。むしろ、本来の性能を凌駕するほどです」

「魄翼も正常です。あの形態も正常に稼働できるはずですよ」

「稼働テストは充分か。魄翼のあの形態はいざというときに使うようにするよ。次はバルニフィカスとエルシニアクロイツの稼働テストだな。魄翼も作ったし、ここいらで三機を改修するか。あつ、そういえば一夏たちはと」

シユテルとユーリの三人で話してる内に煙が晴れ、一夏たちを確認すると全員のI Sのシールドエネルギーが0になっており、デザスターヒートが強すぎたためか全員が気絶していた。

「やっちまつたな・・・」

『お兄ちゃん、やり過ぎ』

「自分でもここまでやる気はなかったよ。ごめんな、みんな」

観客席から通信で話してきた琴音に怒り半分、呆れ半分の口調で叱られる。

この特訓を見ていた山田先生は驚きのあまり泣いており、織斑先生は珍しく驚いていた。

後日、どこから流れたのかIS学園で龍輝を怒らせると業火の鉄槌と制裁の雷が下され、紫天の巨獣が現れるという噂が流れたのだった。

第十三話

一夏たちとの特訓、もといリンチから数日後、龍輝の噂を耳にした一夏が教室で龍輝にその噂を話そうと龍輝の場所に向かった。

「龍輝く、おはよう。さつそくだがお前の噂聞いたか？」

「おはよう、一夏。ああ、聞いたよ。業火の鉄槌と制裁の雷が下され、紫天の巨獣が現れるってやつだろ。どれもあの特訓でやったやつだ。どこで流れたんだろうな」

「おはよう、二人とも。その噂は私も耳にした」

「おはよう、箒。あの特訓やってから大分経つのにまだ噂が流れてるのか。唯一の男子の噂だからみんなウキウキしてるのかな」

「さてな。噂は噂だ。龍輝が怒ることなんてめつたにないからな」

腕組みしながら噂の内容を否定しようとする箒。

「？」

「龍輝、もしもだけど琴音ちゃんが誘拐されたりイジメにあつてたらどうする？」

一夏が龍輝が怒りそうな妄想を龍輝に聞く。

「そんなの決まつてる。誘拐の方は誘拐犯を一人残らずルシフェリオンで焼き尽くす。イジメの主犯はバルニフィカスの雷刃で切り刻む。それでも懲りなかったらエルシニアクロイツのジャガーノートを喰らわせる」

「うん、噂は合つてるな」

「どれも私たちが喰らつたやつだな」

龍輝の発言を聞いて一夏と箒は共に顔が青くなつていた。箒に関しては特訓を思い出して身震いしていた。

「みなさん、おはようございます」

「おはよう、セシリア」

「龍輝さんの噂、お聞きになりました？」

「今、その話をしたところだ。噂は合っていることが先ほどわかったがな」

セシリアの問いに箒が答え、その意味を理解したセシリアは顔を青ざめて

いた。

「そういえば先ほど、龍輝さんの新たな噂を耳にしましたの」

「俺の新しい噂？」

「はい。なんでも、龍輝さんの周りには人形みたいなのが四個浮いているとか」

「あ、それは俺の家族だよ」

「か、家族ですか？」

セシリアが驚く。

「そう、俺の家族。シユテル、レヴィ、ディアーチエ、ユーリ」

名を呼ぶと俺の周りに光が集まり、シユテルたち四人が出てきた。

「噂は本当だったんですの!？」

シユテルたち四人を見たセシリアとクラスの女子も驚いていた。

「はじめまして。マスターの友人、セシリア・オルコット。私はシユテル・ザ・デストラクターです」

「僕はレヴィ・ザ・スラツシャー!よろしく!」

「ロード・デИАーチエだ」

「ユーリ・エーベルヴァインです。よろしくお願いします」

「ご丁寧ありがとうございます。セシリア・オルコットですわ」

セシリアもシユテルたちに自己紹介する。

「というか、一夏さんと箒さんは知っていたんですのね」

「ああ、前の模擬試合の時にな」

「ああ、その時にでしたのね」

ガラッ!

「席に着け、HRを始めるぞ」

織斑先生と山田先生が今日に入ってくる。

「姫柇、デストラクターたちは授業を受けるのか?」

「はい。いいですか?」

「構わん。そのかわり、静かに授業を受けろよ」

「ありがとうございます」

織斑先生には以前、シユテルたちが授業を受けてもいいかというお願いもしていたのであっさり了承された。

「今日ですね、なんと転入生が二人来ましたよ」

「転入生?この時期に?」

「どこの国の代表候補生なんだろうな」

「そこ、静かにしろ」

「すみません」

一夏と話していると織斑先生に怒られてしまった。

「入ってこい」

ガラッ！

「はじめまして。フランス代表候補生、シャルル・デュノアです」

「え、男？」

クラスの誰かがそう発言した。

「はい、ここに僕と同じ方が二人いると聞いたので」

（男、ねえく・・・）

(マスター、あの者は・・・)

(言うな、シユテル。それよりみんな早く耳を塞げ)

(わかりました)

念話でシユテルが思っていることを言おうとしてきたが止めさせ、耳を塞ぐように言うとすぐにみんな耳を塞いだ。

『き・・・』

「はい？」

『きやああああああああっつっつっつ！！！！』

「え!？」

「男子!! 三人目の男子!!」

「しかも美形!! 守ってあげたくなる形の!!」

「織斑君と姫終君とまた違う雰囲気!!」

クラスの女子の黄色い歓喜の叫びが教室に響く。

(耳を塞いでいてもうるさいだろ!?)

(ま、マスター、耳が・・・)

(耐えろ、みんな!)

予想以上の叫びにシユテルたちがダウンしそうになる。

「静かにせんか!!進まないだろ!!」

シーン・・・

織斑先生の一喝で一瞬で静かになる。

(た、助かった・・・。無事か、みんな)

(は、はい。なんとか・・・)

(まだ耳がキーンつてする・・・)

(これは一種の攻撃手段なのか・・・)

(ここまでとは予想外でした・・・)

念話でシユテルたちの無事を確認した。それぞれいくらかダメージを負っているようだ。ディアーチエに関しては攻撃方法と思っているようだ。名付けるなら爆音波だろうか。

「で、では次の方、お願いします」

「・・・」

(ん?)

「あいさつをしろ、ラウラ」

「はっ、教官。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

・・・。

「あ、あの、終わりですか？」

「以上だ」

（あれで終わりかよ!?一夏の自己紹介を思い出すぞ!?ん?ボーデヴィツヒのやつ一夏のところに来て何する気だ?）

「貴様がつ!」

「つ!」

ガシツ!

「なっ!?!」

ボーデヴィツヒが一夏を叩こうと手を振り下ろす瞬間にボーデヴィツヒの腕を掴む。一瞬でボーデヴィツヒに詰め寄ったので、ボーデヴィツヒも驚く。

「朝のHRから厄介なことしない方がいいぞ」

「離せっ!」

「そんなことしても教官である織斑先生が喜ぶとも思っているのか」

「っ!」

「わかつてくれたのなら早く戻ってくれないか?あまり長く女性の腕を掴みた
くないんだが」

「くっ!」

ボーデヴィツヒが元の位置に戻っていく。

「やれやれ」

「すまん、龍輝。助かった」

「礼ならまた後で聞くよ。早く席に戻らないとな」

(思わず織斑先生の名を使っちゃまったな。まあ、教官って呼んでる訳だから効
果はてきめんだったな。穩便にすませることができたし)

そう思いながら織斑先生に軽くお辞儀をして席に戻る俺。

「話を戻すぞ。デユノアは織斑と姫柊が面倒をみてやれ。最初の授業はISに

ついてやる。全員 I S スーツに着替えて外に集合しろ。遅刻は許さんからな」

クラスの女子が着替えるのに動き出す。一夏も席を立ち、更衣室に向かう準備をする。

「君が二人目の男性操縦者の姫柊君だね。よろしくね」

「すまないが自己紹介は更衣室に行った後にしてくれ。女子たちが着替えるからな。急ぐぞ。一夏！」

「おう！準備完了だ！」

「よし、時間がないから走るぞ！行くぞ、デユノア」

そう言い、俺はデユノアの手を握り、走りだす。その際に顔を赤くしたデユノアを俺は見逃さなかった。

「いた！新しい転入生！」

「しかも姫柊君が手を握ってる！」

「黒髪の短髪に赤毛が混じってる黒のロングもいいけど、金色もきれい！」

「者共、であえ、であえ！」

廊下を走っていると、先生から聞いたのかIS学園のほぼ全生徒が前と後ろに立ちはだかる。

「行動が早いな、つたく」

「全くだ。突破するのは容易いが、その方法を使うと後が怖いがどうする？」

「え、突破できるの!？」

どうみても突破できそうにない女子の壁を簡単に突破することができるという龍輝に驚くデュノア。

「構わねえよ。遅刻した後の織斑先生の方が怖いからその方法で頼むぞ、龍輝
！」

「了解した。レヴィ！」

「はーい！」

「え!？」

止まる。

急に現れたレヴィに驚くデユノアに周りにいる女子たちも驚いて動きが

!?

「バルニフィカスの雷を足に纏わせろ！それで加速して突破する！できるな

「もつちろん！ご主人の足に雷を纏わせたよ！いつでも行ける！」

「よし、二人とも、俺に掴まれ！」

「おう！」

「う、うん！」

右腕に一夏が、左腕にデユノアが掴まる。

「振り落とされるなよ！行くぞ、レヴィ！」

「レッツゴー！」

バアアアアアンツツツ
!!!!

凄まじい電が廊下を疾る。

『きやあああつ!?!』

凄まじい電に女子たちが悲鳴を上げる。すでに俺たちは女子たちがいたところより大分先に着いていた。

「ふう、突破したな。二人とも大丈夫か？」

バルニフィカスの雷で物凄い速さで走っていた俺は難なく着地する。後ろを見ると走ってきた道に所々青い電が疾っている。

「おう、予想以上だったけどなんとか大丈夫だ」

一夏はなんとかバルニフィカスのスピードに耐えられたようだ。しかし、デユノアはというと・・・

「きゅ〜・・・」

「やべつ、目を回してる」

バルニフィカスのスピードに耐えられず、目を回していた・・・。

その後、更衣室に着いた俺たちはISスーツに着替える準備をする。が、復活したデュノアは顔を赤くしながら下を向いている。

「なにやってんだよ。早く着替えた方がいいぞ。織斑先生は遅刻するととんでもない罰を言うてるから遅れたりしたら大変だぞ」

「その通りだ。早くした方がいいぞ」

「き、着替えるから！二人ともあっち向いてて！」

「まあ、他人の着替えは見るもんじやないからデュノアの方は向かないが、なぜそこまで拒否みたいなことをする？」

「そ、それは・・・と、とにかく！あっち向いてて！」

「はいはい、失礼しました。一夏、早く着替えるぞ」

「お、おう」

一夏も着替えるのに制服を脱ぎ始める。俺は一夏の後ろのロッカーを使っているため、一夏とは背中合わせで制服を脱ぐ。

「そういえば、デュノア……って、すまないがシャルルって呼んでいいか？」

一夏がそう言つてデュノアの方に顔を向ける。すると、どんな速業か、デュノアはすでに着替え終わっていた。

「な、なにかな？」

「すごい早いな。俺なんかまだ着替えるの慣れてないから時間かかるんだよな。龍輝もそうだろう？」

「ん？」

「って、お前も早くないか？」

「俺は制服の下にISスーツを着ていたから脱ぐだけで終了だ」

「ずるいぞ、龍輝！」

「何がずるいんだ。俺は遅刻しないために工夫してきたただけだ。デュノア、一夏を放つといて行くぞ」

「え?でも」

「ちよつ!?待ってくれ、頼む!」

「口を動かす暇があるなら手を動かせ!」

「なんか龍輝がスパルタみたいなんだけど!」

一夏が嘆きながら着替えを急いで終わらせようと頑張る。

「そうだ。デュノア、自己紹介を忘れてたな。知ってると思うが俺は姫終龍輝だ。気軽に龍輝って呼んでくれ。で、あいつが」

「お、織斑一夏だ!俺も一夏でいいぞ!」

「着替えながらの自己紹介お疲れさん。で、俺もデュノアのことをシャルルって呼んでいいか?」

「うん、大丈夫だよ。改めてよろしくね。龍輝、一夏」

「おう」

「お、終わったぞ!」

「よし、じゃあ遅刻しないようにすぐに行くぞ。と言いたところだが、あと五分で授業が始まってしまう」

「龍輝、さっきのあれをやれば余裕じゃないの？」

シャルルが先ほど使った方法を言ってくる。

「確かに余裕だが、いいのか？また目を回してしまうぞ？」

「さっきのは突然だったからびっくりしたただけだから今度は大丈夫、なはず」

「織斑先生に怒られる覚悟で行くぞ。レヴィ、さっきのやつを使うぞ」

「はーい！」

出てきたレヴィが元気よく返事をする。俺の足に雷が纏まっていく。

「よし、行くぞ！」

バアアアアアンツツツ
!!!!

更衣室に電が疾る。

場所は変わってグラウンド。

「遅いな、一夏たち」

「もう授業が始まってしまってますわ」

「ほんと、ノロマなんだから」

箒とセシリアは心配しており、鈴は呆れていた。と次の瞬間。

ズドオオオオオンツツツ
!!!!

「な!?!」

「なんですの!?!」

「まさか、敵!?!」

グラウンドに突如、青い電が落ち、物凄い爆風が起こる。

「ふう、なんとか間に合ったな」

「さ、さっきのよりキツかった・・・」

「こ、ここまでなんて思ってもみなかった・・・」

「り、龍輝!？」

「一夏さんも!？」

「転入生も!？」

電が落ちた場所には平然と立っている龍輝に膝に手をつけてゼゼエシ
てる一夏、地面に座っているシャルルの姿があった。

「お前たち、遅刻はしなかったがどういふ状況か説明しろ」

「はい、織斑先生。まず、教室を出た後すぐに女子の軍団に遭遇しました。時間
もなかったので俺がバルニフィカスの力を使って突破し、更衣室に着きました。到着後
はデュノアと俺はすぐに着替え終わったのですが織斑が着替えに手間取って時間がな
くなってしまい、更衣室から再びバルニフィカスの力を使い、今ここに至ります」

「そうか、そういう事情なら咎めはせん」

「「ありがとうございます！」」

キーンコーンカーンコーン……。

織斑先生に簡単な状況説明が終わって授業の始まりチャイムになる。

「では、授業を始めよう！」

その後の授業はセシリアと鈴が二人で山田先生と試合をしたが、コンビネーションがとれずに負けてしまった。

（山田先生の強さは感じてはいたが、ここまでとはな。それと鈴とセシリアは今度の特訓でコンビネーションを高めるために二人で俺を相手にしてもらおうか。怠けるようならルシフェリオンの業火で焼き尽くすまでだが）

クラスの女子は驚いていたが、以前から感じていた俺はさほど驚かなかつた。さすがI S学園の先生と思つた瞬間だつた。そして鈴とセシリアは次の特訓で無事に帰つてくれるのか。

じていた。

ちなみに龍輝が特訓内容を考えていた時、鈴とセシリアは背中に寒気を感じて

第十四話

午前の授業が終わり、昼休みの中、俺は一夏と一緒に山田先生に呼ばれ職員室にいた。

「山田先生、俺たちを呼んだ理由はなんですか？」

「デュノアについてですか？」

「姫終君、正解です！実はデュノア君が泊まる部屋なんですが、相方は同じ男子がいかと思ひまして。そこで、織斑君と姫終君二人で相談してください」

「なるほど。じゃあここは龍輝が適任だな」

「は？ちよつと待て。今山田先生の話聞いてたか？相談しろって言ってたよな。相談もなにもしないで俺で決定っておかしくないか？」

「私も姫終君が適任だと思つてます！」

「山田先生まで……」

まさかの満場一致で俺がシャルルの同居人になってしまった。

(簪になんて言おうかな・・・)

「と、いうわけなんだが大丈夫か?」

場所は変わって4組の廊下で俺は簪に先ほどのことを話した。

「・・・」

(まずい。簪の機嫌が・・・)

「まあ、仕方ないか。転入してきたばかりで相部屋が女子だとどうなるかわからないもんね。いいよ」

「すまん、マジで助かる!今度ケーキ焼いてくるわ」

「ほんと!？」

「ほんとほんと」

「やった♪」

以前、部屋で俺がケーキを焼いたので簪にあげたらすごくおいしかったらしく、それから俺の作るケーキは彼女の好物になっていた。

「そういえば、私はいいけど琴音ちゃんは どうするの?」

「メールを送つといた。俺と一緒に行くか、簪と一緒に行くかをな」

ヒピッ!

「噂をすれば。え〜つと『簪お姉ちゃんには申し訳ないけど私はお兄ちゃんと一緒にいきたい』だつてさ」

「そつか。じゃあ琴音ちゃんは龍輝と一緒にで」

「何から何まで俺のわがままですまないな」

「ううん、大丈夫。そのかわり、ケーキ楽しみにしてるね♪」

「おう。楽しみにしてろ」

午後の授業も終わり、俺は寮の部屋でシャルルと一緒にいる。シャルルは今風呂に入っている。

「マスター」

「どした？シユテル」

「彼は何かを隠しています。本人からお聞きにならないんですか？」

「シャルルが隠し事をしているのはわかってる。というかなぜみんなはそれに気づかないのが謎だが」

「やはりマスターのデータを・・・」

「だろうな。そうでもなければあんなことはしないだろ。本人からは無理矢理やらされてるといふのを感じたが」

「どうしますか？」

「無論、助けるさ」

「そういうと思っていました。既に束様に連絡をしてありとあらゆる情報を集めました」

「流石だな、シユテル」

「頭ナデナデしてください」

「偉いぞシユテル」

シユテルの頭を撫でると気持ちよさそうな顔をする。猫耳と尻尾があるので、そのうちゴロゴロと聞こえてきそうと毎回思う。

「シユテルんばかりずるいく。ご主人、僕にも！」

「マスター、私も！」

「はいはい、順番な」

毎回誰か一人を撫でていると全員撫でることになる。

「ん？ダイアーチエはいいのか？」

「わ、我はいい！」

「今さら恥ずかしがることないだろ。ほら、こつち来いよ」
「し、仕方ないな／＼／」

照れながら来るディアーチエは毎回可愛いと思う。

「龍輝く、お風呂上がったよ／＼って、家族団らんだね」

「こいつらは俺にとつて妹たちみたいなものさ」

「お兄ちゃん、私がシユテルたちのお姉さんになるの？」

「そうなるな」

「では次からは琴音姉様と呼びますか」

「姉様……なんかいい響き」

シユテルが琴音の呼び名を変えたのを聞いたら琴音は嬉しがつている。

「龍輝の家族は賑やかで仲良しだね」

「自慢の家族だよ。あ、そうだシャルロット」

「なに？……って、え？」

「気づいてないだけでも思ったか？まあ、名前はさつき知ったばかりだけどな。なんで男装をしてるんだ？」

「それは・・・」

「大方、同じ男子なら接触しやすいし怪しまれずにデータを盗めるからだろ？」

「そこまでわかっちゃうんだね」

「で、これからどうするんだ？」

「決まってるよ。僕は国に戻されて罰を受ける。会社にはたぶん戻れない。会社も潰れるだろうね」

「それでいいのか？」

「え？」

「シャルロットはそれで満足なのか？」

「僕は満足だよ。龍輝や一夏に迷惑をかける前に気づいてくれてね」

「言葉では簡単に言えるが、心は素直なのを君は知らないか？」

「な、何を言ってるの？さっきの言葉は僕の本心だよ」

「嘘だな。現に君からは『助けて』と感じる。安心しろ。これは誰にも言わない。それと、会社は俺が設計図を書くこうと思うんだが」

「設計図って・・・いったいどんな設計図に？」

「俺の専用機と同じガンダムだ」

「ガンダム……」

「どうだ？」

考えるフリをしているシャルロット。

「お、お願い……できるかな？／＼／＼」

顔を赤くしながらの上目遣いは物凄い破壊力で危うく倒れるところを耐え、平常を保つ。

「おう、任せろ。で、機体なんだけどどんなのがいい？」

「龍輝のガンダムはどんななの？」

「俺のマンはいろいろカスタマイズしてるからベースの原型なんか残ってないけど。マナにはこのガンダムのパーツを使ったけど」

そう言い、待機状態のマンを使って空中にパネルを出す。その画面の中央に

マナが映っており、回りにはマナのパーツのガンダムが映し出されている。

「龍輝のガンダムの腕と足に使われてるこのガンダムは？」

「バルバトスルプスレクスか」

「ば、ばる？」

「ガンダムバルバトスルプスレクス。バルバトスとはソロモン七十二柱の七番目の悪魔の名前。ルプスとは狼のことでレクスの意味は王。悪魔の狼の王という名を冠した機体」

「へ、へえ〜・・・」

「こ、琴音・・・。お前、オルフェンズ好きだったっけ？」

「個人的にはバエルが好き」

「魔王！」

「アグニカ・カイエルの魂は今、目覚めた！」

琴音とオルフェンズの話で盛り上がり、最後は琴音と硬い握手をする。シャルロットを置いてきぼりで・・・。

「話を戻そう。シャルロット、改めてどうする？」

「このば、バルバトス？は龍輝のガンダムの腕と足なんですよ？僕も龍輝の腕と
なつて一緒にやっていきたいな／＼／＼」

「よし。じゃあ設計図はバルバトスルプスレクスでいくぞ・・・つて最後なんて
言つた・・・？」

「まさかデュノアさん・・・」

顔を赤くしながら最後に言つた言葉をもう一度確認しようとする俺と意味
を理解した琴音が同時にシャルロットを見る。彼女はいまだに顔を赤くしたままだ。

「な、何度も言わせないで！」

「お兄ちゃん」

「なんだ？琴音。お兄ちゃんは今大変混乱している」

「お兄ちゃんを好きになつた人が二人になつたね」

「おい！琴音！シャルロットともう一人は誰なのかわかつてるのか！」

「簪お姉ちゃんでしょ？」

「はい、その通りです・・・」

簪の好意には気づいていたが、まさか琴音も気づいていたとは思わなかった。そしてシャルロットは顔は赤くなくなっていて逆に黒い笑顔になっていた。

「へえ〜・・・僕以外にもいるんだ・・・」

「し、シャルロットさん・・・？落ち着こう？まずは落ち着いて話をしよう」

「龍輝・・・」

「はいー！」

黒い笑顔で近づいて来るシャルロットをなだめようとするが、彼女は一向に止まらなく、名前を呼ばれると物凄い威圧を感じてしまう。そして、彼女は俺の頬に両手をそつと優しく動かせないように支えながら、彼女は優しい笑顔で顔を赤めてこう言った。

「僕は龍輝のことが好きになっちゃった。ライバルに負けないようにしなくちゃね。だから僕は龍輝のことを諦めないよ／＼／＼」

そう言い、彼女の唇が俺の唇と重なった。

その間、琴音はシユテルたちと一緒に耳を塞いで後ろを向いていた。

第十五話

シャルル、否、シャルロットの真実とデユノア社を救う方法を話し、シャルロットが女子だということはもう少し秘密ということ相談した翌日、特訓のためにアリーナで準備運動をしている一夏たちを見ながら俺はバルニフィカスで素振りをしていた。

「一夏、バルニフィカスの形が変わってるのは私の見間違いか？」

「いや、見間違いじゃねえよ。龍輝のやつ、バルニフィカスを改修しやがった」

「つてことは他のやつも……？」

「改修されてるでしょうね……」

「……はあ……」

バルニフィカスの新しい姿を見た四人は他のも進化を遂げていると思うとこれからの特訓がさらにキツくなるということにため息をしていた。

「しかし、まあ、シャルルが特訓に参加してくれてるおかげで教える側が大分楽になったわ。簪も手伝ってくれてるし」

「シャルルさんの教え方はすごくわかりやすい」

「そんなことないよ。龍輝や簪だってわかりやすいよ。一夏たちだって最初と比べると大分レベルアップしてるんじゃない？」

「確かにレベルは上がってるな。最初と比べるとI Sの操縦だって慣れてきたし、雪片の使い方も大分わかってきたし」

「私もだ」

一夏と簪はこの特訓で自分が少しずつだが強くなっていくのを感じていた。

「あとは龍輝を倒すことができたならな」

「夢のまた夢だな」

「いくらなんでも強すぎますわ」

「そうか？普通だろ」

「龍輝の強さは異常だよ」

「簪の言うとおりだよ」

「えく・・・」

龍輝の強さは代表候補生の実力を圧倒する程である。その強さが普通なんてことは絶対にないだろう。

ざわざわ・・・

「ん？なんだ？」

「急に騒がしくなったな」

「あれは・・・」

一夏と箒が周囲の騒がしさが気になっていると龍輝はアリーナのピットの発進ゲートを見ていた。

「うそ、あれってドイツの第三世代？」

「話しには聞いてたけどまさか完成してたなんて・・・」

周囲の女子が話しだし、龍輝と女子たちの視線を追うと発進ゲートに黒いISを身に纏ったラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「織斑一夏、貴様も専用機を持つてるんだな。ちょうどいい。私と戦え」
「嫌だよ。理由がねえ」

「貴様にはなくても私にはある。貴様から来ないのなら私から行く！」

そう言い、ラウラ・ボーデヴィツヒのISに装備されてる大型カノン砲が一夏に向かって火を吹き、爆発が起こる。

「所詮、こんなものか」

「武器も構えていない奴に向かっていきなり砲撃なんて軍人つてのはそんなに卑怯者なのか？」

爆煙の中から龍輝の声が聞こえ、煙が晴れて一夏たちの前に一枚の翼が浮いていた。

「なっ!?!なんだ、その翼は?!」

「あの威力なら魄翼一枚で充分だな」

「龍輝、助かった」

「また貴様か。姫柊龍輝」

「こんなことを続けるのなら何度でも邪魔してやるよ」

「織斑一夏を倒す前にまずは貴様を倒さなくてはならないか」

「うーん、標的が一夏から俺に変わって嬉しいような嬉しくないような……。まあ、標的が俺になった方が被害は少なくなるか」

「戯れ言を！」

『その生徒！何をやっている！クラスと名前を言え!!』

ボーデヴィツヒが攻撃しようとする瞬間に先生がマイクを使って怒鳴ってきた。

「ふん、命拾いしたな、織斑一夏。それと姫柊龍輝、今は引いてやるが、次は必ず倒す」

そう言い残し、ISを解除しアリーナから立ち去って行った。

「龍輝、さっきは助かった」

「僕より早く動くななんてどんな早業なの？」

「・・・」

一夏がお礼を言い、シャルルが聞いてきたが龍輝は返事をしない。

「り、龍輝？」

「やべっ龍輝のやつめっちゃ怒ってる・・・」

龍輝の状態を一番長く共にいた一夏が気づく。現に龍輝の体から炎に電、黒いオーラが出ていた。

「あのやろー、何様のつもりだ・・・。『次は必ず倒す』？寝言は寝て言え。あー!!イライラする!!」

「お兄ちゃん。そのイライラ、私にぶつけてみない？私もすごくイライラしてるからさ、本気のバトルやらない？」

そう言う琴音もカマエルの炎が出ている。力が出すぎて赤いロングヘヤーがより赤くなり、揺れている。その揺れ方がとても綺麗でこの状況じゃなければ見とれているだろう。

「おつ、いいね。このイライラを一夏たちにぶつけたら大変なことになるからな。琴音なら思う存分やれる。ルシフェリオン！」

「カマエル！」

イライラしている二人からは今まで感じたことのない殺気のようなものを感じている。一夏たちは怯えて言葉が出てこない。そうしてる間に二人は自分の武装を呼び出し、IS非展開でやりあう気満々みたいだ。

「もう、あの二人を止めることはできない。俺たちが出来る最善のことは……全員！今すぐ逃げろっ!!」

一夏の指示で、アリーナにいる女子たちは一斉に逃げ出す。そして、龍輝と琴音の二人だけになった。

「一夏に感謝しないとな。これで気配りをしなくてすむ」

「だね。それじゃあ、行くよ！」

「来い！」

「はあああああああつっつ!!!」

「うおおおおおおおつっつ!!!」

その後、二人のガチバトルは十分程でアリーナを半壊した。

二人のガチバトルを見ていた生徒たちは全員こう語る。「あれは人間の域をはるかに越えている」と。そして、龍輝の他に琴音も怒らせては絶対にならないとIS学園の生徒たちに流れたのだった。

もちろん、アリーナを半壊したことで、二人仲良く織斑先生にこっぴどく怒られたのだった。

第十六話

アリーナを半壊した翌日の朝、シャルロットと校舎に向かっていた。

「昨日のバトルは凄かったね」

「いや、イライラしているとあんなに出力あがるんだな。いい勉強になったぜ。琴音のカマエルも出力が通常の三倍だったしな」

「最後に放った最大火力のディザスターヒートとメギドがぶつかった瞬間に限界だったアリーナが見事に半壊したしね」

最大火力のディザスターヒートとメギドがぶつかり、大爆発が起きたことでアリーナが半壊したのだ。織斑先生の止めが入らなければ、アリーナを破壊してただろう。

「マスターも琴音姉様もやりすぎです」

「反省してます・・・」

「ご主人からあんなに殺気を感じるなんてね」

「ルシフェリオンであるの出力だからな。我のエルシニアクロイツなら一瞬で闘技場が消

し飛ぶであろう」

「魄翼もあの形態ならすごいですよ」

シユテルに叱られ、レヴィは感心しているのかわからず、ディアーチェは自分の武装の強さを再認識したようだ。ユーリもディアーチェの発言に負けじと自分の武装を話している。

「ところでさ、龍輝」

「なんだ？シヤル」

「え、今シヤルって・・・」

「あ、ごめん。シヤルロットを愛称でシヤルって呼んでしまった」

「ううん。愛称で呼ばれるなんて初めてだし、嬉しいよ」

「そういつてくれると助かるよ。で、どした？」

「あ、そうそう。今度、トーナメントがあるでしょ？もしそれに僕とあつたとしても手加減無しでやってきてきて欲しいなって」

「え、手加減無しで？」

「シヤルロット、マスターの手加減無しは一分も経たずに終わるかと」

「え、そんな強いのか!?」

「昨日の琴音とのバトルだってガチだって言ったけど、本気の半分だったけど」

まさかの衝撃事実が発覚。

「僕、龍輝とあたらないように祈ろうかな・・・」

「その方がいいかもしれませぬね」

「うう・・・」

シユテルの返答に涙を流すシャルである。

「俺にあたった奴はドンマイとしか言えないな。つと、教室に着いたな。入るか、シャル」

「そうだね、龍輝」

ガラッ!

「おはよー」

「おはよう」

「お、龍輝とシャルル、おはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

「さっそくだが一夏、周りから俺に対して変な視線と距離を感じるんだが」

教室に入って早々妙なものを感じる。一夏たちはいつも通りだが。

「おそらくだが、昨日のことだろう」

「その事しか思い付きませんわ」

「あく、やっぱりか」

昨日の琴音とのバトルで好奇心の視線を送っていた者は少し怯え、元々邪険な視線を送っていた者はさらにキツイ視線となっている。龍輝にはその視線は効果なしだが。

（邪心に思ってる奴らは男卑女尊に染まつてる奴らだからやってきたら手加減無しでや

り返すか)

「龍輝、程々にね」

「な、なんのことですか？ シャルルさん」

「龍輝の思っていることがわかったから忠告しただけだよ」

どうやら龍輝の考えてることはシャルルにはお見通しのようだ。

(俺の心を読む人多すぎない?)

「そ、それより今日の特訓なんだけどちよつとした野暮用で遅れるわ。ごめんな」

「俺も先生に呼ばれてるんだった。箒たち先に始めててくれ」

「了解した」

「わかりましたわ」

ガラッ！

「HRを始めるぞ」

一日の授業はあつという間に過ぎる。俺は放課後に以前約束していたことを簪に持っていこうと厨房を借りてケーキを作ったのだ。今は簪の部屋に向かっている最中だが、尾行されている。その正体はわかっているが。

「はあゝ・・・なにやってるんだよ、シャル」

「いつから気づいてたの?」

ため息してから尾行してたシャルに言う。

「厨房で料理してるときから」

「最初っからじゃん!!」

「あんなに心配を駄々漏れしてれば誰だつて気づくわ」

「そんなに心配を出してないつもりだったんだけどな。で、ケーキなんか焼いてどこ」

に行くの?」

「簪のところだよ」

「簪さんの?」

「そう。シャルが編入してくる前に約束してたからな。ケーキを食べたいなら簪に許可をもらってくれ」

「一緒に行ってもいいの?」

「簪にはすぐそこで会ったって言えば大丈夫だと思う。それにケーキを狙う輩がもう一人いるからな」

「え?」

「さっさと行くぞ」

「え、待ってよ」

簪のルームメイトのことも考えてケーキはワンホール焼いたのだ。シャルが増えても問題はないだろう。

「ここが簪の部屋。おい簪、いるか?」

『いるよ、入って』

扉越しに簪の声が聞こえたので、扉を開ける。

「お邪魔します」

「いらつしやい、龍輝。あれ、シャルルさんも？」

「や、やあ。簪さん」

「シャルルとはそこで会ってな。簪が良ければ皆で食べようかなと。いいか？」

「何を持ってきたのかわからないけどいいよ」

「サンキュー」

「ありがとう、簪さん」

「とりあえず上がって」

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「あゝ、リュウリュウだゝ」

「やあ、本音。今日の授業はわかったかい？」

「うゝ、わからなかつたゝ。リュウリュウゝ、後で教えてゝ」

「はいはい。簪、お皿あるか？」

「あるよ。なに作ってきたの？もしかして・・・」

「さあ、手作りケーキを食べようか！」

「わーい！」

「龍輝の手作りケーキ・・・約束してたやつ」

「そうだよ、約束は守るからな。大分遅くなっちゃったけど」

「ううん、嬉しいよ。ありがとう」

「おう。さあ、食べようか。シャルルも皿持って」

「うん！」

「リュウリュウのケーキ♪」

簪は約束を覚えていてくれたことに嬉しきを感じ、簪のルームメイトの布仏本音は甘いものが好きなので、彼女も龍輝のケーキが好きなのだ。そして、シャルルにとっては好きな人の手料理が食べれるということとても嬉しいイベントが発生していた。

ケーキも食べ終わり、皿を片付けて簪の部屋を後にしシャルルと共にアリーナに向かっていた。

「龍輝のケーキすごいおいしかった」

「そりやよかった。作った甲斐があるよ」

「龍輝に料理の才能があつたなんてびっくりだよ」

「一夏程ではないがな。それより急ぐか」

「そうだね」

ドタドタッ！

「なんだ？」

後ろから誰かが走ってくる音が聞こえ、振り替えると女子二人が話しながらアリーナに向かつていった。

「ねえ、龍輝。今の人たちが話してたことが本当なら・・・」

「急ぐぞ！シヤル!!」

「うん!!」

龍輝とシャルもアリーナに向かって走り出した。龍輝たちを抜いていった女子の話は「アリーナでドイツの代表候補生がイギリスと中国の代表候補生とバトルをしている。なんでもドイツの代表候補生が二人を圧倒しているとか」というものだった。

アリーナの観客席に着いて見えた光景は一夏がラウラ・ボーデヴィツヒに斬りかかるところだった。セシリアと鈴はISを解除していて壁にもたれかかっていた。

「箒……これはどういう状況だ！」

近くにいた箒に状況を聞く。

「それが、あのドイツの奴がセシリアと鈴にケンカを売ったらしくて二人は買って、バトルになったが連携がとれずにやられたんだ。二人のISは危険域まで到達して強制解除して倒れたところを一夏がシールドを破って二人を救助して今の状況だ」

箒は冷静に状況を説明してくれた。この状況なのに冷静に説明してくれる箒は落ち

着いているかと思ったが手が震えている。

「シャルル、箒を頼む」

「わかった。龍輝は？」

「俺は……あのバカを止めて、ドイツの野郎をボコボコにする。レヴィ！アレをやる!!」

「ぶつつけ本番だよ！ご主人！」

「シュミレーションでは失敗してないだろ！無理そうなら気合いだ！」

「オツケー!!」

「青の雷、力のマテリアル！」

「レヴィ・ザ・スラツシャー！」

「ユニゾン!!」

レヴィと共に声を合わせると、レヴィが青い炎に変化し、俺の体の中に入っていく。すると赤髪が混ざった黒髪が青色に変わり、赤色だった右目がレヴィの瞳の色と同じ桃色で、IS学園の制服がレヴィがいつも着ている服に変わった。

「え……」

「えっと・・・龍輝、その姿は・・・？」

「話はまた後で。行くぞ、レヴィ！」

『了解！ユニゾンはシュミレーションの時より完璧だから僕の力をフルでいけるよ！』
「よくやった！」

ユニゾンした俺の右手のバルニフィカスが姿を現し、俺は一夏が空けた穴からアリーナに入り、全速力で飛ぶ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒイイイイイ！！！！」

青い雷を纏わせながら叫ぶ。その叫び声に一夏は援軍が来たこと喜びの顔をして振り向くが俺の姿を見て驚く。ボーデヴィツヒも一夏と同様に驚いていた。

第十七話

「ラウラ・ボーデヴィツヒイイイイイ!!!」

そう叫びながらボーデヴィツヒに電刃衝を四発ぶちこむ。

「くっ!」

ボーデヴィツヒは回避をし、一夏から離れる。その隙に一夏もボーデヴィツヒから離れる。

「龍輝! 援護助かる!」

「このバカがつ!!」

ドゴオオンツ!!

「うおっ!？」

離れた一夏の場所に向かい、一夏の真横をバルニフィカスをクラツシャーモードで叩きつける。

「ちよっ！待て！龍輝！危ねえだろ！」

「やかましい!!友達を傷つけられて黙ってられない気持ちにはわかるが、少しは頭を冷やせー。」

「そう言いながらバルニフィカスを振り回して来るなよ！」

「叩かれて頭を冷やせてんだよ！」

「それ叩かれたら気絶どころじゃないよな!?!下手したら死ぬぞ!？」

「安心しろ、死なない程度で眠らせてやる」

「やめろおおー!?!？」

逃げる一夏を追う龍輝という端から見たらどんな光景だろうか。

「姫終龍輝！またしても貴様か！」

「うっせえ！てめえ、黙ってるろ！今一夏にお仕置きしてるんだから！」

「やめろつてえええええ!!」

ボージェヴィツヒが怒鳴ってきてても尚、一夏に向かつてバルニフィカスを振り回す龍輝である。一夏はISを纏っている状態で龍輝に勝てるなど微塵も思っていないので逃げられない。

「貴様！無視をするなどいい度胸だな！それに織斑一夏は私が倒す！」

「お前さく前に一夏より先に俺を倒すって言ってたよな？今なら手加減無しでやってやるが、どうだ？」

「面白い。手加減されて負けられてしまつては困るからな」

「ほほう。ケンカ売ってるのか。いいだろう、買ってやるよ」

龍輝の体が青いオーラに包まれている。オーラと同時に雷がでている。

「ヤバい・・・龍輝がすごく怒ってる・・・」

「さっさと貴様もISを展開しろ」

「必要ないね」

「なんだと？ISを展開しないで私と戦うと？ふざけてるのか！」

「ふざけてるのはてめえだろっ！」

「なっ!？」

一瞬でボーデヴィツヒの後ろに行く。ボーデヴィツヒも驚き、離脱する。

ドゴオオンツ!!

ボーデヴィツヒのいた場所にバルニフィカスが叩きつけられる。あと一歩遅かったらバルニフィカスに餌食になっていただろう。

「貴様、何をした？」

「別になにも？ただ後ろに移動しただけ」

「ふざけるな！」

ボーデヴィツヒは大型カノンを放つ。龍輝はいとも簡単にかわす。

「龍輝！あいつは人の動きを止める技を持つてるぞ！」

「やっぱりA I Cか」

「その通り。貴様も逃がさずに倒してやる！」

ボーデヴィツヒはワイヤーを放ち、ワイヤーが迫ってくる。だが、今の龍輝はレヴィとユニゾンしているため、機動力が高く桁違いの速さができるので難なくかわす。

「学ばないバカなのか？」

『僕より頭悪いのかな？』

「いや、怒りで冷静さがないだけだな。レヴィ、あいつの怒りを静めるためにちよつと本気だす。バルニフィカス、ブレイバーだ」

『了解！長さはどうする？』

「アリーナを両断できる長さだな。かといって観客席も両断する長さにするなよ。このアリーナ内だけだ」

『了解！』

アリーナの端に飛びながらボーデヴィツヒの放つワイヤーをかわしていく。ボーデヴィツヒはワイヤーを放つだけで動きはない。

「さてと、やるか」

アリーナの端に着いたところでワイヤーが追いついた瞬間に一瞬で上空に飛ぶ。

「そこからなにをするつもりだ？ 姫柊龍輝！」

ボーデヴィツヒが叫んできたが無視だ。バルニフィカスをギガクラッシュャーに変え、天に掲げる。

「バルニフィカス、ブレイバーモード!!」

そう叫ぶとバルニフィカスが伸び、青い両刃が現れる。先ほど話していた通り、両刃はどんどん伸びていき、一刀両断できる長さになった。

「そ、それは・・・」

（レヴィ、残り時間は？）

『一分切ったよ！』

（それなら大丈夫だな）

『ギリギリで止まるかな』

（だな）

「青の閃光の刃に斬り刻まれる!!」

念話でレヴィに残り時間を聞く。そして、バルニフィカスを数キロも離れているボー
デヴィツヒに降り下ろす。

「やめんか!!!」

ブレイバーがボーデヴィツヒに当たる寸前に怒声が響き渡る。バルニフィカスを止
め、ブレイバーを閉じ、声のした方向に向かう。アリーナに響き渡る声をあげたのは織
斑先生だ。

「織斑先生」

「全く、前回と同じようにアリーナを破壊するつもりか」

「申し訳ありません」

「貴様もだ。ボーデヴィツヒ。模擬試合でもないのにクラスメイトのISをボロボロにすることがあるか！」

「す、すみません。教官」

ボーデヴィツヒはISを解除して、織斑先生に頭を下ろす。しかし、今の一撃が当たるかもというのに平然としている。

（意外とタフなんだな）

『ご主人、よく見て』

（なに？ あっ・・・）

レヴィに指摘されてよく見ると手が震えていた。

(やつぱり軍人だと言っても一人の少女というのは変わらないな)

『だね』

「これより、トーナメントまで全ての模擬試合等を禁ずる！破つたらわかっているな？」

「は、はい！」

織斑先生の鋭い眼光で睨まれると反論することは一切できない。もしするようなら相当の覚悟が必要であろう。

「織斑先生の言葉じゃなにもできないな。ボーデヴィツヒ、もう終わりでいいだろ？」

「教官の言葉なら・・・」

「んじゃ解散〜」

無理やり解散させてピットに戻る俺。ユニゾンはしたままだ。解除したらどうなるかを知っているので急ぐ。

「龍輝！」

「シャルル、簪」

「騒ぎを聞いて来たたら龍輝が戦っていたから途中でシャルルさんと合流したの」

「そうか。悪いがユニゾン解いた後のこと頼むわ。レヴィ、説明よろしくな」

「え？」

『シユテルと一緒に説明するよ。ご主人はゆつくり休んで』

「任せてください」

「ああ、シユテルもお願いな。じゃあシャルル、簪おやすみ。いつ目覚めるかわからないから。ユニゾン、解除」

「バタツ！」

「り、龍輝!?!」

「カンザシ、マスターを急いで保健室へ！」

「う、うん！」

「シャルルもカンザシに着いていって！その後説明するよ！」

「わ、わかった！」

ユニゾンが解けて元に戻った龍輝は倒れ、シユテルとレヴィ、シャルルと簪に保健室

に運ばれていった。

その夜、ラウラは一人、寮の部屋で考えていた。

（姫柊龍輝。お前は教官が来なかつたら私を斬っていたのか？それとも来なくても止めていたのか？私は、自分の強さに舞い上がっていたのか。いや、こんなものは強さではない。私の『弱さ』だ……。姫柊龍輝、お前は私に気づかせようとしていたのか。自分の弱さを……。）

そう考え、布団の中に潜ったのだった。

第十八話

ボーデヴィツヒとの戦いの数時間後、保健室のベッドで龍輝は眠っている。その隣には簪とシャルルが見守っており、シユテルたち四人もいる。外はもう夜だ。

「シユテル、龍輝は眠ってるだけなんだよね？」

「はい、ユニゾンの反動でマスターは眠りに入っています。命の危険というのはまずありません。疲れて眠ってるだけです」

「それならいいけど。簪、今日は帰る？」

「ここにいたい。けど、私たちまで無理をして倒れたら龍輝が心配するから帰るよ」

「マスターに異変があれば我々がすぐに気づくので連絡します」

「龍輝と離れていても龍輝の容態がわかるんだね」

「はい。我々はマスターと共にあります」

もう夜も遅いので見舞いは終わりにしようとなり、シャルル、簪は自分の部屋にもどり、シユテルたちはいつも通り布団の上に乗って眠った。

数時間後。

「ん・・・ここは・・・そうか、保健室か。シャルルたちに感謝しねえとな。そして、お前たちはいつも通りすぎる・・・」

「マスター！」

「ご主人！」

「ようやく起きたか」

「おはようございます。マスター」

上から順にユーリ、レヴィ、ディアーチエ、シユテルが起きて、飛んでくる。

「何時間眠ってた？」

「約八時間です」

「そんなにか。まあ、ユニゾンの影響だし、その時間帯が妥当か。ところで、隠れてないで出てきたらどうですか？」

月明かりでほんの少しだけ明るい保健室だが入り口の付近は届いていないため真っ暗だ。そして、その場所に話しかけた。

「あら、もう見つかったっちゃうなんてね。お姉さんもまだまだだね。いつから気づいてたの？」

「起きた時からですよ。IS学園生徒会長、更識楯無さん」

「自己紹介の手間が省けて助かるわ」

IS学園最強の生徒であり、生徒会長の更識楯無が扇子を開きながら出てきた。ちなみに扇子には『感謝』と書かれている。

「それにしてもよく私のことを知ってたわね。新生で知ってる人はいないはずよ？」
「でしようね。でも、あなたは気づかれてないとも思ってるんですか？」

「なんのこと？」

「簪と二人でいるときにだけ殺気のこもった視線を感じてたんですよ。エリアサーチを出して周辺を確認したらあなたがいたんですよ」

「・・・」

「まさか現実にはハンカチを噛みながら見てる人がいるとは思いませんでした」

「ちよつと！そこまでしてはないわよ!!」

「はい、自爆」

「あつ」

「騙してごめんなさい。そうでもしないと認めないかなと思ひまして」

「自覚があるのなら今回は許しましょう」

楯無さんは扇子を開き、扇子には『許す』と書いてある。どういう仕組みで書いているのか謎だが。

「それで、あなたはここに何しに来たんですか？」

「そうね。あなた、簪ちゃんと仲がいいみたいね。お姉さん嫉妬しちゃうわ」

「そりゃあんな殺気こもった視線を向けられれば嫉妬してるんだと思いますよ。その内後ろから槍に刺されるかと思ってました」

「そこまでほしくないわよ。たぶん・・・」

「おい、今最後にたぶんって言ったよな。学園内で殺人事件起こす気かよ！」

「そんなことより！私からの頼み事聞いてくれる？」

「そんなことじゃすまないですよ。そして頼み事の答えは嫌です」

「な、なんで?！」

「大方、簪と仲直りするために協力してほしいってことですよね」

「あ、当たり前よ」

顔を横に向けながら答えた楯無さんを見て、ため息をする。

「簪から聞きました。あなたたち姉妹の今の状況を」

「なんだ、知ってたのね。なら、断る理由はなんなのかしら？」

「彼女はあなたと仲直りをしたいと言っています」

「・・・嘘よ」

「嘘なんかついてなんになるんですか。簪曰く、あなたと仲直りをしたい。けど、どう接していけばいいのかわからない。会いに行こうと思っても行動ができずに何年もたつてしまったと。この言葉を聞いてあなたは仲直りをしたいと思いませんか？」

「……」

「明日、学園内で簪と会わせませす。それで仲直りしてください」

「ちよつと強引じゃない？」

「こうでもしないと動かないでしょ？あなたは。それに、早く簪と仲直りしたいんですよ。」

「そ、それはそうだけど……」

「んじゃ決定で。俺はまた寝ます。おやすみなさい」

「え、あ、おやすみ」

横になったと思ったらすぐに寝息をたてる龍輝である。

「今まで寝てたのにずいぶんとはやいわね……」

（この子が簪ちゃんが気になつてる子なのよね。ちよつと強引なところもあるけど頼もしいところもある、簪ちゃんにはもったいなくできた子ね）

楯無はそう思い、部屋に帰っていった。

そして翌日。

「龍輝〜!!」

「ぐはっ!」

起きると簪とシャルルに飛びつかれ、衝撃を殺せず、壁に背中をぶつける龍輝である。だが、そんなの二人は関係なく抱きついたままだ。

「心配したんだよ〜!」

「簪の言うとおりだよ!」

「ご、ごめんな。簪、シャルル」

「ところでシャルルさん。あなた、男子だよね?なんで龍輝に抱きついてるの?」
「えっ!?!えつと・・・」

本来は女の子だが今は男と偽っているため、龍輝に抱きついてるのを簪に不思議に思われた。シャルルは目で龍輝に助けを求める。

「えっと、シャルル、言った方がいいんじゃないか？」

「龍輝が裏切った!？」

「別に裏切つてねえだろ!それに、簪は信用できる。お前もわかつてるだろ？」

「そ、それは・・・まあ」

「簪、これから話すことは他言無用にしてくれ」

「わかった」

「龍輝、話すこと前提に進めないで。話すのは僕なんだから」

「ごめん・・・」

「ま、しようがないか。簪、これから話すのはほんとに他言無用にお願い。僕はね女なんだ」

「・・・え？」

シャルルの秘密を明かすと簪は固まってしまった。無理もない、今まで男子だと思つてた人が実は女の子でしたとなると誰でも驚く。

「おーい簪」

「はっ！ま、まあ、前からちよつと不思議だったんだよね」

「気づいてたのか？」

「三人目の男性操縦者なのにニュースにも出ていなかったから気になってたの」

「よくよく考えればそうなるよな。なのに他の奴らは気づかないとはバカだな」

「ほんとだね。それで、シャルルさん、じゃないや。性別を偽ってたのなら偽名かな？」

「頭がいいね、簪は。僕の本当の名前はシャルロットっていうんだ。改めてよろしくね。簪」

「うん、シャルロット。ところで、シャルロットは龍輝と・・・」

「本当に頭がいいね、簪は。今君が思ってる通りだよ」

「へえ、そうなんだ」

仲良く話していたはずが急に二人の目から火花が見える。二人の顔は笑っているが目が笑っていない。目元まで黒く影が出ているのは気のせいだろうか。

（ヤバいな、この状況。二人は俺に好意を抱いているからこうなってるんだよな。さて、どうしたものか）

（思いきって二人と付き合っちゃえ！）主人！

(そうだよな。それしかないよな。認められないがそれしか方法が……ってなに言わせんだ！レヴィ！)

(マスター……)

(落ち着いて！ユーリ！念話で話してるんだから二人には聞こえないから黙って魄翼を展開してるように見えるから！あとここで炎の矢はやめて！)

考えているとレヴィが念話で思いついたことを言ってきたので思わず反応してしまい、ユーリに狙われてしまう龍輝である。

女性二人は火花を出しながら見つめあい、龍輝はユーリに炎の矢を放たれそうになっている光景は端から見ればカオスであろう。

第十九話

保健室で目覚めた俺はその場で簪とシャルロットの勝負が勃発しそうなところをなんとか阻止した。けど、保健室で騒いだため先生に怒られてしまったが。

「ところで龍輝、これ知ってる？」

シャルロットが言いながらチラシを見せてきた。

「なにに？ タッグトーナメント？ トーナメントのやつがタッグになったのか。てか、これ俺が寝てる間に発表されたんだろ？ 知るわけねえよ」

「そうだよね。だからさ、これ僕と組まない？」

「別にいいぞ。シャルロットと簪以外の女子と組むのは嫌だからな」

「り、龍輝・・・／／／」

「よく普通に言えるよね・・・／／／」

二人は顔を赤くし、湯気が出てるのが見える。

「てか、簪は俺とシャルロットが組むのは反対しないんだな」

「もちろんするよ。でも、私はまだあの子が完成してないからね。出場ができないから」
「なるほどな。早く完成させなくちゃな」

そう言いながら簪の頭を撫でる。ちなみに龍輝の身長は175cm近くまであるので簪とシャルロットが話す時は上を見なくては視線が合わない。なので頭を撫でる高さにはちょうどいいのだ。

「うん／＼／」

「簪だけはするいな、龍輝、あとで僕にもね」

「はいはい」

そうこうしてる間にいつの間にか教室に到着していた。保健室から直で向かったので早く着いた。

「じゃあ私も自分の教室に行くね。龍輝、シャルロットトーナメント、絶対勝ってね！負けたら許さないから！」

「うわー、プレッシャーやー」

「頑張りますよー」

手を降りながら四組の教室に入っっていった簪を見送り、教室に入る。

「おはよーさん」

「おはよう」

「龍輝!!心配したんだぞ!!」

ゴツツ！

「いってえ!!」

「心配したのはわかったからまずはあいさつをしろ」

「だからってゲンゴツすることないだろ・・・いってえ・・・」

「その様子だともう大丈夫みたいだな」

「おはよう、箒。もうすっかり元気だよ」

あいさつをせずに朝から叫んで来た一夏にゲンコツを落とす、箒が呆れながら言ってきた。

(ん?)

一つだけ妙な視線を感じたので見てみるとボーデヴィツヒが見ていた。目線が合うと別方向に向いてしまった。

(あいつ、俺のやっていたことがわかったみたいだな。目も鋭くなくなったし)

ボーデヴィツヒが変わっていてくれたことに嬉しさを感じているとクラスの女子が話し出した。

「そういえば今日から停学中の生徒が復帰するみたいだよ」

「学年は？」

「私たちと同じだって」

「私たちと同じで停学中って・・・」

「いったいなにをやらかしたんだか・・・」

「てか、女子でそういうのはまずないだろ」

龍輝がそう言うのと本音が。

「でもここにはリユウリユウとおりむーしか男子はいないんだよ？」

「まあそうだけど・・・」

ガラツ！

「席につけ、HRを始める。今日は三組に停学中の生徒が復帰してくる。もしその生徒に会ったら普段通りに接してくれると嬉しい」

（本当に女子が停学にされたのか？なんか変な予感がするが・・・）

「うるせえな。HRは静かにしろってわからないんかよ」

ピシヤリ。

「姫柊、席につけ」

「ちよ、織斑先生!!なんであいつがここに!？」

「なんだ、あいつと知り合いか」

「幼馴染です!確かにあいつは俺と同じで・・・」

「口は慎め」

「すみません」

言っではいけないことを言おうとしてしまう直前で織斑先生の一睨みで黙る。静かに席につく龍輝である。

「ねえ、今の男子じゃなかった？」

「男子って織斑君と姫柊君だけだよね」

「あの顔、どこかで見たことあるような」

「静かにしろ!!今説明してやる!!」

女子が話し出したので、織斑先生の一喝と説明で静かになる。

「まず、ここになんでその二人の他に男子がいるのかというと・・・姫終、説明しろ」
「そこで俺に振る!?!わかりました・・・皆、あいつはさつき言った通り俺の幼馴染だ。名前は黒葉蒼（くろはあおい）。一夏と俺と同じ男性操縦者だ。なぜニュースに取り上げられていないのはあいつが非公式にとテレビ局を脅してここ、IS学園に入学したってわけ・・・だと思う。どうですか織斑先生?」

「正解だ。あいつは三人目の男性操縦者だ。あいつのクラスは三組だ」

「え!?!ってことは三組の専用機持ちって蒼だったのかよ!?!」

「その通りだ」

「織斑先生、俺のせいで時間が潰れてしまいすみません。早くHRを終わらせましょう」

「実際HRは終わったも同然だが」

「では三組に行つてきます!いいですか!」

「構わん」

「ありがとうございます!」

お礼と言うと同時に走っていった龍輝を皆が呆然と見ていた。

「はっ！龍輝待って！僕も行く!!」

「俺も！」

「私もだ！」

我にかえったシャルルに続き一夏、箒が龍輝を追いかけていった。

「全くあいつらは・・・」

「まさか姫柊君が幼馴染とは思いませんでしたね」

織斑先生が呆れており、山田先生が織斑先生に話していた。

『では、HRを終わりにします』

三組の前まで来たところで先生の声が聞こえたのでノックをして扉を開ける。

「失礼します！一組の姫終龍輝です！ここの生徒とお話がしたいと思ひまして！」

「姫終君ね、どうぞ〜」

「ありがとうございます！結城先生！」

「はいはい」

三組担当であり、俺の親友の姉さんの結城明日奈先生から許可をもらい、あいつがいる席に向かう。

「おい、蒼」

「なんだよ。いきなり名前呼びか。どこの誰だ」

「姫終龍輝だが」

「なに？姫終？」

「久しぶりだな。蒼」

「龍輝、か？龍輝なのか!？」

「そうだよ」

「久しぶりだな！元気だったか!？」

「元気だよ。まず、お前に聞きたいことがある」

「なんだ？龍輝」

「なんで停学だったんだ？」

「えっ!?!それは・・・」

「さあ、説明しろ」

「そ、それはくそのく・・・」

久しぶりの再会を楽しむものもつかの間停学理由を尋ねると口ごもる蒼である。

「待ってください！龍輝お兄様！」

「ん？あれ、美森？」

「はい、お久しぶりです。龍輝お兄様」

蒼に押しよつてると蒼の席の斜め後ろから声が聞こえ、向くと蒼の妹の黒葉美森だった。琴音とも仲がよく、昔はよく遊んでいた。その遊び仲間にもう一人いたが。

「美森がいるってことは・・・」

「ここだよ！リユウ君！」

「やっぱいたか。友奈」

手を高々と上げ駆け寄ってくる女子、結城友奈である。結城先生の実の妹である。

「で、話を戻すぞ。蒼」

「クソ、まだ続いてたか」

「逃げようとしても無駄だぞ」

「その、龍輝お兄様、お兄様の停学理由なんです私と友奈ちゃんのをいなんです」

「ふむ、となると大方、美森と友奈がナンパされてるところを蒼が助けてケンカになってその日が入学式だったんでその日から停学をくらい、蒼を知る生徒はほとんどいなかったということか」

「あ、当たり前です」

「さすがリユウ君だね。なに一つ間違っていないよ」

「正確すぎて現場を見てたのかと疑いたくなるな」

「普通そこまで思いつくだろ」

「思いつかないよ。龍輝」

龍輝の後ろから声がして、向くとシャルル、一夏、箒が息を切らしていた。

「よう、遅かったな」

「速すぎるよ、龍輝・・・」

「全くだ・・・」

「速すぎる・・・」

「こりやあすごいメンツが揃ったな。一人目に天才の妹にお前は・・・四人目か」

「ほう。蒼、あとでまた話そう。美森、友奈またな。蒼は今度のタッグトーナメントに出場はできないだろ」

「あつたりく。またな」

「はい」

「うん！」

「皆、戻るぞ」

「もう戻るの!？」

「もう次の授業が始まるけどここに残りたいたなら残りな」

「戻ります!!」

「では、結城先生、お騒がせしました」

「いくえ♪じゃあね」

「失礼しました」

三組をあとにし、一組に戻る。

「龍輝、あの子たちはなんなのか説明してね」

戻る途中シャルルに言われたが、その時のシャルルから黒いオーラが出ていた。

第二十話

昼休み、セシリアと鈴は保健室に休んでいるためいないがそこには龍輝たちを含め、蒼に美森に友奈がいる。

「さあ、龍輝、説明を」

「はいはい。こいつは俺の幼馴染で会社『黒葉ファクトリー』の創設者の黒葉蒼。で、こつちが蒼の妹の黒葉美森。蒼の秘書をしてる。で、最後にこの子が結城友奈。感じていると思うけど友奈は結城先生の実の妹だよ。友奈も黒葉ファクトリーで稼働データを収集してる」

「ご紹介をうけた黒葉蒼だ。黒葉ファクトリーの創設者でISを開発してる。よろしくな」

「蒼お兄様の妹の黒葉美森です。会社ではお兄様の秘書をやってます。私は今度のタッグパートナーメントに出場します」

「結城友奈です！明日奈お姉ちゃんの妹だよ！全然似てないから姉妹とは思われないけ

どね。私は今度のタッグトーナメントは美森ちゃんの応援だから出場しないよ」

蒼、美森、友奈と順に自己紹介をし終わったがシャルル、一夏、箒は啞然としてる。

「く、黒葉ファクトリーって……」

「IS関連にしては右に出る者はいないと言われるあの黒葉ファクトリー……しかも創設者は謎となっているけど……」

「まさか同級生なんてね……」

黒葉ファクトリーは全国で敵にまわしては絶対にならないと言われている会社なのでISについてちよつとは勉強した一夏でさえも黒葉ファクトリーの名は知っているのだ。

「非公式だからな。知らないのも無理はない。それと、うちは今新型のISを開発してる」

「ま、まさか、第四世代!?!」

「第三、五世代ってところかな」

「いいのかよ、そんなこと教えて」

「いいんだよ。ここにいる奴らは信用できる。だろ？龍輝」
「違いねえ」

蒼はシャルたちを信用できると一瞬で見抜いたようだ。

（昔からそういうの鋭いよな。ん？あの癖は・・・後で問いたですか）

「っていうかさつき美森はタッグトーナメントに出場すると言ったよな」

「はい」

「パートナーは？」

「友奈ちゃんが出てくれればよかったんですけど出ないのでランダムです」
「お前と友奈が組まなくてよかったと思ってるよ」

「なにか言いました？龍輝お兄様」

龍輝が小さい声で呟いたがそれを拾う美森は地獄耳かと疑いたくなる。

「なんでもないです。っていうかその銃どっから出した!? ほぼゼロ距離で撃つか!」

美森は黒い笑み、というか目が笑っていない顔で青白い一丁の銃を手に持ち、龍輝に向けていた。

「まあまあ、落ち着け美森。龍輝はお前と友奈が組むと素晴らしい連携プレイを見せると褒めてるんだよ」

「ホント!? リユウ君!!」

「あ、ああ。ホントホント」

「嬉しいね! 美森ちゃん!」

「ええ、そうね。友奈ちゃん。龍輝お兄様、今回は許してあげます」

(助かった・・・)

蒼のフォローで友奈が美森に満面の笑顔で話し、美森も笑顔で銃をしまう。量子化したからおそらくISの武器だろうか。

「そろそろ昼休みも終わるね。戻ろうか」

「そうだな。龍輝、戻ろうぜ」

「いや、お前たちは先に行つてくれ。俺は蒼と話がしたいからな」

「え？なら今話してもいいじゃないか」

「空気読めよ、一夏。幼馴染と久しぶりの再会だぞ。二人で話したいことがたくさんあるんだ」

「そつか。なら、僕たちは先に戻るね。くれぐれも遅れないように」

「わかつてるよ、シャルル」

「ではお兄様、後程」

「ああ。すまねえな」

一夏たちは美森と友奈と仲良く話ながら屋上からいなくなつた。

「さて龍輝、話つてなんだ？」

「お前の所で作つたISだがさつき第三、五世代と言つたな」

「ああ。そうだな」

「実は第四世代じゃないのか？」

「なぜ、そう思う?」

「お前が説明してるときにわずかに嘘ついてる癖が出てたのでね。もしかしたらと思っただけだ」

「やつはお前は騙されないか。二人だけで話したいことは機密情報を話すのであつたらというわけか。そうだよ、俺と美森と友奈が持つてるI Sは第四世代だよ」

「第四世代が三機か。敵に回したらヤバイな」

「第四世代は四機だろ」

「あと一機は?」

「白々しいぞ。お前のガンダムも第四世代だろ」

「正解♪」

「殴っていいか?」

「暴力反対」

めっちゃドヤ顔をしたら蒼に殴られそうになる。どうやらドヤ顔は予想以上に腹立つらしい。

「第四世代だとやつぱり・・・」

「ああ、展開装甲だ。まあ、うちのはちよつと変わった展開装甲だけだな」

「蒼の作ったISを見るのが楽しみだ。そのうち、東さんが第四世代を持つてくる気がするな」

「なんであの天才が？」

「マナのデータを送ったから」

「なるほどな」

キーン
キーン
キーン
キーン

「やべつ、予鈴だ。速く戻るぞ」

「怒られるのは勘弁だからな」

蒼と共に急いで教室に走っていく龍輝であった。

「来週はタッグトーナメントだ。気合いいれてくぜ」

そう。来週はタッグトーナメント。パートナーのシャルロットと共に優勝を目指す

ため今日も皆と特訓を頑張るいつもの日常だ。

(そーういや簪のやつ、うまくいったかな)

(うまくいきました)

(お、偵察ご苦労さん。うまく行ってよかったです)

ここに簪がない理由は別の場所で楯無さんと会わせて仲直りをさせていたのだ。偵察のシユテルが念話で結果を報告してきたのでホツとした。これでいつもより眩しい笑顔が彼女から出るであろうと思う龍輝であった。

お気に入り登録200人達成&正月スペシャル

これは少し先の物語。

正月になり、今日は俺ん家にお客さんが来る。

ピンポン・・・

「龍輝」

「お、来たか。いらっしやい、シャル、簪」

そう。お客とは俺の彼女のシャルロットと簪なのだ。なぜ二人が彼女なのかというと、こないだ二人から告られてどちらかなんて選べないので許されるはずがないのは

重々承知の二人と付き合うということになった。

「お邪魔します」

「シャルお姉ちゃん、簪お姉ちゃんいらっしやい。明けましておめでとう」

「おめでとう。琴音ちゃん」

「琴音ちゃんも振袖なんだね。とっても似合ってるよ」

「ありがとう。二人もすつごく似合ってるよ」

琴音との振袖で話が盛り上がってる間にお茶の準備をする俺だ。

「皆、お茶淹れたぞ……って琴音。なんだ、その目は。俺に何をする気だ。シャルに簪も同じ目をするな。寄るな、来るな……ふう、逃げるっ!!」

ジリジリと寄ってくる三人からお茶を置いて全力で逃げる。

「待てっ!!」

「お兄ちゃんを捕まえろっ!!」

「振袖姿で走らせないでよ！龍輝の家で鬼ごっこしたくないから早く捕まって〜!!」
「新年早々なんでこんなことになるんだあああああ!!」

正月早々龍輝の家から三人の美少女から追われる男子の叫びが響き渡った。

で、結局・・・

「くっ・・・」

「やっと捕まえた♪」

捕まりました。そして琴音が怖いと思ったのは内緒だ。

「で、琴音、俺に何をやる気だ」

「別にやましいことはしないよ。ただ、お兄ちゃんにはこれを着てほしいの」

そう言い、琴音が男性用の着物を取り出した。

「なんだ、そんなことか」

「だってお兄ちゃん、初詣なのに普段着で行こうとしてたでしょ。だからシャルお姉ちゃんと簪お姉ちゃんに手伝ってもらってこの着物を用意したの」

「龍輝の着物姿見てみたかったんだ〜♪」

「頑張つて準備したよ♪」

「んじゃ、期待に応えて着替えるか」

「そうして」

「ありがとな。さっそく着替えてくるわ」

そう言いながら琴音たちが用意した着物を取り、部屋を出て自分の部屋に向かおうとすると三人がついてくる。

「・・・なぜ、ついてくる」

「龍輝の部屋をみてみたくて」

「本音は？」

「着替えの手伝い・・・」

「断る!!」

そう叫び、唐突ダツシュで三人を不意打ちで動かせないまま自分の部屋に飛び込む。幸い、自分の部屋の扉には鍵がついているため、中に入ることはできない。だが、琴音が合鍵を持っているため、入られる可能性はある。

(そうしないための対策と)

バルニフィカスのバインドで扉をガツチリと固定する。

(これで入ってこれまい)

「よし、着替えるか」

着替え始めると案の定、外側から鍵を開けられた。琴音が合鍵を持ってきたのだ。ドアノブが回るがバインドで固定しているため開くはずがない。ガチャガチャとドアノブが揺れ、ドンドンと扉を叩く音が鳴る。

『お兄ちゃん！まさかバインドで固定したの!?!』

「さすがだなく琴音。その通りだ。着替えが終わるまで待つててくれ」
『そんな〜』

外で三人のガツカリとした声が聞こえる。

「にしてもこの着物の色、よく見つけたな」

渡された着物の色は上が赤く、袴が黒というあまり見ない色での着物である。龍輝の髪の色をモチーフにしたとよくわかる。

『こうなったら・・・』

『琴音ちゃん、それは・・・』

「ん?・・・魄翼」

ガギイイイイインツツ!!

『魄翼っ!?!』

ドアの向こうから怪しげな会話が聞こえ、嫌な予感がしたので廊下に魄翼を一枚展開してすぐに金属がぶつかる音が鳴り響いた。

『お兄ちゃん！壁越しでも魄翼を展開できるなんて聞いてないんだけど!?!』

「言つてないもん。当然だ」

どうやら琴音がカマエルで固く閉ざされた扉を破壊しようとしたらしい。ドアに当たる寸前に魄翼を展開したのでドアには傷一つついていない。

「おとなしく待ってろ」

『は〜い・・・』

もう手段がなくなつたので諦めた琴音だった。シャルと簪は琴音だけが頼りだったのでその琴音が何もできなくなつてしまったので潔く諦めたのだった。

数分後。

「お待たせ」

着替え終わり、部屋を出てすぐに琴音たちがいるかと思ったがリビングに戻り俺の用意したお茶を飲んでいた。

「はーい。相変わらずお兄ちゃんが淹れるお茶は美味しいね」

「お褒めいただき感謝します。それとシヤルに簪、いつまでひねくれてるんだ」

「だって・・・」

「せっかく龍輝の部屋に入れるチャンスだったのに・・・」

「今回は突然だったからな。それに部屋が散らかってるからあまり入れたくなかったんだよ」

「男の人が持つてるような本を隠すためじゃなくて？」

「言っとくが俺はんな物買ったことはない」

「それが嘘ということはあり得るよ、龍輝」

シャルが俺の部屋に入れないのは俗にいうエロ本を隠すためと言ってくるが否定すると簪がジト目で言ってくる。シャルもジト目だ。

「二人ともお兄ちゃんはそんな本買ったことは確かにないよ。買物とかは必ず私も一緒に行くしね。お兄ちゃんが買うとしたらガンプラとかだもん」

「え？」

「今の俺の部屋は製作中のガンプラで散らかってるんだよ。パーツを踏んでケガしたり転んだりしたら大変だしな」

「今は何を作ってるの？」

「ナラティブガンダムA装備」

「あれは時間かかるしパーツも多いからね。確かに危ないかも」

「とりあえず、龍輝がそういう本を持つてるとは無いというのがわかったよ」

「友達から借りるってことはないの？」

「渡される前に拒否する。それでもしつこかったら殺気をだして威嚇する」

「それだけで殺気出すのはどうかと・・・」

「彼女が二人もいるのにそんな物持ちたくないんだよ。いなくても持つ嫌だけだな」

「不意打ちはやめて・・・／＼／＼」

「同じく・・・／＼／＼」

「さ！早く初詣行こ！」

「そうだな。ここで神社となると・・・」

「箒の神社だったよね」

「よし！篠ノ之神社にレッツゴー！」

琴音の掛け声で一同は篠ノ之神社に向かったのだった。

篠ノ之神社に到着したが予想通り人が大勢いる。

「琴音、はぐれるなよ」

「うん」

「あ、おおい！リュウく〜ん!!」

「ん？」

人混みの中から聞きなれた声がしたと思っただら手を振りながら走ってくる人影が。

「友奈か、明けてましておめでどう。振袖似合ってるな」

「明けてましておめでどう！桜の色をモチーフにしたんだ〜♪」

「友奈は桜が似合う」

「ありがとう♪リュウ君」

「友奈ちゃん！早いよ〜！」

「振袖でよくそんなに早く走れるな」

「蒼に美森、明けてましておめでどう」

「おう、龍輝。明けてましておめでどう」

「明けてましておめでどうございます。龍輝お兄様」

友奈に遅れて蒼と美森も走ってきた。美森は友奈と同じく振袖で青白い色だ。

「アサガオを連想させる振袖だな」

「浴衣の柄はアサガオです」

「やっぱりアサガオか〜」

「お〜い！龍輝〜！」

「今度は誰だ。まあ、声でわかるけど」

「みんな、明けましておめでとう。龍輝！ちよつと来てくれ！」

「え、あ、おい！」

声の主、一夏が走ってきて新年のあいさつをしたらすぐに俺の手を掴んで走り出した。

「で、一夏。俺はなぜ神楽舞をする舞台の後ろに連れてこられたんだ？」

「実は・・・」

「一夏！龍輝！」

「あ、箒。神楽舞の衣装似合ってるぞ」

「あ、ありがとう。じゃなくて！一夏！なぜ龍輝を連れてきた！」

「なぜって、神楽舞で使う道具が足りなくていい材料を探してたんだろ？だから連れてきた」

「おい、俺は材料か。こら」

「龍輝、お前の力を貸してくれ！」

「別に貸すのは構わないが何をする？」

「お前のI Sのあのパック。あれを使ってほしいんだ！」

「オーライザーを？GN粒子を出せということか？」

「ちようどキラキラ光る物がないんだ！そしたらちようど龍輝がいたからその粒子で神楽舞を手伝ってくれ！」

オーライザーパック。GN粒子を放出し、敵の通信機器を使えなくするパックだ。機動性に優れている。

「わかったよ。だけどオーライザーだけだと足りないかもしれないな」

「え!?!じゃあどうするんだよ！」

「考えはある。シユテル、レヴィ」

「はい」

「は〜い！」

名前を呼ぶとすぐに出てきた。ちなみにみんな振袖だ。

「話は聞いてたな？手伝ってくれ」

「粒子を放出ですね。それぐらい容易いことです」

「頑張るよ！」

「レヴィは間違っても雷は落とすなよ？」

「うっ・・・加減します」

「一夏。これで大丈夫だ」

「お、おう」

「箒、神楽舞は何時からだ？」

「あと三分だ」

「もつと早く呼べ！一夏！」

バシンッ！

「いってえ！龍輝を見つけたらその方法が浮かんだんだよ！」

「しやあない。すぐに準備をする！間に合わせるぞ！」

「おう！」

「ああ！」

三分ですぐに準備をする。幸い大方の準備はすんでいたのでもどこで粒子を出すかということでの場所決めだけですんだ。粒子を放出する場所は舞台の裏で上から下に向かって放出するという方針に決まった。

「龍輝、合図で粒子の放出を頼む」

「了解、任せろ。行ってこい」

「ああ、行ってくる」

箒の巫女姿での神楽舞が始まる。

「そういえば正月に神楽舞ってするのかわ？」

「神楽舞事態はやるそうです。正月だと獅子舞になりますが、巫女姿での舞もやるとか」
「へえ、巫女姿の神楽舞って夏ぐらいにしかやらないかと思ってたわ。てか獅子舞も神楽舞の部類になるんだな」

「気になるところですよね」

シユテルの説明で納得する龍輝である。と、ある場所にいる神社の人が合図を出した

のが見えたので粒子放出にかかる。

「さ、仕事だ。行くぞシユテル、レヴィ」

「はい」

「うん！」

オーライザーを非固定浮遊システムで展開する。

「GNドライブ起動」

「ルシフェリオン、粒子放出開始」

「バルニフィカス、粒子放出〜！」

GNドライブから緑色の粒子を放出し、ルシフェリオンからは赤い粒子、バルニフィカスからは濃い青の粒子が放出され、舞台を彩った。

神楽舞はありえないはずの大盛況で終わった。観客は最後の粒子を見て感激したら
しい。

「神楽舞で大盛況っていいのか？ 神様に奉納する舞なのに」

「まあ、いいんじゃないか？ 社社の人も喜んでたし」

「そのせいで次の神楽舞もお願いされたけどな」

「その、すまん、龍輝」

「箒が謝ることじゃないよ」

「お兄ちゃん！」

「おう、琴音。出店でも巡ってたのか？」

「お兄ちゃんを探してたんです!!」

「ごめんなさい・・・」

「まさかGN粒子を使うとは思わなかったぞ。それに、許可なくISを部分展開したんだ。後で怒られるぞ」

「今回は俺の独断みたいなものだ。箒と一夏が怒られるようなことはしないようにする
さい」

「そういう話はまた後で！皆で出店まわろうよ！」

そんなに難しくない話をしていたのだが友奈にとっては難しいのかもしれない、話を中断させて出店に行くことになった。

龍輝に琴音、シャル、簪、蒼、美森、友奈、一夏、箒、セシリア、鈴、ラウラという大人数で篠ノ之神社の境内を歩き回った。その中の女子は振袖姿だ。

「そうだ。シャル、簪、琴音。心配かけたから何か奢るよ」

「やった〜！」

「ありがとう！」

「ありがとう！龍輝！」

「マスター」

「僕たちは〜？」

「わかってるよ、二人にも奢るよ。もちろん、デИАーチエにユーリにもな」

「うむ！」

「はい！」

(正月ならではの振袖姿の彼女二人と妹たちの眩しい笑顔が見れるとはな)

正月から幸せそうな顔をする彼女たちを見てそう思う龍輝だった。

第二十一話

タッグトーナメント当日、ピット内。

「お互い頑張ろうな。シャルル」

「うん、龍輝。ところで作戦はどうする？三回戦まで勝ち進めばボーデヴィツヒさんに当たるけど」

「一回戦と二回戦はちやつちやと終わらず。俺のバスターライフルで」

「開幕発射？」

「そうだな。一回戦ならそれでいける。だが、二回戦となるとそうもいかなくなるだろう。タイミングを見て発射する。巻き込まれるなよ」

「了解」

『Cブロック第一回戦を始めます。選手の方は準備をお願いします』

「よし、行くか！」

「うん！」

〜第一回戦〜

「汚ならしい男子が神聖な I S に乗らないでよ。代表候補生に勝つたのだから、まぐれと
いうのを見せてあげるわ！」

「覚悟しなさい！」

相手チームの女子二人の話がうざったいと思う龍輝である。

「なあ、シャルル。あいつらぶん殴りたいんだけど」

「堪えて。つていうかすぐに焼き払うからいいじゃん」

「早く撃ちたいんだけど。まだ始まらないの？」

『それでは一回戦、始め！』

「喰らいなさい！」

相手チームのIS、ラファールが銃を展開し、発射しようとした瞬間。

「焼き払え、バスターライフル」

「え？」

ドゴオオオオオオンツツ!!

『し、試合終了・・・勝者、姫終デユノアペア』

開幕一秒でバスターライフルが火を吹き、相手チームを飲み込み、大爆発を引き起こした。その一撃でSEが0になった。

「もっと強くなってから出直してこい」

〈第二回戦〉

「さっきのビーム砲は撃たせないわよ！」

「接近戦に持ち込むわ！」

二回戦での相手チームは打鉄を使用した。

「ファンネル」

「まさか自動攻撃システム!？」

「ハイマツトフルバースト」

ドゴオオオオオオンツツ!!

ファンネルにバスターライフル改とドツズライフル改とカリドウス複装ビーム砲改全発射で一掃する龍輝である。ここまでくると龍輝は鬼以上と思われるも仕方ないだろう。

く第三回戦く

「やっと来たぜ。三回戦」

「最短記録を出してきてよく言うよ」

(シャルルに呆れられた)

(見事な勝利でしたよ、マスター)

(サンキュー)

独り言のように思ったら念話でシユテルが話してきた。シユテルたちは観客席にて応援している琴音と友奈と簪と一緒にいる。琴音には万が一のために辺りを警戒してもらっている。

「やはり、貴様が立ちはだかるか。姫終龍輝！」

「あのとときの決着でオーケー？」

「それでいい」

「了解。じゃ、やろうか」

「龍輝お兄様、私のことを忘れないでください」

「そうだったあああ!!」

三回戦の相手はボーデヴィツヒだ。パートナーはまさかの美森である。

（あの機体、ものすんごくヴァルヴレイヴに似ているな。いや、似ているんじゃない。ヴァルヴレイヴか。カラーリングは五号機だけど武装は三号機だよな。あれが蒼の言っていた独自開発したISのプロト三号機か）

『三回戦始め!』

「弾幕はります!」

「やばっ! シャルル! 回避に専念してくれ!」

「わかった!」

開幕発射の美森の攻撃を回避する。ビーム砲を四本集結させたビームは高火力である。かすりでもしたらどこかしらは爆発する威力だ。

「やっぱあれは高火力だよな！知ってたよ！」

「お兄様、避けないでください。さっさと当たってください！」

「怖いわっ!!そして嫌だよっ!!」

「姫柊龍輝は私のだ！邪魔をするな！」

「兄妹同然の俺らの会話を邪魔するんじゃないやねえ!!かかってこいやおらあああつ!!」

「龍輝く僕はどうする〜?」

「シャルルは美森の相手を頼む！俺はあの軍人バカを叩き潰す!!」

「了解！というわけで美森ちゃんの相手は僕だよ!!」

「いいでしょう。やりましょう、シャルルさん！」

遠距離同士の機体に乗るシャルルVS美森のバトルの相性は悪いだろう。

「オーライザーの初お披露目だ！行くぞ!!」

そう、龍輝は一回戦と二回戦はレオスパックだったが今は初めて披露するオーライザーパーパックである。

「接近戦で行く！」

そう叫び、GNソードIIを二本出し、二刀流で接近する。

「わざわざ接近してくるとはなんと愚かなー！」

ボーディヴィツヒが右手をかざし、AICの発動し、動きを止められる前に一瞬で後ろに移動する。

「なっ!?!」

「後ろがから空きだ！」

「くッ！」

ガギイイイイインツツ!!

「反応が早いな！伊達に軍人か！」

「そちらもな！」

ボーデイヴィッツはすぐにビーム手刀でガードする。

「ボーデイヴィッツヒさん、笑ってる・・・」

「あの方も龍輝お兄様に教えられて変わったのですね」

「嬉しいことだね」

「このままお二人のバトルを見ていてもいいですよ？」

「それもいいけどあれを見せられたらこっちも負けてられないって思うよ」

「同感です。シャルルさん」

シャルルと美森もバトルを再開する。そっちのバトルも観客から見たらものすごい動きをしている。企業の人たちもこのバトルは見物で、全員こう思っている。龍輝は絶対敵にはいけないと。

「隠し玉を見せてやるよ！ビット！」

ビットと叫ぶとオーライザーが分離し、オーライザーに装備されているビーム砲がボーデイヴィッツヒを襲う。

「動力源を切り離すとは！だがこれで貴様は動けまい！！」

オーライザービットのビームをうまくかわしながらビーム手刀を展開しながら突撃してくる。持っているGNソードⅡをしまい、右手に意識をこめる。そして。

「GNソードⅢ」

ガギイイイインツツ！！

「なっ!?!」

「あいにく動力源はもう一つあるんだな。エクシアの太陽炉を使っているからな！接近戦は得意だ!!」

「くっー！」

たまらずボーデイヴィツヒは後退。その隙にレールカノンを発射。着弾し、爆発をおこす。爆煙から出てきたのはオーライザーの片翼であった。

「防御も可能なのか・・・」

ビーム兵器相手にはGNフィールドで防御し、実弾系はオーライザー自体で防御可能という耐久性を持っている。

「おらおらー！どんどん行くぞ!!」

龍輝はGNソードⅢをソード形態で接近する。それをかわすとオーライザービットのビーム攻撃がくる。攻撃面ではバランスのとれた装備である。

「そろそろ終わりにするか、ビット！」

龍輝の声に反応してオーライザービットが戻り、マナに接続される。

「燃え上がれ！バハムート！！トラ・・・」

キイン・・・

「ん？」

「避けて！！龍輝！！」

「え？うおっ!!？」

シャルルから突然の回避を叫ばれ、後ろに向くと同時に青白いビームがきたので寸前でかわす。

「あつぶねえ！ん？やばっ!!」

回避して安心したと同時に数多のビームが襲いかかってきたので全力で避ける。

「弾幕が凄すぎる！シャルル！一旦合流・・・あぶねえ!! いい加減にしてくれ！美森!!」

美森に向かってGNドツズライフルは放つそれでも弾幕の嵐はやまないが一瞬だけ隙が出たのですぐに太陽炉の出力を上げ、一気に離脱する。

「あつぶねえ。シャルル、無事か!？」

「僕は大丈夫！それとごめん。抑えきれなかった」

「気にすんな、シャルルのおかげでかわすことができたからな」

「うん」

「あの隙で逃げられるとは思ってませんでした」

美森の声に反応して二人して美森の方に顔を向けると青黒い機体の左右に黒い巨大な砲頭が四本ずつ展開されており、計八本砲台となっている。元々の腕に黒い銃を両手に持っているため、十砲台といっても過言ではないだろう。その姿を見た者はこう思った。黒い悪魔だと。

「魔王?」

「黒いガンダムバエル？」

「龍輝お兄様もそっくりですか」

シャルルが美森の姿を魔王と呼んだので機体色で天使のような悪魔と言われたガンダムバエルの黒バージュオンと眩くと美森に呆れられた。どうやら蒼もそう言っていたみたいだ。

「美森がとてつもなく強いというのがわかった。だが、兄貴分として負けるわけにはいかないよな」

「お兄様にはまだ勝てないですが龍輝お兄様には勝ちたいと思っています」

「そんなわけにはいかねえって言ったろ。トランザムでは無理だろうな。なら、このモードで相手をするよ」

「トランザムの他に特殊なモードがあるというのですか!？」

「龍輝！僕もそれ聞いてないよ！」

「ここにきてまだ隠し玉を!？」

俺の宣言に三人が驚く。ボーデイヴィツヒに至っては隠し玉の連続なのでもううん

ざりしているだろう。

「見せてやるよ！これがマナに追加した新しいモードだ!!怒れ、バハムート!!イグナイトモード!!」

『ダインスレイヴ』

機械音が聞こえたとき、たんにバハムートから黒いオーラが出てきた。それだけではなく、赤い装甲が黒くなつていき、頭部、肘、腰部スラスタ、脚部スラスタ、そして、オーライザーから赤く光る装甲が展開され、ツインアイが赤くなり、赤い光りが残像のようにツインアイから出ていた。

「なんだ、それは……」

「意図的な暴走を内に封じ込める技、それがこのイグナイトモードだ！行くぞ!!」

禍々しい姿に変化したバハムートが美森とボーディヴィツヒに高速で襲いかかる。その姿を見た観客たちは全員言葉を失っていた。唯一、琴音たちだけが。

「お兄ちゃん、あれを使うことにしたんだね」

「あのモードになったマスターは誰にも止められませんね、
琴音姉様」

そう呟いていた。

第二十二話

禍々しい姿へと変わったバハムートを見てみんなが固まっている。

「リュウ君のあのモードは……」

「ああ、あれがあいつの第四世代だと証明するモードだな」

ピットで蒼と友奈が変化したバハムートを見て納得していた。

「早くあいつとバトルりたいな」

ウズウズしている蒼であった。

「り、龍輝……?」

変わり果てたバハムートを見てシャルルも固まっている。無理もない。たった一つのモードでここまで変わってしまうのだから。

「暴走を内に封じ込めるだど？ そんなことが出来るはず……」

「現実におきています。ボーデイヴィツヒさん。あの状態の龍輝お兄様の力は先ほどより格段と上がっています。お兄様でも勝てるかどうか……」

「そこまで見抜くか。さすがだな、美森」

「正気はあるんだね。龍輝」

「意図的におこした暴走を内に封じ込めたんだ。正気はあるさ。ただ、変に使うと爆発して完全に暴走する可能性があるから気をつけなくちゃならないけどな」

「えっ!？」

さらつととんでもないことを言う龍輝に驚くシャルルである。

(暴走した龍輝を止められる自信がないよ……)

そう思うしかないシャルルである。こんな姿の龍輝を相手したいというのは蒼ただらう。

「んじや、まずは美森だ」

「近づかれる前に撃ち落としてみせます！ファンネル！」

美森のI Sの腰部分から青白い小さなミサイルのような物が放たれた。それらは別々の動きをしながら龍輝の周りを動きながらビームを撃ってきた。

「ヴァルヴレイヴにファンネルなんかないけどな。っていうかその腰部分のやつガンダムスローネツヴァイのじゃねえのか？」

冷静に自分の推理を話ながら一瞬で美森のファンネルを破壊する龍輝である。速すぎて龍輝は動いていないのにファンネルが爆発したように見えた。

「速すぎです……」

「何がおきたのだ……？」

「龍輝、なにをしたの……?」

「ん? 『魔剣ダインスレイヴ』で一閃しただけど」

龍輝の右手には黒く刀身が二つに別れており、柄には赤い魔眼のようなものが埋め込まれている禍々しい一本の剣が握られていた。

「じゃあ、美森。しばらく大人しくしてもらおうかつ!」

ビュンツ!!

「なっ!?!」

「速いっ!?!」

前屈みになったと思ったら一瞬で美森の目の前に移動し、ダインスレイヴを一閃。なす術もなくダインスレイヴの一撃でSEが0になり、制御できなくなった美森。

「さすがです、龍輝お兄様。また真剣なる勝負を」

「ああ。またいつかな。さて、残りはお前だ。ボーデイヴィツヒ」
「うっ……」

（強すぎる……昔の私なら躊躇いなく突っ込んでいただろうな。だが、あいつのおかげで今の私は昔の私ではない）

「どうした？ボーデイヴィツヒ」

「……だ」

「ん？」

「私の負けだ」

「……そうか」

負けを認めた相手を切りつけることは絶対にしないのでダインスレイヴをしまおうとした瞬間……

ドグンッ！

「っ!？」

(なんだ!?!このプレッシャーは!?!)

突然のプレッシャーに驚き、辺りを見回す龍輝。すると。

「ああっ!」

ボーデイヴィツヒから悲痛のような声が聞こえ、急いでボーデイヴィツヒを見る。

「ボーデイヴィツヒっ!」

「な、何あれ!？」

「ボーデイヴィツヒさんのISが変形……いや、変貌している……?」

ボーデイヴィツヒのISがまるで粘土のようにグニヤリと変貌し、ボーデイヴィツヒを呑み込み、人型に変化した。

「あれはヤバいっ!!美森!シャルル!急いで避難しろ!!」

「龍輝はっ!?!」

「俺は……あのバカを取り戻すっ!!」

「無茶です!あの様なものを相手するなど!」

「でもやるしかねえよ!大丈夫だ!あんなに威圧を感じるが負けるなんてことはねえ!!」

『ダインスレイヴ』を構える。

「さあ、やるか。ラウラ!!」

ガシヤアアアアンツ!!

「今度はなんだ!?!」

「うおおおおおおおおおおっ!!!」

「一夏!?!あ、バカ!!」

突然別方向から破壊音が聞こえたと思ったら白式を纏った一夏が突っ込んでいった。が、難なく弾かれ、攻撃を喰らい、ぶっ飛んできた。

「くそーあいつ!!っ!!?」

一撃で白式のSEが無くなったのか強制解除され、生身の状態で向かおうとした瞬間、変貌したISが一瞬で一夏の目の前に移動し刀を降り下ろそうとしていた。

ガギイイイイインツ
!!!!

「……………え?」

「『え?』じゃねえよ!!バカかお前は!!もう少しで本当に死ぬところだったぞ!!生身で勝てるわけねえだろ!!こいつの相手は俺がする!!お前は引っ込んでろ!!」

一夏に当たる寸前のところで龍輝が間に入り、ダインスレイヴで受け止めていた。よほどの威力なのか龍輝の足を中心に地面に亀裂が入っている。

『姫終、そいつは教員たちに任せてお前も避難しろ』

「正直に言わせてもらってもいいですかね!？」

『なんだ?』

「今から来る先生たち全員足手まといになるんで来なくて大丈夫です!! 援護もいりません!! 強いて言うなら蒼を指名します!! でもあいつは他の生徒の避難誘導にまわしてるんで無理なんで俺一人でやります!!」

『姫終、貴様は教員をバカにしているのか』

「じゃあ、ここの先生たちは全員ブリュンヒルデに勝てるでも言うのですか!？」

『なに?』

「あれはVTSですよね!?! ならあれはあなたのデータが使われているんですよ!?! 少なくとも普通の教員じゃ歯がたちません!! 俺がやります!!」

『姫終君一人でなんて無謀すぎます! 後のことは教員たちに任せてください!』

「何度も言わせないでくださいよ! 山田先生! 少しは生徒を信じてください!!」

『姫終、無理だと思っただらすぐに撤退しろ。いいな』

「はい!! ってなわけだ、ラウラ。もう少し付き合ってもらおうぞ!!」

つばぜり合いをしながら通信の対応をしながら弾き返す。最後に言った言葉が織斑

先生の心を動かしたのかもしれない。

(イグナイトモード限界稼働時間残り九十秒か。やってみせるさ!ん? 攻撃してこない?)

「なるほど、一定の距離を離れていると攻撃してこないのか。ゲームのボスかよ」

「龍輝!!」

「なっ!? なんでお前らまだここにいるんだ!? 早く撤退しろ!!」

後ろを見るとISを展開したままのシャルルと美森に抑えられている一夏の姿があった。

「僕の考えた作戦をこれからやろうと思うんだけど……」

「時間稼ぎなら任せろ!! 早く準備を!!」

「ありがとう! 一夏、僕のリヴァイヴの残りエネルギーを白式に送るよ」

「白式に? そんなことができるのか?」

「できるよ。さ、白式を出して」

「お、おう」

リヴァイヴからコードを出し、待機状態の白式に挿入する。

「転送完了。展開してみて」

「来い、白式！」

展開されたのは白式の右腕と雪片二型だけ。

「やっぱりそれぐらいしか展開できないか」

「充分だよ。ありがとな、シャルル」

「絶対勝ってね」

「ご武運を」

「おう！」

（残り三十秒を切った！やれるか!?!）

いくらイグナイトモードであるとはいえ、過去のブリュンヒルデを圧倒するほどの無双ぶりをしている龍輝である。

「龍輝!!待たせたな!!」

「待ちくたびれたよ!!零落白夜をやるんだな!?俺が引き付ける!その隙に!!」

「おう!!」

「少し大人しくしてろ!!」

つばぜり合いからありったけのビーム砲を0距離発射し、行動を停止させた。その一撃でバハムートのSEが切れ、解除される。

「今だ!!」

「うおおおおおおおつ!!」

後ろに回り込んでいた一夏が零落白夜を発動させ、一閃する。切れ目からズルリとラウラが出てきてすぐに一夏が抱いて撤退する。この時にラウラはシユヴァルツェア・レーゲンのコアを握っていた。

コアを失ったVTSはコアを取り戻そうとゆつくりとラウラに近づこうとした瞬間、上空で黒い光りが照らし出した。

「なんだ？つて龍輝!？」

上空にはエルシニアクロイツを展開し、髪の色が白黒で黒いカラスのような羽を羽ばたかせた龍輝がいた。

「コアも無くなったから遠慮なくやらせてもらう!!エルシニアクロイツ!リミッター解除!出でよ、巨獣!ジャガーノート!!」

龍輝の目の前に黒い魔方陣が五つ出現し、エルシニアクロイツを降り下ろした瞬間、魔方陣から黒い魔力砲が発射され、VTSの周囲に着弾した瞬間、黒い大爆発を引き起こした。

アリーナを物凄い衝撃波が襲い、煙が晴れるとVTSは跡形もなく、地面が深くえぐ

れていた。

「ふう、終わったな」

『作戦が見事に決まったな。主よ』

「急に呼んでごめんな、ディアーチエ。避難誘導してくれてたのに」

『気にするでない。だが、突然ユニゾンをすると言われた時は驚いたがな』

「なはは……」

そう、龍輝はバハムートが解除された瞬間念話でディアーチエを呼び、ユニゾンを行ったのだ。龍シユテルたちは遠く離れていても一瞬で龍輝の元に翔べることができ
る。

「龍輝！」

「龍輝お兄様！」

「ラウラの様子はどうか？」

「安心して。眠ってるだけ」

「そりゃ良かった」

「かわいい寝顔だよ」

「龍輝お兄様もご無事で何よりです」

「まあ、今ところは……」

「え？」

美森が首を傾げている。当然だ。美森にユニゾンを見せたのは初めてなのだから。

「シャルル、あと頼む。俺は保健室に行つて寝るわ」

「うん、ゆつくり休んで」

「え？どういふことですか？」

「美森に説明しといてくれ。そろそろ限界」

「任せて。実はね、美森ちゃん……」

シャルルが説明を始め、俺は保健室に向かう。ユニゾンで体は動いているが、解いたらすぐに倒れるであろう。

（体が重い……）

『短時間とはいえ、最大火力の魔力砲を撃つたのだ。消耗が激しいのは当然であろう』
(だよなあ……)

『今はゆっくり体を休めるのだ。主よ』
(そうさせてもらおうよ……)

念話でディアーチェと話ながら歩いていると保健室に到着し、ベッドに横になる。

「ユニゾン解除」

ディアーチェの甲冑姿がISスーツに戻り、ディアーチェが出てきた時には龍輝は眠りに入っていた。

「王、マスターは？」

「シユテルか。以外と速かったな。今眠りに入ったところだ」

「被害はあるか？」

「マスターたちが頑張ってくださいったおかげで怪我人0です。ただ、アリーナが……」

「まあ、直すのには相当時間が必要であろうな。我らも手伝えることがないか聞いてみ

るとしよう」

「はい」

四時間後……

「う……今何時だ……？」

「龍輝！」

「リュウ君！」

「龍輝お兄様！」

「え？なんでお前ら……ぐはっ!!」

起きた瞬間友奈と美森に見事なタツクル（抱きつき）を喰らい、壁に激突する。

「デジャヴだ……」

そう言うしかない龍輝であった。

第二十三話

龍輝が目覚めて数十分後、夕日が射し込む保健室で寝かされているラウラが目覚めます。

「ここは……」

「保健室だ」

「教官……」

「貴様のISにVTSが組み込まれていた」

「っ!?!」

織斑先生から自分のISに非道なシステム、VTSが組み込まれていたことに驚きを隠せないラウラ。開発が中止されたシステムが極秘裏で開発され、自分のISに組み込まれていたとは誰も予想できまい。

「発動された原因はわかったのですか……?」

「いや、不明だ。そもそもあれは強い意思などで発動するものだ。あの時の貴様は強い意思などなかったはずだろう?」

「はい。あの時は自分の強さと姫終龍輝の強さの差が大きすぎることにわかっていたので潔く負けを認めていました。姫終龍輝に勝ちたいという気持ちはありましたがそこまで強く思っていなかったと思います」

「それまで聞ければいい」

「あの……教官!」

「なんだ?」

「私はどうやって助け出されたのでしょうか」

「……これは言わなくちゃ納得しないか。織斑と姫終の二人だ」

「え?」

「姫終が隙を作り、織斑がとどめをしたんだ。もういいな。私は行くぞ」

「はい、ありがとうございます……」

夕日で照らされた保健室で考え続けるラウラであった。

〜次の日〜

「龍輝、体はもう平気なのか？」

「先にあいさつをしろ、一夏。倒れると言っても寝てるだけだから別に異常はないよ。むしろあるとするなら起きた瞬間の一撃で後頭部が痛いってだけだな」

「う……」

「あはは……」

一夏が心配してきたが異常はない。起きた直後のタツクルは流石にきくが。抱きつき（タツクル）をしてきた友奈と美森はバツが悪そうな顔をしている。簪は過去に自分も同じことをしているので苦笑いだ。

「てか、俺よりもお前だ、一夏。腕は平気なのか？」

「完全に治ってるよ」

「早いな」

昨日のVTS戦で腕を怪我した一夏だが治ってますアピールでブンブンと腕を振っている。

「たく、あまり無茶するなよな」

「それ、リュウ君が言う？」

「一番無茶したの龍輝お兄様ですよね」

「心配かけすぎ」

「ごめんなさい……」

一夏に言った言葉はブーメランだと思ったたら友奈と美森と簪に目に光りが灯つてない顔で言われる。なにされるかわかったもんじやないのですぐに謝る。朝から怖いことされるのはごめんである。

「じゃあ、またな。友奈、美森、簪」

「うん！」

「またお昼休みに」

「じゃあね」

「おう、屋上でな」

教室に着いたので別クラスの友奈と美森と簪と別れる。一夏にも接し方は変わらなく、よく話しているのです。そこは安心している。簪は入学当初と比べると笑顔が増えてきた。楯無さんと仲直りしたためだろう。

「そういえば龍輝、シャルルは？」

「あゝ……まあ、後で来るよ。先に行つててと言われたからな」

「?そうか」

理解ができずに頭の上に?マークが浮かび上がつてそんな顔をする。

「おはよう」

「おはよーさん」

「龍輝! またお前は無茶をして!」

「龍輝さん! どれだけ心配したと思つてるんですの!」

「てい」

「あうっ」

「きゃっ」

教室に入った瞬間に箒とセシリアが怒りながら迫ってきたが二人の頭に軽くチョツプをする。

「揃いも揃ってなんで先にあいさつをしない？まあ、今回も心配させたのが悪いから何も言えないがな」

「つう〜……もう少し優しくできないのか……」

「軽そうに見えて何気に痛いですわ……」

「あれ、軽くやったつもりだったんだがな。ごめんごめん」

「龍輝のチョツプって軽いほど体の中で響くんだよな」

「別に柳緑花紅はやってないんだがな」

「りゆう……なに？」

「こつちの話だ、気にするな。それより、早く席に着くぞ。先生たちが来る」

あるアニメの技名を小さく独り言で言ったのだがそれを拾う一夏の耳に若干驚きながら席に着くように言う。

「席に着け、HRを始めるぞ。姫終、体調はなんともないのか」

「ご心配ありがとうございます。自分は大丈夫です」

「そうか、山田先生、始めてくれ」

「は、はい。えと、き、今日はですね、転入生……なのかな？を紹介します……」

山田先生が話し終わったらドアが開き、一人の生徒が入ってくる。その生徒の姿は見慣れた金髪、今までズボンだった制服がスカートに変わっている。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願ひします」

「えくと、デュノア君はデュノアさんでした……また部屋割りしなくちゃ……」

「え？どういうこと？」

「デュノア君って本当は女の子だったの？」

「じゃあ、同室だった姫終君とは……」

「おい、龍輝！聞いてないぞ！」

「言っけないもんな」

「お前、いつから気づいてたんだ!？」

「最初からだ。てか、なんで男だと騙される？どう見ても女の子だろ。女の子らしい仕

草がいくつもあっただろ」

『あ……………』

言われて気づくクラスの皆に呆れる龍輝である。

ドゴオオンツ!!

「なんだ!？」

説明が終わった途端教室のドアが何者かに破壊された。破壊されたところを見ると I S を展開している友奈と美森がいた。

「友奈!?!それに美森も!?!なにしてんだ!?!」

「リュウ君、私たちにそんなこと隠してたんだね……………」

「話してくれてもいいじゃないですか……………」

龍輝を見る目に光りが灯ってなく、顔にやけに黒い影が見える顔で言う友奈と美森。

「お、落ち着け、二人とも！確かに黙ってて悪かったと思ってるよ！でも……」
「でも、なんですか？」

言葉が途切れた理由は美森が一瞬で龍輝の目の前に移動し、銃を向けたからである。

「それをしまってくださいないか、美森。それだと話しづらいんだが。っていうか絶対気づいてたよな」

「しまうのは嫌です。返答次第では引き金を引きますよ。それと最後の質問ですが答えは、はいです」

「怖いわ!!蒼がなんか言ったのか!?!そしてやっぱ気づいてたよな!?!それなのに俺は殺られるの!?!」

「お兄様からは徹底的にやってこいと言われてます」

「あんのバカ野郎がああああああ!!!」

いくら美森もここまでやるとは思わなかったが蒼からの指示で本気で思う存分やる気的美森を尻目にそんな指示をした幼馴染に叫ぶ龍輝であった。

「理由を話さないのならここでお別れです。おやすみなさい、龍輝お兄様♪」

銃口に光りが集まり、ビームが発射される。

キインツ!!

「な!?!」

「あまく見るなよ。美森」

ほぼゼロ距離発射を魄翼で防ぐ。魄翼は美森の銃口に触れるぐらいの距離に展開されている。

「ここで炎の矢をやったら跡形も無くなるからやらないけどバトルしたければまた後でな。全力で相手をしてやるよ」

「じゃあ、私もね。リュウ君」

「二人がかりでかかってこい。わかったらさっさと自分の教室に戻れ」

「失礼しました」

ISを解除し、破壊したところから廊下に出て教室に戻っていった友奈と美森。

「たく、マジで殺られると思ってヒヤヒヤしたわ。まあ、魄翼の展開が遅れるなんてことはないけど。織斑先生、お騒がせしてすみませんでした。壊れた壁は俺が直しますので……流れ弾でも飛んでったか？」

後ろを向くと一夏を守るようにISを展開し、AICを発動しているラウラがいた。

「いや、来てないけど守ってくれた。ありがとな、ラウラ……んっ」

「なっ!？」

「なにしてんだ？ラウラ」

「ぶはっ、なにつてキスに決まってるぞ、師匠」

「そりゃ見ればわかるわ。っていうか今なんつた？師匠？」

「織斑一夏！お前は私の嫁にする！異論は認めん！」

「え？」

「なんで嫁!? 婿じゃなくて!? ってか人の話を聞け!!」

「姫終君ナイスツツコミ」

ラウラの発言に思ったことを叫んだらクラスの女子一人が呟いた。一夏は困惑して固まっている。

「それから姫終龍輝! お前は私の師匠だ!」

「お前を弟子にした覚えはないんだが」

「よろしく頼む! 師匠!」

「だから人の話を聞けええええええええ!!!」

朝から騒がしい中、一層騒がしい龍輝の叫びが学園中に響いたのだった。

第二十四話

「はあ……」

昼休み、学園の屋上で昼御飯を食べる直前にため息をする龍輝。ため息の理由は……。

「師匠、今日の特訓はなにをするのだ？ 私はあの高速移動を極めたいぞ」

朝から休み時間になればすぐに来てチャイムがなるまで離れないラウラが原因だ。ちなみに最後にラウラが言っていた高速移動は龍輝自身のすばやさでバルニフィカスの雷を使った技である。龍輝のすばやかさは常人の域を遥かに越えている。

「お、それなら俺もだ」

「私もだ」

「わたくしもですわ」

「私も」

「僕も」

「私も」

「お姉さんも」

一番目から順に一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、簪ときて最後になぜここにいるのか、いつからいたのか謎の楯無さんが言ってきた。

「なんで皆ものつてくんの？そして楯無さんは生徒会大丈夫なんですか」

「い、今は休憩中だから大丈夫よ。それより、龍輝君のあのすばやさは私を遥かに上回っているからね。教わりたいのよ」

「あんなすばやく動けるようになったら龍輝と肩を並べて戦えるようになると思っ
な」

「そうか。なら放課後やってみるか」

「よしー！」

別に一夏の言葉に感動したわけじゃなく、単純にバルニフィカスの雷に耐えられるか

やってみようということだ。それを一夏たちはあのスピードを習得できると思っているようだ。

く放課後く

アリーナにて。楯無さん参加の蒼たち三人と琴音を合わせて計十三人という大人数での特訓で龍輝のすばやさ教わる者は一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪、楯無さんだ。蒼たちはすでに充分強いので教わらないらしい。

「龍輝、最初はどうすんだ？」

「お前たちに言うことがある。俺のすばやかさはバルニフィカスの力を少し使ってやっていることだ。ここまで言えばわかるよな？」

龍輝の言葉に意味がわかった一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、簪は顔を青くした。ラウラはわかっておらずシャルの顔を見て首を傾げている。楯無さんも簪を見て教わるのを間違えたんじゃないかと思っっているようだ。

本気の半分のバルニフィカスの力がわからない一夏に龍輝が全身に青い雷を纏わせ
た。雷の力が強すぎてアリーナ一帯がバチバチと電気が弾けている。

「この電力に耐えられるかな？とりあえず俺に触れてみる」

「わ、わかった」

雷で青くなっている龍輝に恐る恐る触れようとする……

バチイッ!!

「いって!!」

触れる寸前に龍輝の体と一夏の指先に電撃が疾り、衝撃を受けた一夏は指先を握って
いる。よほど痛かったのだろう。

「これがバルニフィカスの本気の半分だ。まあ、俺は鬼じゃないから最初は軽く雷を流

していいこう。最終目標がこれな」

「こんなに痛い電撃初めてだ……って、今気づいたんだがそれで体を守ることって出来るよな」

「いいところに気づいたな、一夏。雷を体に纏わせておけば大抵の物は守れるぞ」

「無敵じゃねえか!!」

「だけど一夏の零落白夜とかそういうのは防げないがな」

「いや、その言い方だとそれしか防げないってしか聞こえないよ」

「その通り」

「龍輝は絶対に敵にしちやいけないのがよくわかったよ」

「一夏のツツコミの後に弱点?を言うと言が纏めたので肯定するとシャルが呆れていた。た。」

「本気だどうなるのだ? 龍輝」

「篝さんの言う通り、わたくしも気になっていました。本気の半分でその威力なのですからさぞ強力なのはわかりますが」

「本気だと自分も痛手を喰らうぞ。強すぎて服がボロボロになる。体の影響は大きい

な」

「そ、そんなにか……」

「そうだよ。前に試した時はヤバかったな。威力が強すぎて山一つ消し飛びかけたもんな」

「はあっ!?!」

「や、山を!?!」

「咄嗟に上空に撃ったからよかったけどその威力で曇り空だったのに一気に青空になったぜ」

「あれは流石に僕もヤバいつて思ったよ」

「マスターとレヴィの本気はとても危険ですからね」

過去の出来事を話し、本題に入る。

「で、受けてみようと思う者はいるか?」

シーン……

「だろいな」

「そ、それでも僕は受けるよ！」

「わ、私も！」

「俺もだ！」

シャルに続いて簪、一夏が言ってくる。素直を言うところでも着いてこようとするだけでも嬉しいものである。

「ほう、そうか、受けるか。その気持ちだけで充分だ。一夏、シャル、簪。これはすごく危険なものだ。だから、お前たちにこれは教えられん！」

「は!?!」

「え!?!」

「なんで!?!」

「だーから、これは危険だから教えられないんだよ。だから「なんでだよ!?!俺たちだつて頑張れば」……」

ベチンツ!

「いつてええ!!」

話してる途中なのに一夏が割り込んできたので一夏の額にデコピンをする。悲痛の叫びをしながらデコピンした場所を手で抑えていた。音が音だったので蒼と美森と友奈と琴音以外は顔を青くしながら額を抑えていた。

「話を遮るな。ちゃんと最後まで聞けよ」

「だ、だからってデコピンは……」

「話を遮るからだろう。話を戻すぞ。なんで教えないかという俺はスピード特化で殲滅していくことや火力重視で遠距離射撃もできる。だけど一夏は零落白夜を決めるためにスピードは必須だが、俺と同等のスピードがあれば強いけどお前も俺程ではないけど努力次第で手に入ると思うぞ。シャルと簪は後方支援タイプだからスピードを高めても振り回されるかもしれない。だから味方が戦っている間に移動したりして支援していくことをおすすめる」

「龍輝……」

「と、まあ、こんな感じで皆にはそれぞれの強さがあるんだ。それを見つけてレベルアッ

プしていけばどんどん強くなるさ」

「確かに龍輝の言う通り、スピードを格段に上げると強くなる一方で振り回されるのがオチかも」

「だね。じゃあ、いつも通りそれぞれの戦闘スタイルに合わせた特訓を開始だね」

「頑張れよ。あ、そうだ、琴音」

「なに？お兄ちゃん」

「新装備作ったからちよつと試してくれ」

「え？」

「了解」

話を終わると琴音の元へ行き、預かっていた待機状態のアカツキを琴音に返していた。その間に箒は先程の龍輝の発言が空耳でないかを確認するために一夏たちのところに向かった。

「今、新装備って言わなかったか？」

「やっぱり、箒にもそう聞こえたか？」

「わたくしもですわ」

「嫌な予感がするわね」

「うんうん」

「新装備とは気になるな。私にも新装備を作ってくれないだろうか。師匠に聞いてみよう」

「ラウラ、それはやめといた方がいいよ。作ってくれたとしても扱うことができないだろうから」

「そ、そこまでののか。シャルロット」

「うん」

「皆、少し離れてろ。巻き込まれても知らないぞ」

「「「「すぐに離れよう／ましよう!!」「」」」」

「あ、ああ」

「え、ええ」

龍輝の忠告を聞いた瞬間、一夏、箒、セシリア、鈴、シャル、簪がラウラと楯無さんの背中を押しながら全力で離れる。二人はこれから何が起こるのか少しわかってないようだ。

「いいぞ〜琴音」

「うん、おいで、アカツキ！からのカマエル！」

琴音の専用機、アカツキ（イフリートパック）が姿を現した。それと同時に琴音の右手に紅蓮を纏う戦斧（カマエル）を展開する。どこに新装備があるのかというと、アカツキのイフリートパックのバックパックが変わっているということだ。前は二枚の翼だけだったのにその翼は無くされている。そのかわり、数枚の翼のようなものがある。見た目からして忍バルスガンダム（のバックパック）を彷彿とさせる。

「ねえ、なんかアカツキのバックパックが変わってるように見えるのは私だけ？」

「いや、見間違いないよ、簪。僕もそう見えてるから」

「あのバックパック、どんなことができるんだ？」

『今から琴音に説明するから一緒に聞いてたら？』

「うおっ!?!龍輝!?!通信で……」

『こいつはイフリートパックの新装備、名を、そうだな（炎翼）とでも名付けようか。この（炎翼）は背中につけている状態だと炎を出して機動力を格段に上げることができる。その際に起こる炎が翼のようだから安直に（炎翼）と名付けたよ。その（炎翼）を背中

から切り離し、カマエルのメギド形態で砲口に取り付けると集束砲〈グングニル〉というものになる。威力は……数字でいうより見てもらった方が早いな。それは後でやるか。あと、背中につけている状態だと翼だけを切り離してビットとして役にたつ。ライフルモードにソードモードの二種類だ』

『おお。ねえ、お兄ちゃん。これって手裏剣に変形できるの?』

『いや、出来ん。そのかわりに変形して砲口に取り付けるようにした』

『なるほど』

「それ、とてつもなく強いだろ」

『それは琴音次第だな。んじや琴音、〈グングニル〉を俺に向かって撃ってみろ。俺はバルニフィカスを使うから』

『は〜い』

『通信切るぞ』

通信を切り、アリーナの端で龍輝と琴音の動きを見る一夏たち。新装備〈炎翼〉の性能を見るために誰も何も言わず一切動かない。

「カマエル、メギド！炎翼を切り離し接続！グングニル!!」

メギドの砲口に〈炎翼〉が接続され、とてつもない量の炎が集束されていく。

「な、なあ、蒼。龍輝のやつ、あの量の炎をバルニフィカスだけでどうする気なんだよ」
「俺が知るかよ。まあ、あの〈グングニル〉とやらでもあいつは倒せねえよ」

「え？」

「始まるぞ」

「え、もうチャージが終わったのかよ」

蒼に言われ、龍輝と琴音の方を見るとチャージが完了したのか〈グングニル〉に集束されていた炎が止まっており、砲口から炎が溢れでている。

「チャージ完了！グングニル、発射！！」

「バルニフィカス、ブレイバー。ふんっ！！」

ズバアアアッ！！

「え……?」

「いったい、何が……」

「すごいな。龍輝のやつ、あれだけの炎を真つ二つに斬りやがった」

そう、龍輝はバルニファイカスをブレイバーモードにし、グングニルを真つ二つにしたのだ。

「嘘だろ……」

『さすがお兄ちゃんだね』

『ちよつとヤバいかなって思ったけどな。琴音が使ったことで出力が大幅に上がりやがった。びつくりしたわ』

「龍輝、〈グングニル〉の威力を見せるんじゃないのかよ」

『真つ二つにしなかつたらこのアリーナは消滅してるぞ。シールドを見てみる。ひびが入ってるだろ。真つ二つにしたから威力が下がったからこれだけですんだんだよ』

「お前が作るものほとんどでもねえことがよくわかったよ。それより龍輝、ちよつと模擬戦しないか?」

『いいぜ、蒼。お前とは早く戦いたかったからな。本気でいく』

「よし。じゃあ、行ってくる」

「いってらっしゃい、アオちゃん」

「楽しんできてください。お兄様」

その後、龍輝と蒼の模擬戦は人間同士のやる模擬戦とはかけ離れていたのがあった。一夏たちは二人の強さが異常すぎて絶対に追いつけないと思ったのであった。

第二十五話

「なあ、龍輝。後ろからすごい視線を感じるんだが」

「気にしたら負けだ。一夏」

龍輝たちは今、臨海学校で泊まる旅館に向かうバスに乗っている。クラスごとに別れているので蒼たちと簪とは別のバスだ。ちなみに龍輝の隣は一夏である。なぜ一夏なのかというと、誰が龍輝の隣か誰が一夏の隣を取るかで女子たちが大騒ぎしたので織斑先生が一喝し、龍輝の隣は一夏ということと話が終わったのだ。龍輝と一夏は一番前に座っているため、後ろの女子たちから視線を感じているのだ。

「蒼たちは大丈夫なのか？」

「あいつには美森と友奈という鉄壁がいるから大丈夫だ。無闇に近づいて色目を使ったら銃で風穴を開けられるかも知れんぞ」

「さらっと怖いこと言ったな」

この龍輝の言葉を聞いた蒼狙いの一組の女子は顔を青くしていた。

「して、お前たちは海は初めてだったか？」

龍輝が一夏に向けた言葉ではないことを言った瞬間、龍輝の頭の上、両肩、膝の上に光りが集まり、シュテルたちが姿を現す。頭の上にいるのがシュテルで右肩にレヴィ、左肩にディアーチエ、膝の上にユーリだ。

「はい。海は初めてです」

「楽しみだなく。ね、ユーリ」

「はい！マスターも海は行ったことあるんですか？」

「いや、俺もないよ。今回が初めてだ」

「過去に行ったことがあったのなら我らを置いていったことになるな」

「そうですね」

「行ったことなくてよかったと心の底から思ってるよ」

危うく海に着いた途端に四人からのお仕置きが始まるところだった。膝の上に乗っ

てるユーリの頭を撫でながら安堵のため息をする龍輝である。

「ユーリ、次は僕だからね」

「わかつてますよ、レヴィ」

「順番だぞ。レヴィ」

「は、いい、王様」

「して、シユテルもそこから離れるつもりはないのか？」

「マスターの頭の上は私だけの特等席です。王」

猫耳と尻尾があるシユテルが頭の上に乗っているとホントに猫が乗ってるように見える。右手でユーリを撫でているため、左手でシユテルを撫でる。二人して「ふにゅ」と言っていて気持ち良さそうな顔をしている。それを後ろから一部分だけ見えてる女子たちはというところ……。

『かわいい……』

『抱きたい……』

『ナデナデしたい……』

『姫終君にナデナデされてる、羨ましい……』

そう思っていたのであった。シャルも不機嫌そうだ。

「あつ！皆見て！海が見えてきたよ！」

誰かがそう言ったあと、ほぼ全員が外を見る。シユテルたちも外に顔を向ける。

「うわあ〜」

「これが！」

「海ですか」

「素晴らしいな」

レヴィとユーリは目を輝かせ、シユテルとディーアーチェもいい笑顔になっている。

皆、海を前にしてより一層はしやぎだしたのだった。

く 旅館前く

「それではここが三日間お世話になる花月荘だ。各自、この三日間は従業員の仕事を増やさぬようおとなしくしている。クラス長、あいさつを」

「よろしくお願ひします！」

『よろしくお願ひします！』

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。今年も元気な子たちですね」

「すみません。今年は異例が三人もいて部屋割りを難しくしてしまつて」

「いえいえ、大丈夫ですよ。それで、そちらの子たちが？」

旅館、花月荘に到着し、織斑先生の指示でクラス長の一夏があいさつをすると全員がそれに続いてあいさつをする。あいさつが終わると龍輝と蒼と一夏の三人が残る。女子たちは先生の指示で先に行った。

「はい。こいつらです。三人のうち、二人は私のクラスなのですが」

「あと一人は私のクラスのです。どうぞよろしくお願ひします」

「ほら、お前たちもあいさつをしろ」

「「よろしくお願いします」」

織斑先生と結城先生が旅館の女将さんに龍輝と蒼と一夏を紹介し、あいさつをする。

「はい、こちらこそ」

「ではお前たち、先に部屋に行け。そこからは自由行動だ」
「海に遊びに行つていいよ。みんなが待つてるんでしょ？」

「「ありがとうございます」」

織斑先生と結城先生にお礼を言い、行動を開始する三人。まず向かうのは自分たちの部屋だ。

「そういえば蒼の部屋はどこなんだ？」

「一夏の部屋の隣だよ。龍輝と同じ部屋だ。よろしくな。」

「おうよ」

「え!?!じゃあ、俺は誰となんだよ!?!」

「織斑先生だろ? 話聞いてなかったのか?」

「あ、千冬姉か」

「あ、織斑先生だ」

「え!？」

「冗談だ」

「おい!!マジで焦ったじゃねえか!!」

こんなやりとりをしながら部屋に到着し、龍輝と蒼は一夏と別れ、部屋に入るために襖を開けると……。

「……なんでお前らがここにいるんだ？」

「あ、リュウ君にアオちゃん!待ってたよ!」

「お待ちしました」

龍輝と蒼の部屋のはずなのに中には友奈と美森がスタンバイしていた。もちろん二人とも水着姿で。

「友奈に美森……ここは俺らの部屋だろ……」

「あれ？言ってなかったっけ？」

「なにが？」

「ここは私たちの部屋でもあるの」

「そうか、そうか。ここは俺たち四人の部屋か……………はあっ?!?!?」

「ノリツツコミとは珍しいね、友奈ちゃん」

「だね」

「ちよつと待て！なんで友奈と美森が一緒なんだよ!!聞いてないぞ!!それに、先生が許すはずないじゃないか!!」

「そこは大丈夫です。すでに友奈ちゃんが許可を貰ってるので」

「は？」

「お姉ちゃんにお願いしたらOKくれたんだ♪」

「あの人ならすぐに許可するな」

「だな」

結城先生は妹の友奈にベタ惚れしている。いわゆるシスコンだ。もちろん友奈も姉の明日奈さんを慕っている。明日奈さんは細剣の扱いがプロ並みで友奈は武術だ。

「それより早く海に行こう！」

「自由行動は限られてるんですから！」

「はいはい、わかりましたよ。さっさと着替えるぞ、龍輝」

「わかってるよ……着替えるから廊下で待っててくんない？君たち」

「リュウ君は私たちを外に追い出すっていうの？」

「誤解を招く言い方はやめろ、友奈」

ペチ！

「あうっ」

冗談を言う友奈の額に軽くデコピンをする。軽いついで中で響くと一夏が言っていたが練習して調整できるようになったので痛くはないはずだ。

「龍輝お兄様？」

「仲良くじゃれあってるだけだ。銃をしまえ」

「大丈夫だから。痛くないよ、美森ちゃん」

「それならいいのですが」

友奈の親友である美森は友奈に害する存在は全て撃ち落としてきたので危うく龍輝も撃たれるところだった。

「とりあえず、廊下に出ないのなら後ろを向くとかしてくれ」

「昔は一緒に着替えてたのに？」

「まあ、そうだけど……いいや。さっさと着替える」

「めんどくなつたな、龍輝」

「ああ、そうだよ」

友奈と美森が瞬きせずに見てくるのが気になるが、この際どうでもいいと思いつつながら着替える龍輝である。制服を脱ぎ、あらかじめ着ていた水着姿になる。

「え!?!着てたの!?!」

「悪かったか？」

「いや、全然………」

「龍輝、俺も終わったぞ」

「では海に行きましょう。ほら、友奈ちゃんも」

「うん！」

制服の下に着ていたのは予想外だったようで少しガツカリしている友奈だったが、美森が手を出し、友奈はさつきまでの顔が嘘のように明るくなり、美森の手を掴み海に向かった。

く 浜辺く

途中で一夏と合流し、浜辺に到着した

「あ！織斑君に姫終君に黒葉君だ！」

「嘘！私の水着、変じゃないよね!？」

「姫終君に黒葉君、すごい筋肉！」

先に遊んでいた女子たちが一斉に騒ぎ出した。

「うるせえな」

「いつも通りだな」

「お〜い！龍輝〜！」

「よう、シャル。水着似合ってるな」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「シャル、簪は？」

「簪？僕は見てないけど」

「ハハ」

「うおっ!？」

真後ろから簪の声が聞こえ、驚く龍輝。シャルは簪とハイタッチしている。

「シャル、知らんぷりしてやがったな」

「ごめんね。龍輝の驚くところを見てみたかったんだ〜♪」

「ったく。ほら、さっさと遊ぶぞ」

「うん！」

その後はビーチバレーをしたり、海で誰が泳ぎが速いかで競争したりなど遊びまくった。ビーチバレーでは龍輝と蒼がペアを組み、相手は友奈と美森という幼馴染対決があつたという間に龍輝と蒼の勝利で終わった。友奈と美森のコンビネーションも素晴らしかったが龍輝と蒼のコンビネーションが凄まじく、白熱したバレーになった。そして、誰もがあの二人と戦うのは絶対にしない方がいいと思つたのだった。

その頃、箒は……。

「……」

誰もいない海岸で電話をしているのだった。

第二十六話

昼間の自由行動の時に遊びまくった龍輝たちは夕食を食べるために旅館の食事をする部屋に集まり、夕食を食べていた。

「おおくめつちや綺麗な刺身だな」

「そうだね。すごく美味しそう」

「龍輝、この緑色の山はなに？」

「それはわさびだ。刺身に少しだけのせて食ってみろ。ホントに少しだけだぞ」
「う、うん」

龍輝は正座で夕食の刺身を食べる。右隣は簪で左隣はシャルである。そして龍輝の言うとおりにわさびを少しだけ刺身にのせ、口に運ぶシャル。

「どうだ？」

「うん、これは美味しいけどちょっとキツいかも」

「初めてだから仕方ないよ」

「シャル、まさかとは思うけど俺が言わなかったら全部一気に食おうとしたか？」

「うん。ホントに危なかった」

「マジか。そういう蒼、明日の専用機持ちが集まってやるやつなんだが射撃戦をしないか？」

「ほう、いいだろう。今回は本気を出せないのが残念だな。で、内容は？」

「お互い射撃武器を持って岩とかに隠れながらやる。威力は抑えろよ。岩が跡形もなくなるから。まあ、要するにIS版のサブゲーだ」

「ペイント弾並の威力でどうだ？」

「それでいいよ」

「オツケイ。明日が楽しみだな」

龍輝と向かい合わせで座っているのが蒼だ。蒼の左隣に美森、右隣に友奈だ。

「龍輝お兄様、それ、私も参加していいですか？」

「射撃オンリーの奴が入ると面白くなるな。いいよ。やるか」

「はい！」

「じゃあ、私も！」

「友奈は見学！射撃武器を持ってないんだから」

「え〜」

「射撃武器を誰かに借りればいいんじゃないの？龍輝」

「いや、友奈は銃を扱うのが苦手なんだよ。ISも近接特化型だから」

「そうなんだ」

龍輝は友奈のISを見たことはない。だが、蒼からデータを見せてもらい、友奈に合っているISだと思っている。

「う〜残念……」

「今度模擬戦しような」

「その時は銃を使わないでね！」

「わかってるよ」

「やった〜!!」

「友奈ちゃん、少しだけ音量下げようね」

「あ、ごめんなさい」

謝る友奈を撫でている美森を見ると心が安らぐのはいつものことだと思っ
ている龍輝である。

「そういうえば一夏は？」

「あそこだよ。箒とセシリアに挟まれてる」

龍輝たちの少し離れたところに一夏が座っている。右隣は箒で左隣はセシリアだ。一夏とセシリアがなんか話しているがここからでは聞こえない。一夏とセシリアが話しているところを箒が鋭い目で睨んでいる。

「なに話してるんだらうね」

「さあな」

観察していると一夏はセシリアに刺身を食べさせ始めた。その光景をシャルと簪が見た後に龍輝を見つめる。

「はいはい。最初はどっちからだ？」

「え、二人にしてくれるの？」

「当然だろ」

「やっぱり龍輝はやさしいね」

「で、どうする？」

「じゃあ、最初は簪から」

「いいの？ありがとう」

「了解。ほら、簪」

「うん」

マグロの刺身を箸で掴み、簪の前に出す。そして、簪が口を開けたところにマグロの刺身を入れる。簪は初めてのあーんをしてもらったことが嬉しく、顔が赤くなりながらマグロの刺身を頬張っている。

「どうだ？」

「うん、すごく美味しい」

「そりゃよかった。んじゃ、次はシャルだな」

「うん、お願いね」

「あいよ。マグロでいいか？」

「いいよ」

「了解」

簪と同様にシャルにマグロの刺身を食べさせる。シャルも顔を赤くしている。

「美味しいよ、龍輝」

「おう」

ちなみにこの龍輝と簪とシャルのやりとりは一夏がセシリアに食べさせてすぐに女子たちが騒ぎだし、誰も気づいていない。唯一見ていた者は向かい側に座っている蒼たちだけだ。その蒼も美森と友奈に食べさせていた。

「やかましい!!食事ぐらい静かにできんのか!!」

騒ぎだったために織斑先生が怒鳴りに来た。女子たちは一瞬で静かになる。

「織斑、騒ぎを起こすな。静めるのがめんどうだ」
「す、すみません」

ピシヤッ

『はあ……』

織斑先生が戻っていった後に女子たちがため息する。龍輝たちは静かにしていたのでただ黙っていた。

「さすがにあれは怒られるよな」

「だね」

「仕方ないよ。大分騒いでたからね」

「そうだな」

そう静かに話した後、食事を再開した龍輝たちであった。

その後、龍輝たちは部屋に戻り、内緒でシャルと簪を入れた後に隣の部屋が騒がしかったというのは言うまでもない。

〜次の日〜

朝になり、廊下を歩いていると中庭らしき場所にしゃがんでいる一夏とその後ろにセシリアがいることに気づいた龍輝は遠くで見っていた。すると一夏は何かを地面から引き抜き、しりもちを着いた。すると……

ヒューン……ドカアアアアン!!

空から何かが落ちてきた。砂埃が舞い、一夏たちが見えなくなる。砂埃が止むと、一夏の目の前に見慣れた機械のニンジンが刺さっていた。

『あははは！あははは！引っ掛かったね〜いっくん！』

声が聞こえたと思ったらニンジンが割れ、中から人が出てきた。中から出てきた人は予想通り、東さんだった。一夏となにかを話ながら手に機械のウサギの耳を持ちながらどこかに行ってしまった。立ち去る際に一瞬だけ龍輝の方を見たため、龍輝のことは気づいていたらしい。

「はあ、なんていう登場の仕方してんだよ。あの人は……」

そう呟くしかなかった龍輝であった。

く岩場の海岸く

「専用機持ちは揃ったな？」

織斑先生の言うとおおり、専用機持ちの龍輝をはじめ、一夏、セシリア、鈴、シャル、ラ

ウラ、簪、蒼、美森、友奈がいる。だが、そこには専用機を持っていない簪もいる。

「ちよつと待つて、簪は専用機持ちではないはずですが」

鈴が織斑先生に思っていたことを聞く。

「ああ、実は篠ノ之は……」

「ヤアツホー……！！！！」

「……………」

「ちーちやあああああん！！」

「うるさいぞ、束」

「久々だねくちーちゃん！さあ、ハグしよう！！」

「やらん！！」

崖から滑り降りてきたのは束さんだった。束さんは織斑先生に抱きつこうとしているが織斑先生が顔を掴み、動かせないようにしている。

「相変わらずのアイアンクロードね。やあ！」
「ど、どうも……」

岩影に隠れていた箒に寄る東さん。

「大きくなったね、箒ちゃん！特におっぱいが……ごふっ！」
「殴りますよ」
「殴ってから言った！箒ちゃんひどい！」

箒がどこから取り出したのか謎の木刀で東さんを殴った。このやりとりは龍輝以外のメンバーが呆気にとられている。龍輝はため息をしている。

「東、自己紹介をしろ」

「え、めんどくさいな。私が天才の篠ノ之東だよ！終わり！」

「東って……」

「あの……？」

「東さん、お久しぶりです」

「やあやあ、リュウ君久しぶりだね！コトちゃんの時以来かな？」

「あの時はお世話になりました。ところで東さん。頼んでいた物は」

「ちゃんとあるよ！はい、これ！」

そう言いながら大きめの箱を龍輝に渡す東さん。

「龍輝、その箱の中身はなんだよ？」

「それはね、ISのコアなのだよ！いつくん！」

「えっ!？」

「ISのコア!？」

「しかも二つ頼んだからな」

「二つも!？」

「織斑先生、ちよつと作業をしたいんでいいですか？」

「構わん。だが、なるべく早く終わらせろ」

「はい、ありがとうございます」

少し離れたところで龍輝は何かの作業を始める。

「東さん。なんで龍輝がI Sのコアを?」

「それが私にもわからないんだよね、フレームはできてるからコアだけいたただけないですかって連絡があっただけなのだよ」

「東、さつさとやることをやれ」

「はいはい、それじゃ皆さん、大空をご覧あれ〜!」

空から六角形の水晶のような物が落ちてきた。

「あれってどこかで見ただことあるな」

「俺のマナを届けてくれた時と同じやつだよ」

「あ、なるほど」

「じゃじゃ〜ん!これぞ、東さんが一から作り上げた第四世代のI S、その名も〈紅椿〉
!!」

「だ、第四世代!?!」

「各国で第三世代が始めたばかりなのに!?!」

「ちなみにこれはリュウ君のマナから送ってもらったデータで作ったよ〜」

「龍輝のI Sって第三、五世代じゃなかったの!？」

「すまないな、嘘ついてた。本当は第四世代だ。ちなみに蒼のもだぞ」

「第四世代が三機も!？」

「リュウ君、もう作業終わったの?」

「はい、終わりました」

「はやっ!？」

「コアをつけるだけだったからな。シャル、ちよつと来てくれ」

「なに? 龍輝」

「はい、これ」

シャルに青いミサンガを渡す。

「ミサンガ?」

「I Sの待機状態だよ。名前はガンダムバルバトスルプスレクス」

「その名前って……あの時の!？」

「渡すのが遅れてごめん。会社にはとくにヴァルキュリアフレームのデータを送つてあるから大丈夫だ」

「仕事が早いね……ってことはこれが」

「ああ、シャルの新しいISだ」

「ありがとう！龍輝！」

「どういたしまして」

「よかったね、シャルロット」

「うん！」

仲のいい簪と話し出すシャル。その二人はとてもいい笑顔だ。

「まさかガンダムを作っているなんてね。さすがの束さんもびっくりだよ」

新たなガンダムの登場で織斑先生以外は驚きで固まっている。

「もう一つのコアはどうするの？リュウ君」

「これにつけさせていただきました」

そう言いながら黒を基調とし、真ん中に青い宝石のようなものが埋め込まれているペ

ンダントを出す龍輝。

「それもガンダムかな？」

「はい。名前はガンダムヴィダールです」

「ガンダムがもう一機?!」

「バルバトスの他に作ってたんだね」

「シャル、一緒に展開するぞ」

「うん！来て、バルバトス！」

「来い！ヴィダール！」

ミサンガとペンダントが光り、劇中通りのバルバトスルプスレクスとヴィダールが姿を現す。

「完璧に再現されてる……」

「阿頼耶識もあるよ。だけどシャルのバルバトスは使えるけどめっちゃリミッターをかけてる」

「龍輝のヴィダールは擬似阿頼耶識でしょ？」

「このヴァイダールは本物の阿頼耶識を使ってるぞ。リミッターなんかかけてないし」
「大丈夫なの？」

「たぶん大丈夫だ。それと束さん、それが俺のmanaから作ったI Sですね」

「そうだよ〜リュウ君のおかげで難なく作れたよ〜じゃあ、箒ちゃん！紅椿の調整始めるよー」

「はい」

「こつちもいろいろ教えるぞ、シャル」

「龍輝、私も聞いていい？」

「いいぞ。主な武装は超大型メイスと対艦ランスメイスだ。後はmanaと一緒にだ」

「対艦ランスメイスまであるなんて……」

「頑張ったぜ」

「バルバトスは武装が少ないんだね。このメイスってパイルバンカーがあるんだね」

「ランスメイスにはないけどな。テイルブレードは思いのままに動かせるからな」

「わかった」

「はい終了〜！超早いね、さすが私！リュウ君！ちよつと紅椿と模擬戦して欲しいんだ

けどー」

「わかりました。んじゃ、行ってくる」

「いきなりだね。頑張って！」

「おう！つてことだ、箒。ちやうどヴィダールを試したかったからな。いい機会だ」

「私も負けないようにするさ。龍輝！」

（浮かれてるな、箒のやつ。こりや叩き潰さないと後が危ないな）

「行くぞ、紅椿！」

「ガンダムヴィダール、出る!!」

束さん作の第四世代の紅椿と龍輝作のガンダム。箒はマナではないためと新しい力を手にいれたために今度こそ龍輝に勝てると思っっているのかもしれない。だが龍輝は……。

（そう簡単には負けないしな）

「本気で行くぞ!!」

ヴィダールのツインアイが強く光り、手にはバーストサーベルが握られている。リミッターを外してあるヴィダールの力がどれくらいのものか。束さんがわくわくしな

がら開始の合図を待っている。

「模擬戦、始め!!」

ガンダム対紅椿の模擬戦が今、開始された。

第二十七話

「模擬戦、始め!!」

束さんのお願いで紅椿と模擬戦することになった龍輝。龍輝の機体はガンダムヴァイ
ダールだ。

「行くぞ、紅椿!」

長刀と短刀を握りしめながら突撃してくる筈。対して龍輝は片手にバーストサーベ
ル一本だけだ。

ガギイイインツ!!

「さすがは龍輝! 受け止めるとは!」

「かっこいいこと言ってるけど威力はそんなにないぞ。新しいISの力を見せろ!!」

「ぐっ！」

バーストサーベルで受けとめ、凧ぎ払う龍輝。たまらず後退する箒。その際に龍輝はスラストスターをふかし箒に急接近する。

「なっ!?!」

「速い!?!」

下で見ている一夏たちの驚く声が聞こえる。箒は体制を立て直そうとするが、それより先にヴィダールのバーストサーベルが紅椿を貫く……寸前に止める龍輝。

「こんなものか」

「……参った」

「まだまだだな、箒。紅椿の性能を充分に発揮しきれてない。まあ、初戦だから仕方ないか。これからの特訓は特に厳しく行かなくちゃだな」

「な!?!今まで以上に厳しくするのか!?!」

「当然だ。それともこのまま紅椿に振り回されてるままにするか?」

「う……お手柔らかに頼む……」

「了解した。箒は先に降りて反省点を見つけてろ。俺はそのままヴィダールの調整と阿羅頼識を試すから」

「……わかった」

（ふむ、一応浮いてた気持ちは破壊したはずだが油断はできないな。箒のやつはあれで紅椿を完璧に使いこなしてると思ってたしな）

暗い顔をしたまま降りていく箒を見ながらそう思う龍輝。

「さて、ヴィダールの調子とは……おいおい、あの突き攻撃はとんでもない威力だな。一撃でI SのS Eを0にできるぞ。かすったとしても半分は無くなるな。さすがは悪魔の名を冠したガンダムフレームだ。自分で作つといてなんだけどこいつはとんだ化物だな。レクスもだろうけど」

『姫終、お前は降りてこないのか』

「俺はこのままヴィダールの阿羅頼識を試すんで降りないです。地上だとどんな被害が出るかわからないんで」

『それはデュノアに渡したガンダムもか?』

「あれはリミッターをめっちゃかけてるから大丈夫だと思うんですけど、気になるならシャルロットも上に来させていいですか?」

『わかった。デュノア、姫終から指名だ』

「いや、指名って……」

思わず織斑先生の言葉にツツコミを入れる。

『龍輝が!?!行きます!』

「やる気だな、シャル……」

「お待たせ!」

「はやっ……」

「で、なにをするの?龍輝。あら……なんとかってやつを試すんでしょ?」

「阿羅頼識な。阿羅頼識というのは機体の情報を直接脳へ送るシステムだ。だけど、ガンダムタイプだと情報量がハンパない量だから初心者だと三分ぐらい動かさせてその後に気絶するだろうな。三分も動かせれば上々だが」

「僕、そんなもの扱えるか心配なだけ……」

「何度も言うがシャルのレクスにはリミッターをめぐちやかけてるから情報量は少ないはずだ。だが、機体の操縦は本来より鈍くなるけど。それでも機体の速度はラファールリヴァイヴを遥かに凌駕するぞ」

「リミッターをかけてもその性能ってすごいね」

「まあな、さすがは悪魔の名前を冠した機体って思ってたんだよ」

「確か、ソロモン七十二柱だったっけ？バルバトスだと何番目？」

「型式番号、ASW—G—08。八番目の悪魔だ」

「龍輝のヴィダールは？」

「こいつの本来の名前はあえて言わないけど、六十六番目だ」

「ヴィダールが本来の名前じゃないの？」

「偽名だよ。さて、そろそろ始めるか。下の方もまだかという顔してるし」

「あ、ホントだ」

「阿羅頼識、起動。接続開始……………ぐっ！」

「龍輝!？」

全身装甲で顔は見えないが苦しんでる声を上げる龍輝。シャルも驚き、龍輝の心配をする。

『シャルロット、龍輝はどうしたの!? なにか苦しんでるように見えるけど!』

通信で響が聞いてくる。地上からでも苦しんでるように見えるとやはり危険なのかもしれない。

「それが、僕もさっぱりなんだよ。どうしちゃったの、龍輝……」

「だい……じょうぶ……だ……」

「え……?」

「大丈夫だ。想像してたのよりキツかったわ。これが、阿羅頼識」

「り、龍輝……?」

気がつくくとヴィダールのツインアイの光の輝きが増している。

「東さん、ターゲットを何枚か出せますか?」

『出せるよ! 今出せる分だけ出すね!』

「助かります。シャル、阿羅頼識っていうのを見せてやるよ。少し離れてろ」

「う、うん」

すると、十枚近い数のターゲットが現れる。

『お待たせ！リュウ君！どんどんやつちやつて〜！』

「はい！行くぞ、ヴィダール!!」

呼応するかのようにヴィダールのツインアイが光る。右手にはライフルを持っている。左手にはバーストサーベルだ。そして、龍輝は近くにあるターゲットに急接近し、ターゲットのど真ん中にバーストサーベルを突く。少し離れたところにはライフルで真ん中を命中させる。下の方で束さんが操作しているのかターゲットが動き出す。それでも真ん中を撃ち抜く龍輝。すると、左右に数枚のターゲットが移動すると、龍輝はライフルとバーストサーベルをしまい、腰に装備されていた小型ライフルを取りだし、左右のターゲットの真ん中を撃ち抜く。これで全てのターゲットが無くなった。結果は……。

「すい……」

全て真ん中を撃ち抜き、貫いている。百点満点の点数でつけるなら百点満点だ。

「こんなものだな。どうだ？シヤル。阿羅頼識のすごさは」

「すごすぎるよ。っていうか、龍輝はターゲットが動いているのにも関わらずにライフ
ル撃つてたよね。全弾真ん中に命中って……」

「阿羅頼識だとある程度の敵の動きが読めるんだよ。それで撃った」

「さらつと言ってるけどとんでもないことだよね、それ」

「だな。ん？なんか下が騒がしいな」

『姫終、デュノア。訓練は中止だ。今すぐに降りてこい』

「了解！」

織斑先生の元に急いで戻る龍輝とシヤル。そして、龍輝たちに伝えられたものは極秘
の情報だった。それは、無人機の軍用ISが暴走したとのことだった。

第二十八話

無人機の軍用 I S が暴走という知らせを聞いた龍輝たちは、広い部屋を緊急作戦会議室にし、そこに集まっていた。

「二時間前、ハワイ沖でアメリカ、イスラエルの合同開発された第三世代の軍用 I S、機体名《銀の福音》（シルバリオ・ゴスペル）。通称、福音が制御下を離れ、暴走し、監視区域を離脱したとの知らせが入った。福音はこの旅館の二 km 先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの指示で我々が対処をすることになった」

「織斑先生、暴走した I S の詳細なスペックが見たいです」

「これを見たら口外は禁止だぞ。もし口外した場合は最低でも二年の監視がつけられる」

「わかりました」

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。わたくしの I S と同じオールレンジ攻撃の I S ですわね」

「それに無人機か……」

「機動力と攻撃力を高めた機体。厄介わね」

「それにこの特殊武装も厄介だね」

「これを打破するには……」

「一撃で仕留めなければならぬな」

「一夏、お前の零落白夜で墜とせ」

「俺!?!」

「他に誰がいるのよ」

「でも、一夏さんが墜とすとなるとその場所まで誰が一夏さんを運ぶのですか?」

「それは……」

「まーった!まーった!」

天井裏から東さんが出てくる。

「どこから出てきてるんですか。東さん」

「あのねうちーちゃん!」

「帰れ」

織斑先生も頭を抑えている。それでもお構い無しに話を続ける束さん。

「聞いて！聞いて！これは断然、紅椿の出番なんだよ！」

「なに？」

「紅椿がですか？」

「第四世代の紅椿を試すのにはうってつけってわけですか」

「その通りなのだよ！リュウ君！それに紅椿はすごいスピードが出るからね、すぐに追いつくよ！」

「よし、作戦は決まったな。篠ノ之、お前が織斑を乗せて福音のところに行き、そして、織斑の一撃で福音を墜とせ。奇襲作戦だ」

「織斑先生、俺も出させてください」

「龍輝？」

「心配するな。私たちだけで充分だ」

突然の申し出に一夏は困惑するが箒は自信があるみたいなのを発言をする。

(どこからその自信が来るのやら……)

「別にお前らが心配な訳じゃない。もしものことを考えた結果だ。俺はお前らがもし失敗した時に対処する第二攻撃隊とも思ってくれればいい。それでいいですか？ 織斑先生」

「なっ！ 私たちが失敗するだっ!!」

「話を聞かなかったのか？ もしものことを考えたって言っただろうが！ それになにか？ お前には絶対失敗しないっていう根拠があるのか!! その失敗しないという自信と根拠があるなら俺に納得させる理由を言ってみろよ!!」

「な……そ……それは……」

「それに、福音を墜とすのは一夏の役目だ！ 箒は一夏を運ぶだけなのになぜ失敗しないってわかるんだよ！ そういうと一夏が必ずやってくれるとも思ってるのか!? 一夏や俺やお前を含めた人間というのはそこまで万能じゃないんだよ!!」

「ストツプだよ！ 龍輝!!」

「もうやめて!!」

「っ！……すまない。熱くなりすぎた。あそこまで怒鳴る気はなかった。ごめんな。一夏もごめんな」

「いや、龍輝のいうことはもつともだからな。箒、龍輝にはもしもの対策として出てもらおうぜ」

「一夏……わかった」

言い争いになり、これ以上は言うてはいけないようなことを言いそうになる前にシャルと箒が止めに入ったことで落ち着きを取り戻す。このまま喧嘩していたら作戦どころじゃなくなる前に止めに入ってくれた二人に感謝する。一夏も龍輝の提案を賛成し、同行を箒に説得すると、すんなりと許可が出た。逆に龍輝には一切目を合わせず、龍輝に向ける視線はもはや幼馴染や友人としての視線ではなくなっていた。

「龍輝、その攻撃隊に俺も参加させてくれ」

「お兄様……」

「アオちゃん……」

「ダメだ」

「理由を聞いてもいいか？」

「蒼にはここに残って敵がもしここに攻撃をしてきた時の隊長としてほしいんだ。お前の実力はよくわかる。一緒に行けばもしもの時に早く倒すことができるだろうな。」

十五分後。浜辺にて

発進する場所は近くの浜辺からで、そこに龍輝、一夏、箒の三人が揃っている。三人ともISSを展開している。龍輝はオーライザーパックを装備している。

「それじゃあ、頼むな。箒」

「本来なら男が女に担がせてもらうのは言語道断だが今は仕方ないな」

「……」

（まだ浮かれてるのか。それに一夏は気づいているな。失敗しなきゃいいが）

『姫終』

「はい」

『これはプライベートチャンネルだ。二人には聞こえていない。先ほど織斑にも言ったがどうも篠ノ之は浮かれている。お前が壊したはずなのだがな』

「気づいていましたか」

『教員を甘く見るなよ？もしかしたらのことが起こるかもしれん。その時は頼んだぞ』
「はい」

「龍輝、何をしている。もう行くぞ」

「俺を待っていたのなら感謝するよ。待たせてすまなかつたな。俺はいつでも行ける」
『作戦、開始！』

織斑先生から開始の宣言が聞こえたと同時に一夏を乗せた箒が発進する。とても一人を担いでいるとは思えないスピードだ。

「こ、これが第四世代のISのスピード……！」

「一夏、振り落とされるなよ！龍輝は後ろか？」

「箒……」

一夏が感じとったのは龍輝が後ろにいるか確認する時の箒の表情が何か勝ったようなものだったからだ。

「呼んだか？」

「な……!!？」

「龍輝!!」

龍輝は紅椿、箒たちの隣を飛んでいた。紅椿のスピードは瞬時加速と同等のスピードだ。それについてきたことになる。

「このスピードについてこれるのかよ!？」

「オーライザーパツクなら余裕だ。つと、目標を確認」

「さすが速いな」

「一夏、箒。俺は近くで待機している。健闘を祈る。箒、できるだけ一夏のサポートを」

「ああ、任せろ!」

「わかった!」

龍輝はここで待機。福音は見える距離の位置だ。箒は作戦通りに福音に近づく。一夏は手筈通りに零落白夜を起動する。福音も突然の襲来で反応が遅れている。そこに一夏の零落白夜が振り下ろされるが福音はギリギリでかわす。

(初手失敗！行くか……一夏？)

第二攻撃隊として行こうとしたら一夏は諦めてないらしく、福音に攻撃を繰り返していく。全てかわされているが一夏は諦めない。箒も一夏の邪魔をしない程度に福音に攻撃をしていく。そして、福音が怯み、一夏が攻撃しようとは急接近するが福音を通り越す。その隙に福音が翼から光弾を放つが一夏は光弾を零落白夜で斬っていく。

(何をしているんだ一夏。海上に何かあるのか？)

一夏が光弾を斬っている場所の下を見てみると……。

「船……この海域は確か先生たちが封鎖しているはず。まさか、密漁船か！一夏はいち早く気づいて庇っているのか。一夏らしいな。第二攻撃隊、出る!!」

少しでも一夏の手伝いをするために福音の相手をする。

『……ほう……そ……いつもの……じゃねえよ』

(通信?近づいたことで通信可能距離に入ったのか。これは一夏の声だな。ノイズのせいで何を言っているのかわからないな)

「なっ……箒の奴、何をぼーっとしているんだ!狙い撃ちされるぞ!!くそ、間に合え!!」
福音が箒目掛けて光弾を放つ。一夏もそれに気づいて箒に接近している。

『間に合ええええ!!』

ドゴオオオオオオンツ!!

『一夏ああああ!!』

福音の光弾が箒を庇った一夏に直撃し爆発が起こる。爆煙の中から通信で箒が叫ぶ声が聞こえ、一夏を抱えながら海に向かって墜落していく。

「くそ!!トランザムツ!!」

海への墜落を防ぐためにトランザムと瞬時加速とバルニフィカスの力を使い、海上ギリギリで箒たちを受け止める。墜落スピードがとてつもなくつたのが原因かわからないが衝撃波が発生し、海面の水が波を起こす。だが密漁船には船体が揺れる程度の波だったので被害は少ない。

「箒!!」

「一夏……一夏あ……」

「しっかりしろ!!ああ、もう許せ!!」

バチンツ!

正気に戻すために頬を叩く。

「りゆう……き……」

「しっかりしろ!!箒は負傷した一夏を早く宿に運べ!!ここは俺が食い止める!!急げ!!」

「わ、わかった……!!」

無理やり箒を撤退させる。そうでもしないと足手まといどころか邪魔になってしま
うかもしれないからだ。

「頼むぞ、箒」

撤退する箒に追撃しようとしている福音が目に入る。威嚇射撃としてバスターライ
フルを放つ。案の定、福音は避ける。当然、避けやすい射撃だったからだ。こちらに注
意をひくには充分だ。

「お前の相手はこの俺だ。かかってきやがれ!!」

く撤退中の箒く

「一夏……龍輝……」

腕の中で負傷し、気を失っている一夏を見る。自分の失態で一夏が怪我をし、そのせいで龍輝は一人で福音の相手をしている。

「龍輝……お前はこんなことが起こらないために私に怒鳴ったというのに私はお前をうるさく、邪魔だと思ってしまう。それなのに、一夏は私を庇い、龍輝は退かせるために自分を的に……私は、許されるのだろうか……」

その後、宿に到着し、一夏を医療担当の先生に渡し、龍輝のことを聞くと、シャルと簪が暗い顔をし、蒼は拳を握りしめ近くの岩を殴る。美森は友奈と手を握り涙を流している。鈴から聞かされたのはリーダーからバハムートの反応が消えたということだった。

第二十九話

「う……………ここは……………」

（確か、福音に隙を突かれて墜とされたんだっけ。てかなんで草原？）

そう。龍輝が目覚めた場所は先ほどまで戦っていた海上ではなく、草原だったのだ。

「なんでこんなところに……………まさか……………」

「お目覚めになりましたか。主様」

「うおっ!？」

突然後ろから声をかけられ、驚く。考えだした瞬間だったので驚いてしまったのだ。急いで後ろを向く。すると、黒の忍装束のような服を着た女の子が立っていた。髪は黒のロングで目が龍輝と同じくオッドアイである。その姿を見た龍輝は……………。

「……はあ」

間をあけてからため息をするのだった。なんとも呆れた表情をしながら。

「どうかしましたか？主様」

「一つ、いや、二つ聞きたいんだが……」

「はい。なんなりと」

「ここはISの精神世界で間違いないな？」

「はい」

「そして君は俺が作った機体、バハムートの疑似人格の姿だな？」

「ご名答です」

「なんでバハムートの疑似人格がアニメ『最弱無敗の神装機竜』の夜架なんだよ!!」

「そう言われましても」

龍輝の目の前に立っている少女はアニメ『最弱無敗の神装機竜』に出てくるキャラ、切姫夜架にそっくりなのだ。

「主様、第二次移行の時が来ましたわ」

「っ！そうか。だからここにいらっしゃるんだもんな」

「では、主様に問います。あなたは力を求めますか？」

「ああ、求める」

「なんのために？」

「皆を、大切な家族や大切な人たちを守るためだ」

「大切な人というのは主様に好意をよせているあのお二人ですか？」

「わかっているなら聞かないでくれ……あと、蒼たちと一夏たちもな。蒼と友奈と美森は親友で幼馴染だ。一夏も幼馴染だが、蒼たちの方が長い付き合いだったからな。そういうらを守りたい」

「わかりました。では、行きましょう。主様」

「ああ、頼むぞ……ところでお前は名前はどうするんだ？」

「いい感じのところを言うのかと思えば……主様が決めてください」

「んじや、マナでいいか？愛称でそう呼んでたし」

「それで構いません。では、バハムートマーナガルム改め、マナ。これからも主様と共に」

「ああ、よろしく頼むぞ」

「それと主様、後ろをご確認ください」

「後ろ？うおっ!？」

マナに言われた通りに後ろを見ると長身の男性が立っていた。

「まさか……ガエリオ・ボードウィン特務三佐でいらつしやいますか？」

「なぜそのような口調になつてるのかわからんが、そうだ。厳密に言うと似た者だな」

「貴方様に出会えて光栄であります！」

龍輝はギャラルホルンの敬礼をしながらガエリオに言う。しかし、ガエリオは呆れている。

「俺はお前が作った機体なんだぞ。主にそんなこと言われると恥ずかしいからやめてくれ」

「うん、まあ、わかつてたけどね。てかなんであなたがここに？まさか、ヴィダールも第二次移行するのか？」

「いや、俺はまだだ。あと少しだな。出始めたばかりだからまだなのだろう」

「なんかさらつとメタイことを言ったような気が……まあ、いいや。じゃあ、今回はマナだけなんだな？」

「その通りですわ、主様。それと、そろそろ目覚めないと大変なことになりますわ」「大変なこと？」

「あの福音にデュノア様や更識様方が戦っています」

「なっ!?アレにか!?それじゃあさつきと目え覚ますぞ!特務三佐!またいつか!!」

「あ、ああ。別にガエリオと呼んでくれても……行つてしまった……ふっ、ではまた会おうか、龍輝。来るべき時にな」

ガエリオは先ほどまでいた龍輝の場所を見つめながら呟いていた。

そして、龍輝はマナと共に目覚めの時に入っていた。

「なあ、マナ」

「はい」

龍輝は今、マナに手を繋がれ、引つ張られている状態で光がある場所に向かっている

最中だ。その時に気になったことがあったので聞いてみた。

「俺の体つてき、今どうなってるの？海に墜ちたんだよな？」

「ご心配なく。目覚めればわかりますわ」

「さいですか。じゃあ、行くか！」

「はいー！」

龍輝の掛け声でスピードアップし、光にマナと一緒に突っ込む。突っ込んだ瞬間に誰かの声が聞こえた龍輝であった。

「……………ん……………」

静かに目を開ける。最初に見えたのは四つの影だった。視界はまだそれしかわからない。だんだん他の感覚が覚醒し始め、やっと影の正体もわかってきた。それと同時に潮の匂いがしたと思ったら波の音が聞こえた。

「……………ハハハ」

「っ！マスター!!」

「ご主人!!」

「主!!」

「マスター!!」

「シユテル、レヴィ、ディアーチエ、ユーリ……おはよう」

「ご主人〜!!」

「マスター!!」

「おわっ!?!」

四つの影はシユテルたちだった。目覚めて起き上がった瞬間レヴィとユーリが抱きついてくる。不意討ちだったのでバランスを崩すがなんとか保つ。

「心配したんですよ。マスター」

「ああ、すまなかつたな。皆。ところでシユテル、状況を確認したいんだが」

「はい。マスターは福音に隙を突かれ、海に墜とされました。ここまでは覚えていますか?」

「ああ、覚えてる」

「その後、私たちが福音から遠く離れた場所で引き上げました。島まで行くには時間がなかったのです」

「私の魄翼の特殊形態、《鎧装》の第二形態で、海面上でマスターを持っていた訳です」「こんなところで鎧装の第二形態を出すとは……まあ、非常事態だから仕方ないか。よし、状況はだいたい理解した。シユテル、レヴィ、デイアーチエ、ユーリ。今、福音がどうなっているかわかるか？」

「いえ、私たちはマスターの方で一杯でしたので。すみません」

「謝ることはないよ。福音は今、シャルや簪たちが戦っている状況なんだ。すぐに行くぞ」

「お身体の方は大丈夫なのですか？」

「心配するな。大丈夫だ。マナを起動する。決着といこうか」

『残念ですが主様、マナを起動するにはもう少し時間が必要になりますわ』

「この声……もしかしてお前か？マナ」

『はい。主様が精神世界に来たことにより、話せることが可能になりました。そして、マナはまだやることがあるので、もう少し時間が……』

「わかった。できるだけ早くしてもらえると助かる」

『了解ですわ』

「さて、マナが使えないのならば鎧装で行くしかないか。ん？どうした？皆」

マナからの報告を受けたあと、鎧装で福音の元へ行こうとすると、シユテルたちが唾然としている。

「マスター、先ほどの声は……」

「ああ、そういえば言っただけだったな。さっきの声はバハムートマーナガルの疑似人格だよ。名前はマナだ」

「ご主人が呼んでた愛称のままだね」

「他に浮かばなかった作者に言ってくれ」

「その発言はメタいぞ、主よ」

「ゴホンっ！それより早く行くぞ。どうなっているのかわからないからな」

「その事なんですけどマスター、提案してもいいでしょうか」

「なんだ？ユーリ」

「ここは魄翼の鎧装ではなく、ディアーチェの《トリニティブラッド》の方がいいと思います」

「ふむ、理由は？」

「鎧装も強力ですが、何より大きすぎるんです。それだと福音の攻撃の的になってしま
う。なら、多少威力などは下がってしまうかもですけど機動力が高いトリニティブラッ
ドにした方がいいかと」

「わかった。ならトリニティブラッドで行くぞ。やれるな？三人とも」

「もちろんです」

「オツケーだよ！」

「問題ない」

「よし、行くぞ！トリニティブラッド!!」

トリニティブラッド。それは、シユテル、レヴィ、ディアーチェ、三人分の魔力を龍
輝にユニゾンすることでできる奥義だ。今の龍輝は、甲冑はディアーチェのだが翼には
シユテルの魔力の色の赤、レヴィの魔力の色の青、ディアーチェの魔力の色の黒の三色
になっている。左腕にシユテルの武装『プラスチッククロウ』が装備されている。

「準備は整ったな。行くぞ、皆！決戦だ!!」

『はい!!』

『おおー!!』

『うむ!!』

「はい!!」

トリニティブラッドを起動した龍輝は物凄いスピードで戦闘が行われている場所に向かったのだった。戦闘の光を確認できるほどの距離まで来たがそこには第二次移行した白式を纏った一夏がいるのに気づいた。

『マスター、イチカがいます』

「ああ、確認した。あいつ、白式が第二次移行してやがる。にしてもあいつら俺らに全然気づいてないな」

『音速で飛んでるような速度だから気づかないのも無理はないよ』

『主、このまま福音に突っ込むのか?』

「突っ込む!バルニフィカス!!」

右手にバルニフィカスを顕現し、福音に突撃する。

「おらあああああああああつ!!!
!!!」

くシャルsideく

第二次移行した福音に苦戦を強いられてる僕ら。防戦一方だったけどだんだんと消耗させられてる。第二次移行した白式を纏った一夏が来てくれたけど、なかなかとどめを刺すことが出来ずにいる。龍輝がいてくれたら話は変わるかもしれない。でも龍輝は未だ行方不明だ。龍輝から渡されたバルバトスでも苦戦している。まだ扱いきれいな証拠なのはわかってる。そんな事を考えてると福音が簪の後ろに移動していた。

「っ！簪！！」

僕が彼女の名を呼ぶと、簪も後ろに気づきすぐに後ろを向く。でも福音が光の翼を広げ、簪に攻撃を仕掛ける瞬間だった。

「おらあああああああああつ！！！！」

どこからかわからないけど雄叫びが聞こえた。その瞬間簪の後ろにいたはずの福音が姿を消していた。否、吹っ飛ばされていった。僕は何が起こったのかわからないまま呆然としていた。すぐに我に戻り、簪のところに向かった。

「簪、大丈夫？」

「う、うん。でも何が起こったの？やられると思っただらすごい風が吹いて」

「僕も何が起こったのかわからない」

「二人とも！福音が体制を立て直すぞ！」

「っー！」

箒から言われ、すぐに福音がいる場所を見ると吹っ飛ばされていた福音が体制を立て直し、僕らをロックオンする。すると福音に向かって赤い炎のような弾が発射され、福音に着弾し爆発していく。

「なに!?!」

「炎の弾……?」

「まさか!!」

僕と簪は何か気づき、辺りを見渡す。すると、ずっと聞きたかった声が聞こえた。

〈シャル side out〉

「決着の時だ。銀の福音」

簪に攻撃しようとした福音に狙いを定め、突撃し、体制を立て直したらプラストクロウから魔力砲をぶちこみ、福音を足止めする。

「バックパックの翼が光の翼に変わってるな」

『奴も第二次移行したということか』

「えく余計めんどくさくなってるない?」

「龍輝!!」

「ん?ようシャル、簪。ただいま。心配かけてすまなかつたな……おい、その気持ちはわからなくもないがここですることじゃないだろ!」

「心配かけた龍輝が悪いんです！」

「その通り！」

「へいへい」

福音がいるのにも関わらずに抱きついてくるシャルと簪。

（まあ、心配かけた事は真実だしな）

「龍輝！」

「よう一夏。白式も第二次移行したんだな」

「まあな。ん？『も』？」

「龍輝、その言葉だと龍輝のバハムートも第二次移行したことになるよ」

「ああ、したよ」

「あつさり言うんだね。でも、それならなんでバハムートを纏わないの？」

「まあ、いろいろと事情がな」

『主様、お待たせいたしました。準備が整いましたわ』

「お、ナイスタイミング！じゃあ、早速行くぞ、マナ！」

『はい!!』

「一夏、早く行ってやれ、箒たちだけじゃ難しいからな」

「わかった！お前も早く来いよな！」

「わかってるよ。さて、二人とも離れててくれ。バハムートを展開するから」

「わかった」

「うん」

二人が離れたことを確認し、マナの展開を始める。

「龍輝、後でその姿とさっきの声を説明してね」

「はいはい」

シャルに言われ、やっぱりこれらの説明しなくちゃダメかと思う龍輝であった。一方福音は一夏たちが足止めしてくれているのでこちらに攻撃はこない。

「来い、バハムートマーナガラム！」

レオスパック装備の第二次移行したバハムートを展開する。目の前で姿が変わったバハムートを見たシャルと簪は二人とも唾然としている。理由は簡単。今まで赤かった機体の色が黒くなっており、所々に赤いラインがある。翼はレオスの翼とは形が変わっており、何枚もの翼だ。

「これが第二次移行したバハムートの姿……」

「でも、これって……」

簪が何かに気づいたような発言をしているが今はまずマナの詳細を知ることが最優先だ。

「なになに、翼が変わってるな。色も変更されている。ん？なんか武装が追加されてる。《烙印剣（カオスブランド）》？……すごく聞き覚えがある剣の名前だな。とりあえず出すか。《烙印剣》！」

右手に《烙印剣》が顕現する。形は大剣の大きさに剣が黒く、刀身に赤いラインがいくつもある。

「……なあ、マナ。これはお前が用意したんだよな？」

『はい』

「なんで神装機竜のバハムートの《烙印劍》なんだよ!!」

『主様に誠心誠意を込めてご用意した劍でしたがお気に召さなかったでしょうか』

「いや、そんな事はない。それより、レオスの翼もこれはやっぱり……」

『はい、神装機竜のバハムートの翼ですわ』

「うん、わかってたよ。この流れならね。単一仕様能力はと、え〜と……は？」

「どうしたの？ 龍輝」

「マナ」

『はい』

「単一仕様能力のこの読み方は？」

『〈暴食〉(リロード・オン・ファイヤ)ですわ』

「そこまで再現したのかよ!!」

「えつと、ね、ねえ、簪。さつきから龍輝は何を言ってるの？ 神装なんかかって」

「神装機竜だよ。それはね、アニメに出てくる機械の名前なの。でもって、今の龍輝のバハムートの姿は、そのアニメの主人公機と全く同じなの。まさか単一仕様能力を〈暴食〉

にして再現するなんて」

「へ、へえ〜」

「まあ、いいや。マナ、〈暴食〉を使うとルクスが使っていた技もできるのか?」

『それは主様次第ですが、それに応えられる性能になっているのは確かですわ』

「了解。それだけ聞ければいいや。後はアニメで観たやつの見よう見まねだ。シャル、

簪。これから俺も参戦する!」

「うん!」

「頑張ろうね!」

「ああ、行くぞ!!」

龍輝のバハムートマーナガラムが参戦し、福音の撃墜作戦が再開する。戦力は龍輝のバハムートマーナガラムを始め、シャルのバルバトスルプスレクス、簪の打鉄式、一夏の白式、箒の紅椿、セシリアのブルーティアース、鈴の甲龍、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンだ。

「一夏!!俺が隙を作る!その隙に零落白夜を叩き込め!」

「わかった!!」

「龍輝！隙を作るのは君だけの仕事じゃないよ！」

「私たちだってできるよ!!」

「皆……よし！俺が牽制をし続ける！皆はできる限り支援を頼む!!」

『了解!!』

「行くぞ、マナ！」

『はい!!』

「〈暴食〉!!」

単一仕様能力を発動すると赤いラインが一瞬光り、高速で福音に突撃する龍輝。福音も光の翼から光弾を放つ。が……

「永久連環（エンドアクション）!!」

そう叫ぶと龍輝が消える。その瞬間、福音が攻撃をくらう。何回も何回も様々な方向から攻撃をくらっている。

「福音が攻撃を喰らっている……?」

「龍輝さんがやっているのですか？」

「そうだよ、セシリア」

「よく見るとわかるよ」

簪に言われ、よく見ると福音の周囲を赤い光が疾っている。それは、〈暴食〉で強化されたバハムートで速度を極限にまで上げ、福音を攻撃している龍輝であった。

「さっき、龍輝がなにか言ってたわね」

「永久連環（エンドアクション）だよ。アニメだと無限にまで攻撃をし続ける技だよ」「無限に!？」

「終わりはあるよ。たぶんアニメと同じなら龍輝が終わりだと判断した時だと思う」

「簪！福音が攻撃しようとしてる！」

「わかった！山嵐で牽制する！行けえ！山嵐!!」

「私も龍砲を使うわ！いつけえええ!!」

打鉄式から放たれるミサイルと甲龍の衝撃砲。それは見事に福音に直撃する。龍輝は直撃する寸前まで攻撃したあとに後退し、攻撃を続行している。

「師匠のIS、バハムートと言ったか。第二次移行してより強力なISになっているな」
「敵に回すと恐ろしいね」

『一夏!!今だ!!』

通信で龍輝が一夏にタイミングを言う。すると、龍輝は福音を上空に蹴り上げる。そこに一夏が福音に向かって新しい武装の雪羅を使い、零落白夜を発動する。だが、福音もタダでやられる訳にはいかないのか、光弾を発射しようとしている。

「させませんわ!!」

「雨月!!」

「シャルロット!!」

「了解!狙い撃つよ!!機関砲!!」

セシリアがスターライトmk. IIIを右翼に射撃、箒が雨月からエネルギーの斬撃を放ち、ラウラはレールカノンを福音の後ろに狙いを定め放ち、その弾をシャルがレクスの機関砲を狙い撃ち、爆発させ、動きを奪う。

『行けえええええええええつ
!!!!!!』

「今度は逃がさねえ!!」

ドガアアアアアアアンツ
!!!!

「一夏!!」

福音に突撃し、砂浜に突っ込み、砂埃が舞い一夏の姿が見えなくなる。状況がわからないので一夏のいる場所に向かう。その途中で砂埃が晴れ、一夏の姿が見える。福音は光の翼が消えており、完全に活動停止しているのがわかる。

「終わったか」

「ああ、やつとな」

「作戦終了!!」

『やったあああああああつ!!』

龍輝が作戦終了の合図をすると皆が喜びの声を上げる。

「喜ぶのはまだ早いだろ。戻ったら織斑先生に怒られるだろうな。ここにはいない蒼と友奈と美森にもめっちゃ怒られそうだ」

龍輝が言うのと先ほどまで喜んでいた者たちが一斉に青ざめていくのだった。

そして、龍輝たちは無事に旅館へと帰投したのだがやはり、織斑先生が怒っているよ
うな顔で待ち構えていた。だが、よくやったという言葉をいただき皆は驚いていた。そ
の時の織斑先生は顔が少し赤かったのは内緒だ。

「龍輝!」

「リュウ君!!」

「龍輝お兄様!!」

龍輝はというと、待機していた蒼たちが走ってきたかと思うと友奈と美森は抱きつ

く。蒼は側でその光景を見守っている。

「心配かけたな。蒼、友奈、美森」

「ホントだよ……」

「もう会えないのかと思いました……」

「すまなかった」

「心配かけさせやがって」

「ごめんって」

そういうと龍輝は蒼と拳を合わせていた。その間も友奈と美森は抱きついていてるままだ。

「後できつちりお話しようね」

「友奈ちゃん、今からでもいいんじゃないかしら」

「そうだね、美森ちゃん。じゃ、リュウ君、早く私たちの部屋に行つてO・H・A・N・A・S・Iしようか」

「え、おい、ちよつと待て。それより休ませてくれ。体が重いんだから」

「それでしたら私たちが寝かせてあげますよ」

「そういうことじゃない!!おい!蒼!助けてくれ!!」

「いや、こればかりは助けられねえな」

「裏切り者おおおおお!!!」

「あ、友奈に美森。僕たちも一緒にいい?」

「もちろんだよ!シャルちゃんに簪ちゃん!」

「ありがとう!」

「なんか増えた!?!」

戻つてすぐに目に光がない友奈と美森に連行され、その際にシャルと簪が参加するのだった。さすがに龍輝でも今の状態で逃げれば何をされるかわかったもんじやないの
でおとなしく連行されている。

「あ、そうだ。龍輝」

「なに?」

「おかえり」

「おかえり!」

「おかえり!!」

「おかえりなさい」

「おかえり」

「っ……ああ、ただいま」

最後に皆からの温かい言葉を聞き、少し目頭が熱くなるのを感じた龍輝であった。

第三十話

臨海学校から数日が経ち、I S 学園は平和だ。そして、龍輝は蒼と共にI Sの格納庫にいる。

「龍輝、そっちはどうだ？」

「待ってろ、今……終わってたぞ」

「マスター、こちらも終わりました」

「こっちも終わったよー！」

「よし、蒼。準備は整ったぞ」

「わかった。立ち上げるぞ！」

「おう！」

蒼の指揮の下、龍輝たちの目の前にI Sが二機鎮座している。その起動シークエンスが終わったので立ち上げたのだ。

「完成したな」

「ああ、そうだな。これが、蒼と俺の技術の全てを叩き込んだ機体。ヴァルヴレイヴとガンダム融合機、その名もガンダムレイヴだ」

そう、二人が作っていたのは新型のISだ。蒼のヴァルヴレイヴのデータと龍輝のガンダムのデータを一つにした機体、それがガンダムレイヴだ。見た目はヴァルヴレイヴ二号機がドルシアに奪取され、改良されたダーインスレイヴだ。違うのは頭部にガンダム特有のV字アンテナがあることぐらいだ。しかも同じのが二機もあるということは、龍輝専用機と蒼専用機ということになる。

「蒼、お前が一号機、レイヴアインにしろ。俺は二号機のレイヴツヴァイにするから」

「そういうならお言葉に甘えて。しかし、たった三日で完成するとは思わなかったな」

「シユテルたちが手伝ってくれたおかげだな」

「ああ、ありがとな。シユテルたち」

「いえ、ご協力できたことが私たちは嬉しく思ってますので」

『理』のマテリアルのシユテルがデータベースをつくり、『力』のマテリアルのレヴィが重い機材などを運び、デИАーチェとユーリは休憩時のタイミグで自作したお菓子を

持つてきてくれたけどすごい美味かったし。これなら製作もはかどるもんだな」
「我はよく料理をするからな。これぐらい容易いものだ」

この機体を製作しようと言話を持ちかけてきたのは蒼の方からだ。龍輝は特に断る理由もなく、新たな機体を製作するには興味があつたので了承したのだ。ちなみにこのことを知っているのは織斑先生だけだ。他は全く知らない。

「蒼がレイヴアインならお前の主武装の刀を装備させるか」

「だな。龍輝の場合はガンダムスローネアインのGNランチャーを装備だな」

「ああ、二個頼む。取り付けるのは背中ですインサテライトキャノンのようにしてくれ。ダーインスレイヴの主武装のメーネ・ゼルトザームは両方とも装備でいいな？」

「レイヴツヴァイが遠距離特化型になって撃ちまくれば美森の三号機を上回るぞ。まあ、それがお前らしいか。メーネ・ゼルトザームの方は両方だな。あれがあるからこそレイヴになるからな」

「了解」

事前に製作しておいた武器をそれぞれの機体に装備させる。

「よし、これで装備の取り付けも終了！後はそれぞれの色だな」

「ああ。俺はツヴァイを白の部分、黒に変えて黄色の部分、赤にする」

「龍輝らしいな。俺は龍輝と同じように白の部分、黒に変えるだけだな。黒に黄色で」

「蒼らしい色だな」

「まあな。まあ、とにかくこれで今日の特訓には間に合ったし早くアリーナに行かないとな。こいつらの初陣だ」

「そうだな。あいつらには今日の特訓はタツグ戦だと伝えてある。チームはそれぞれで決めろともな。無論、相手は俺らだということのも知らずにな」

「楽しみだねえくさっささで行くか！」

「おう！」

ガンダムレイヴを起動させ、身に纏う二人。そして、乱入者のように見せつけるため、アリーナの上空に向かう。光学迷彩を使い、気づかれないように。その間に龍輝はアリーナに通信を入れ、待機しているみんなに告げる。

「よう、みんな。お待たせ。これより特訓を始める」

『遅いぞ、龍輝!』

「くじで最初にやるやつを決めたんだろ? ならさっさとアリーナに出ろ」

『わかった。龍輝が出るってさ!』

『了解!』

『相手は誰なのかな』

「ほう、最初はシャルと友奈か。珍しい組み合わせだ」

「中距離と近距離のタッグか。なかなかめんどくさそうだな」

「相手にとって不足ないだろ。もう少して俺らも出るぞ」

「おう」

『龍輝、二人とも出たぞ。相手は誰だよ?』

「ちよつと待つてろ。……なんだ? この反応は……二人とも! 乱入者だ! 気をつけろ

!」

『え!』

『なんでこんな時に!』

「驚いてる、驚いてる」

龍輝の演技にシャルと友奈が驚いているのが通信越しでよくわかる。蒼はその反応

がおもしろく、笑いを堪えている。

「よし、いくぞー！」

「ガンダムレイヴの初陣だぜー！」

上空で待機していたので乱入者らしく、すごい勢いで地面に向かい、土煙をあげる二人。

「もう来たの!?!」

「こうなつたらやるしかないよ！シャルちゃん!……つてえ……う?」

「あ……あれつて……まさか……」

『友奈ちゃん! シャルロットさん! あの乱入者はおそらくヴァルヴレイヴのデータを使っていると思うの! だから戦わないで撤退して!』

「そうしたいんだけど……」

「脱出経路が塞がれちゃってる……」

『そんな……!』

撤退でもされたら困るので脱出経路は蒼が設定して塞いだのだ。これで友奈とシャルは逃げられない。

「…やるしかない！シャルちゃん！できる？」

「できるよ！援護は任せて！」

「お願い！結城友奈、行きます！」

近接特化型のI Sの友奈が接近してくる。

「龍輝、友奈を任せていいか？シャルロットは俺がやる」

「了解。行くぞ、ガンダムレイヴツヴァイ！！」

「ガンダムレイヴアイン！推して参る！！」

先に蒼が両手に刀を握り、二刀流で接近してくる友奈に向かって突撃する。

「接近戦なら！」

友奈のI S、ヴァルブレイヴ試作二号機に装備されている巨大な拳を振りかざすが、すんでのところで蒼が避ける。

「えっ!? あっ! ま、待て〜!!」

「友奈! 後ろ!!」

「へ?」

ドゴオオオオオオオオオ
!!!!

「きゃあ!」

蒼を追いかけようと振り返るが、それが仇となり龍輝がGNランチャーを撃ち、友奈に着弾し、爆発する。

「友奈!!」

「だ、大丈夫! シャルちゃんはそっちの戦闘に集中して! その乱入者、私以上に近接に慣れてるから!」

(そりやそうだろうな)

蒼の戦闘スタイルは近接でどんどん攻めるのだ。友奈よりも近接の戦闘に慣れてい
るのは当たり前なのだ。

「わ、わかった!」

「私はこつちを…って私が苦手な遠距離戦闘機!」

(容赦はしないぞ。友奈)

友奈を標的にGNランチャーの二門を発射する。

「二つも!?!近づくことができないよ!」

(さあ、どうする?友奈)

「こうなったら、アレをやるしかない!」

(アレ…まさかとは思うが瞬時加速をしてくるのか?)

「瞬時加速!!」

(マジでしてきやがった!!友奈のやつ、瞬時加速は苦手だと言ってなかったか!?!しか

も上手くできてるし！できるようになって嬉しいけどさ！)

そう思っていると友奈のI Sの巨大な拳が迫ってくる。が、ガンダムレイヴの両腕に装備されている武装を使い、蒼の作った変わった展開装甲で防ぐ。

「そんな防御の仕方があるの!？」

防御が変わっていて驚いている少し固まってしまった友奈にむかって腰に装備されているクリアパーツの素材を使ったナイフで斬る。

「え!？」

思わぬところからの一撃で驚く友奈。たまらず退避する友奈。その隙に龍輝はGNランチャーを連射する。

「弾幕の嵐は勘弁してえええ!!」

そう叫びながら巨大な腕を前にクロスさせ、防御姿勢になる友奈。それでもめげずに前に進んでくる友奈。

(その意気や良し、だな)

連射していたのをやめると、友奈が突撃してくる。

「今!」

「攻撃がやむと突撃するのはいいが相手の行動もよみながら突撃しないと痛い目にあうぞ、友奈!」

「え!?今の声って……」

ガギイイイインツ
!!!!

「え!?!」

龍輝は背中にマウントしていた武器、メーネ・ゼルトザームを取り出し、友奈の一撃

を防ぐ。そして、凧ぎはらって友奈を後退させる。その隙にメーネ・ゼルトザームからビームを放つ。

「ビームも撃てるの!?!」

友奈が怯んだ瞬間に先ほど防御に使った両腕の武装から展開装甲を発動させ、翼のようにはためかせ友奈に叩き込む。

「きゃああ!?!」

この一撃で友奈のI SのS Eが0になり、I Sが解除される。I Sスーツ姿になった友奈はその場にへたりこみ、俯いてしまう。蒼のほうを見ると、同タイミングでシャルのI SのS Eを0にしたらしく、シャルもI Sスーツになっている。

「友奈ちゃん!!」

「シャルロット!!」

ピットから美森と簪が走ってくる。ゲートの扉は解除しておいたので入ってこれたのだ。美森が友奈のところに来て、簪はシャルのところだ。

「大丈夫!?友奈ちゃん!!……………く!」

美森が友奈を抱きしめながらガンダムレイヴツヴァイを睨む。そして、俯いていた友奈が声を出す。

「……………これはどういうことなの、リュウ君」

「え…………?友奈ちゃん…リュウ君って龍輝お兄様のこと…?まさか…………」

「…………バレたみたいだぞ。蒼」

『え…………?』

「お前が声を出すからバレたんだろ」

「その声…………まさか…お兄様…………?」

「ああ、俺だ。美森、友奈」

「アオちゃん…に…リュウ君…」

頭部だけ量子化して顔を見せる二人。

「なにをしているのですか！お兄様!!」

「龍輝もなにしているのさ!!」

「なにつて、新型ISの稼働テスト」

「え、新型!？」

「しかも僕たちでテストつて!？」

「お兄様、私は何も聞いてませんよ？」

「龍輝、私たちも聞いてないよ。あ、まさか琴音ちゃんは…」

「ううん、私も聞いてないよ。お兄ちゃんが何かしら隠し事してるのはなんとなくわかってたけど」

「さすがだな、琴音」

「伊達に十年以上妹やってないよ。お兄ちゃんの変化なんかわかるよ」

「琴音ちゃんにすら秘密にしていたなんて」

「まあな」

「それで、お兄ちゃん。その機体は？」

「ヴァルヴレイヴのデータを使っていると見えますが」

「さすが美森。だが半分正解で半分不正解だ」

「え？でもこれは私たちが持つヴァルヴレイヴと同じだよ？あの防御だって私たちの展開装甲でしょ？ならなんで」

「これは蒼のヴァルヴレイヴのデータと俺のガンダムのデータを融合させた機体だ」

龍輝の言葉にいつの間にか来ていた一夏たちと先に来ていた全員が固まった。

「えっと、お兄ちゃん。その機体は、ヴァルヴレイヴとガンダムの融合機でいいの？」

「その通り。だからお前らには言えなかつたんだよ。信じているが、どこで情報が漏れるかわからないからな」

「情報漏れを防ぐために僕たちに黙ってたんだね」

「新型でも作っていれば情報漏れが一番の脅威だからな。で、名前がガンダムレイヴだ」「ガンダム……」

「レイヴ……」

「蒼のが一号機でガンダムレイヴアイン。で、俺が二号機のガンダムレイヴツヴァイだ」

「こんなのを作っているなんて……」

「強さと性能は今の見たらわかるだろ？」

「二人が使っているからとてつもなく強いけど、性能はすごくいいっていうのはわかったかな」

「こいつらは緊急時とかに使う予定だ。もちろん、気分次第で特訓にも使うかもしれないというのも頭にいれておけ」

蒼の言葉に一同が顔を青くしたのだった。

その後、織斑先生に機体を見せて、この機体も含めて、龍輝たちのISのデータはどこにも渡さないこと。そして、そのデータを盗もうとしてきた者は容赦なく叩き潰すということを伝えたのだった。

第三十一話

「おいしい、簪〜！」

「あ、シャルロット。どうしたの？」

寮の廊下を歩いていると、後ろからシャルに呼ばれ立ち止まる簪。

「いや、どこに行くのかなって思ってたさ」

「シャルロットはわかかってるんじゃない？」

「やっぱり龍輝のところに向かってたんだね。僕も行こうと思ってたんだ」

「じゃあ、一緒に行こう」

「そうだね」

簪とシャル、二人して寮の龍輝の部屋に話ながら向かう。そして龍輝の部屋にたどり着き、ドアをノックする。

『今、行きます』

「え？」

「今の声って……」

ドア越しに聞こえた声、それは龍輝の声ではない。女性の声だ。しかも何度も聞いたことがある声。

ガチャ

「いらつしやいませ、お二人とも。中どうぞ」

ドアが開き、出てきた人物は茶色の髪を肩までのばしているが、首のところではアゴムで纏めた髪が腰にまで届いている女性だ。その人物は部屋の奥に歩いていくが簪とシヤルは固まっている。

「い、今のつて……」

「ま、まさか……」

「シユテルう?!?!」

その人物、シユテルの姿に驚いたのだった。

その後、二人は龍輝の部屋に入る。

「よう。どうしたんだ?二人してなんか叫んでたけど。って今も固まってるし」

部屋の主の龍輝が机の前で立っていて二人を見る。が、二人は固まっている。龍輝の後ろに椅子に座って紫天の書を読んでいる髪を腰までのばした女性、ダイヤーチエを見たまま。

「……………ど」

「どっ」

「どういふことなのこれはあつ?!?!?」

「龍輝説明してっ!!!」

「とりあえず落ち着け!!そして手を離せええええ!!」

固まったままの二人が龍輝の襟首を掴み、叫ぶ。龍輝も叫ぶ。その場はカオスとなったのだった。

数分後……。

「で、これはどういうこと？」

簪とシャルが並んで立ち、その二人の前にはこの部屋にいる龍輝と妹の琴音。そして、いつも龍輝の周りを飛んでいたマテリアルズとマナが『人間の大きさ』になってベッドに座っている。

そう。二人が驚いていたのは昨日まで小さかった子たちが次の日には人間の大きさになっていったからだ。

「実は昨日、部屋に戻ったら東さんから届け物があつてさ。箱だったんだけど開けたらなんかの葉みたくて手紙が一緒に入っていたんだ」

「その手紙は？」

「これだよ」

琴音から一緒に入っていたという手紙を受けとるシャル。

「えっと、『完成した薬を送るね！この薬はシュテルんたちに飲ませてね！何が起こるかはお楽しみ♪』……か」

「それを読んだ後に何の躊躇いもなくシュテルが飲んだら見ての通り。効果がわかつたらすぐにみんなして飲んでな。みんなこの大きさになったんだ」

「元の小さい姿にも戻れます」

「大きさを自由自在に操れるようになる薬を束さんが作ってそれを送ってきたってところだ」

「なんかもう、なんでもありって感じがするね……」

「それは言っちゃダメだ。んん!!とここで二人はなにか用事があったのか？」

「あ、そうだった。龍輝。今度の休みにき、みんなでこれ行かない？」

「へえ、近くにこんなでかいプールができたんだな」

「水上パークって感じだね。お兄ちゃん、私行ってみたい！」

「せっかくの休日を部屋に籠ってても仕方ないしな。よし、行くか！」

「やったー!」

「シユテルたちも行くぞ」

「はい」

「あとはマナの水着をどうするかだな」

「ご心配には及びませんわ、主様。ちゃんとご用意してあります」

「早いな……」

「それじゃあ、レッツゴー!」

「!」

琴音の言葉で簪とシャルが声をあげる。

—水上パーク—

「ねえねえ、そこのお兄さん」

「ん?」

「暇なら私たちと遊ばない?」

「(逆ナンか)……すみません、お誘いはありがたいのですが自分、連れを待っているの

で」

「あら、もうお相手がいるなんてね」

「私たちはお邪魔ね。じゃあ、邪魔者は退散しますか。お兄さんもお相手は大切にしないで？」

「わかっていきます。お気遣いどうも」

水上パークに着き、更衣室手前で別れ、更衣室を出てすぐにある大きい像があつたのでそこで待っている龍輝。龍輝は臨海学校で着ていた水着とはまた違う水着を着ており、ロングヘアーをポニーテールにしている。その状態でパーカーを羽織って上半身を見えないようにすると、一見素敵な女性に見えてしまう。それがわかつていたのでパーカーを羽織ることをしない龍輝である。

「……にしても、逆ナン多すぎるだろ。これでもう六回目だぞ」

更衣室を出てすぐの場所にいるせいとか、度々女性に話しかけられる。たまに男性が近づいてくるが、すぐに男だとわかると、肩をガツクリと落として去っていく。

(男に關してはもつと早く気づけての。ハア……)

心の中でため息をする龍輝。

「ねえねえ、君。結構かわいいね。お兄さんたちと遊ばない?」

(……いい加減キレそうだな)

ろくな確認をせずに自分にまた来たと思いつながら声のした方向を見ると、声をかけられたのは自分ではないことに気づく龍輝。だが、声のした方向を見たことで心の中にある爆弾が破裂しそうな龍輝には爆弾を通り越して火山が噴火するには充分だった。

「ねえねえ、お兄さんたちと遊ぼうよ。絶対楽しいって」

「え、いや、あの、待ってる人がいるので」

「そんな人ほつとけて。さ、俺たちと行こうか」

「え、ちよ、あ」

「んん?」

「……お兄ちゃん」

「お兄ちゃん？へえ、俺らのどっちがお兄ちゃんかな？俺はやっぱ自分がお兄ちゃんって呼ばれたいね」

「お前なに言ってるんだ。俺に決まってるんだろ」

ゾオツ………！

「っ!?」

一人の少女、琴音が二人組の男の後ろに立っている龍輝に気づいていつものように呼ぶと男が自分たちが呼ばれていると勘違いして話し出す、直後に殺気を感じてすぐに後ろを向く。そこには顔は笑顔だが目が笑っておらず、黒いオーラを纏っている龍輝がいる。

「な、なんだてめえは！」

「お前からこそなんだ？」

「お、俺らはこの子と遊ぼうとして………！」

「なに勝手に人の妹を連れていこうとしてんだ」

「な!? てめえ、この子の兄か!」

「だとしたらどうする?」

「そんなの力づくで!っ!」

二人組の男の一人が龍輝に向かって拳を出そうと構えた瞬間、先ほどとは比べ物にならないほどの殺気が龍輝から溢れだす。龍輝が放つ全力の殺気は耐性がない人ならすぐに失神するが、そこは加減しているのだから、男どもが失神することはない。だが、身動きが一切できず、足もガクガクと震え、顔も真っ青になっている。ちよつとでも動けば一瞬で殺される。男どもは直感で悟り、動けない。

「そつちがその気なのは別に構わないが、やるってなつたら………容赦しねえぞ?」
「ひ、ひい! す、すいませんでしたああ!!」

男どもは龍輝の最後のドスの効いた声を出すと、一目散に逃げていった。龍輝は放っていた殺気をやめて周りに頭を下げて謝っていく。そして、琴音の元に向かい合流する。

「琴音、大丈夫だったか？」

「うん。お兄ちゃんが助けてくれたから」

「これが原因で出禁にならなければいいけどな」

「そんな事心配しなくていいぞ兄ちゃん！」

「え？」

「悪いのはさっきの人たちなんだし君は妹を助けただけ！なにも出禁になるようなことはしてないよ！」

「そうそう！もし出禁だつて言われたら俺たちが全力で守つてやるから！なにも心配しなくていいぜ！」

一人の男性から始まり周りにいた人たちがどんどん声をあげていき、最終的にそこにいる全員が龍輝たちの味方だと言つてくれた。龍輝は頬をかいてお礼を言う。琴音は顔を赤くしながら周りの人たちに頭を下げてお礼を言っている。

そして、シャルや簪、シユテルたちも合流した後、龍輝と琴音は理由を言わずにこの場を離れようと言つて半ばシャルと簪を押し去つた。二人は何がなんだかわからずに押されながら歩いていったのだつた。だが、龍輝は知らない。実はみんな

知っていて簪に至つては先ほどの龍輝の行動をバッチリ録画していることに。

「さて、遊びますか！」

『お〜！』

龍輝の声で各々遊び始める。龍輝はシュテルと共にこの水上パークのパンフレットを見ながらどんなアトラクションがあるかを調べる。途中、突然シュテルが龍輝からパンフレットをすごい速さで取り上げる。龍輝は突然すぎて訳がわからず、シュテルを見た瞬間顔面に水がかけられる。水かけたのはシャルと簪で、シュテルは二人がなにをしようとしているのかすぐに察知して濡れたらまずいパンフレットだけを取り上げたのだ。龍輝は全てを理解して目が笑っていない笑顔でシャルと簪に水をかけるためにプールに入る。シュテルはパンフレットを龍輝が持ってきた鞆にしまつて龍輝作の水鉄砲二丁を手にディーアーチェエたちがいるところに行く。ディーアーチェエたちも水鉄砲でかけあっている。そこにシュテルも加わると、水のかけあいにより一層激しくなる。

—某施設—

ある国の施設に襲撃があった。その場にいるのはイギリスのISである機体『サイレント・ゼフィルス』。ゼフィルスの操縦者はまだ幼い女の子であるがバイザーで顔が見えない。すると、その操縦者は武器を持っていない左手を開く。その手には青く光るロケットがある。ロケットを開くと一人の男性の写真が入れられている。

「……………もうすぐ会える……………『兄さん』」

操縦者はそう呟き、綺麗に輝く夜空を見上げる。

—水上パーク—

「……………」

龍輝がふと空を見上げる。その空は真夏の空で雲がほとんどなくどこまでも続く青い空が広がっている。龍輝はしばし空を見上げては、彼がなにを思っているかを見上げたのかは本人にはわからない。そこにまたもや水がかけられる。龍輝はゆつくりと

シャルと簪に向く。二人は先ほどと同じようにしてやったりの顔をしている。すると突然龍輝が右手をあげる。突然の行動に二人は戸惑うが次の瞬間、どこからか水鉄砲が飛んできて龍輝の右手に収まる。それは、龍輝が作った自分専用の水鉄砲。普通の水鉄砲にしては大型でゴツイ。一瞬で水を装填し、二人に銃口を向ける龍輝。二人は龍輝を警戒しながらどこからその水鉄砲がきたのかを探る。だが、見つける前に龍輝が引き金を引く。圧縮された水が玉状になって二人の後ろに着弾する。高出力すぎて着弾した水面が一瞬だけ穴が開いたようになる。二人は悟った。これはやってしまったと。構わず龍輝は引き金を引く。マシンガン並の連射能力で水玉を発射する龍輝。二人は全力でかわしていく。

「ちよ、ちよつと龍輝！いくらなんでも本気すぎない!？」

「当たったら痛いどころじゃないよこれ!？簪！僕が龍輝を引き付けるからその間に!」
「わかった！無事でいてね！シャルロット!!」

龍輝の猛攻に簪は離脱してシャルだけが残る。あまりの猛攻に水をすくって攻撃する事すらできずに避けるしかできないシャル。端から見たらどうして避けれるのと言いたいぐらいに回避技術が高いシャルである。

「さすがにちよつとヤバイかも……!」

「シャルロット!!これを!!」

「ナイスタイミングだよ、簪!!」

離脱した簪が戻ってきてシャルにある物を二つ投げる。シャルはそれをキャッチして龍輝に向ける。それは、簪とシャルが持ってきていた水鉄砲である。事前に買っており、なかなか威力が高そうな物を選んでいた。水はすでに簪が入れといてくれていてあとは龍輝に発射するだけ。すると、龍輝の猛攻が止む。水が無くなったようだ。

「チャンス!」

この隙にシャルは二丁の水鉄砲を龍輝に向けて引き金を引く。発射された玉状の水が龍輝に向かって飛ぶが、途中で別方向からの攻撃（水）に撃ち落とされる。

「な!?!」

「どこから!?!」

「私を忘れないで欲しいな」

「こ、琴音ちゃん!」

「な、なんで琴音が!」

「こんな面白そうな遊び、参加しないわけにはいかないでしょ? 私はお兄ちゃんの方に
つくからね」

琴音は両手に小型ライフルを模した水鉄砲を手に龍輝の隣に立つ。

「琴音、簪を頼む。俺はシャルをやる」

「簪お姉ちゃんを? わかった。でもなんで簪お姉ちゃんなの?」

「俺の攻撃を全て避けたシャルを撃ち取りたいからだ」

「え!? そんな理由!」

「わかった! じゃあ簪お姉ちゃん、手加減無しでいくよ!」

「ちよ、ちよつとは手加減してほしいな……」

「僕も……」

「問答無用!!」

その後、龍輝たちがいるプールからとてつもない音が響いたのだった。

「今の音って……」

「……行ってみるか」

「あ、待ってよ〜！」

音の発生源を探るためにある人物たちが向かう。

「水鉄砲なんて初めて作ったがわりとよかつ………よくなかつたわ……」

激しい戦闘をした後、プールから上がり製作した水鉄砲を見ていると耐えられなかったのか所々ヒビが入っているのを見つけてガツクリと肩を落とす龍輝。隣には琴音が水分をとっている。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだ？ 琴音」

「二人、大丈夫かな」

琴音の目線の先、そこには全身ずぶ濡れになってゼエゼエと息をして倒れているシャルと簪の姿がある。

「り、龍輝……容赦、ない……」

「琴音ちゃんも……本気……出しすぎ……」

結果は見てわかる通り、二人の負けである。ちなみに琴音は少しだけ濡れており、龍輝に至っては全然濡れていない。

（少しやりすぎたかな？ま、大丈夫だろ）

ここで龍輝は改めて彼女たちの水着を見る。簪の水着は髪の色と同じ水色のビキニだ。シャルは臨海学校の時とは別の純白のビキニを着ている。琴音はフリルのついたかわいらしい水着だ。

「少し休めば大丈夫だろ」

「そこまで不意打ちに腹立ったの？」

「いや、そこまでではなかったんだが二人のしてやったりの顔を見た瞬間怒りが抑えきれなかった（ゴツツ！）イテツ！」

淡々と説明した龍輝の頭にゲンコツが落とされる。

「いきなりなにすんだ蒼!!」

「少しは手加減つてもんを知れ、バカが」

「あれ、蒼お兄ちゃんも来てたんだ」

「おう」

「だからといって力強くゲンコツするなよ！わりといてえぞ!!」

「お前にはこれがちょうどいい」

「ちょうどいいってなにが!?(ブオンツ!) あぶねっ!？」

ゲンコツを落とした人物、蒼に向かって抗議し続ける龍輝。だが、龍輝に向かって凄
い速さで拳が迫る。すんでのところまで避けた龍輝は急いで後方に跳ぶ。

「友奈!?! おま、いきなり殴りにくるか普通!?!」

「それをかわすリュウ君も流石だね。けど、さっきの話を聞いた限りリュウ君が悪いかな」

「いや、流石に大人げなかったと思ってるけどさ……」

コツ……

「……いつの間に……」

「この距離なら絶対に外しませんよ」

友奈からの攻撃を避けるために距離をとるといつの間にか後ろにいた美森が水鉄砲の銃口を龍輝の後頭部に突きつける。ゼロ距離、避けるのは不可能だ。

「お覚悟です!!」

パシユツ!

「甘い!!」

「な!?!」

引き金を引く瞬間に体をひねってゼロ距離をかわす龍輝。かわした勢いを殺すために側転をしてから着地する。

「ゼロ距離を……」

「避けるなんて……」

「マスターならあれくらい余裕です」

「うわあ!?!」

「び、ビックリした……」

「あ、みんな、おかえり。楽しめた?」

「うん! 久しぶりのプールとても楽しかった!! ね、ユーリ!」

「はい! 小さい姿でも楽しめました! が今の姿のほうがより楽しかったです!」

「主が用意した水鉄砲も素晴らしい性能だった。久しぶりにはしゃいだな」

「私は初めてのプールだったのでどんなものかと思っていました! がとても楽しかったです」

「マナも楽しめてよかった。初めてのプールが楽しくなかったら嫌だもんな」

龍輝の回避にシャルと簪は驚愕する。そこにシユテルたちが戻ってきて水分をとったりなどして座る。一方避けられた美森は悔しがっている。

「相変わらず回避技術がとんでもねえな」

「お前に言われたかあない。んで、スルーしてたけどまさか蒼たちも来てるとはな」

「私たちだけじゃなくてIS学園の生徒ほとんどが来てるよ！」

「織斑先生と山田先生も発見しました」

「お二人も来てるとは驚きだ」

「ねえねえ！せつかくだしみんなで遊ぼうよ！」

「いいね！よおし、遊ぶぞ〜！」

「龍輝、ちよいと勝負しないか？」

「いいぜ。そこに競技用プールがあるから何秒で泳ぎきるか勝負だな」

「では、私はお二人のタイムを図ります」

「頼んだ、美森」

「私たちは先ほどと同様にシャルロットたちと遊びます」

「私は主様の応援に行きますわ」

「あ、それなら私も」

「ユーリ、帽子などをしっかりとつぶって主の応援をするのだぞ」

「わかっています、ディアーチェ」

「レヴィちゃん！水鉄砲勝負だよ！」

「負けないからね！ユウナ！」

それからは各自でたつぷりと夏の休日を満喫したのだった。プールで遊び終わると、龍輝は琴音に言われていた夜に開催する夏祭りに向かうべく浴衣に着替え、待ち合わせ場所で待っていた。蒼たちとはそこからは別行動と話になっているため龍輝一人だ。

「龍輝〜！」

「お兄ちゃん！」

「来たか」

「お待たせ！」

「お待たせしました。マスター」

「おう。じゃあ、行こうか」

『うん！（はい！）』

そこからはいろいろな屋台を回り、簪がシャルにたこ焼きを食べさせようとしていたがフランスだとタコはデビルフィッシュと言われているので食べようとしなかった。が、隙をついて琴音がたこ焼きをシャルの口に入れ、シャルはここではまずいと思ったのか吐き出さずに食べたのだ。たこ焼きを飲み込んだシャルはプルプルと震えながら俯いていたが龍輝がシャルの様子を見てみると目を輝かせて龍輝が持っているたこ焼きを分けてもらって食べたのだった。本人はデビルフィッシュをここまで美味しくできるからさすが日本と熱く語っていた。

時は過ぎ、プールに行つて一週間が経とうとしていた。龍輝は今、シユテルと共に外出中だ。なんでもシユテルが新しい本を読みたいと言い、その買い物に龍輝が付き合っている。ちなみにシャルはラウラと外出中で簪も楯無と一緒に実家に帰っている。

「ありがとうございます、マスター。買い物に付き合つていただいただけでなく本まで

買ってくださいって」

「気にするなよ。シユテルが珍しく願ってきたんだしき。それに男なんだし金を出すのは当然だろ」

「ありがとうございます」

「お前はあまりわがままとかを言わないから嬉しくてな。もつとわがままを言ったり甘えてもいいんだからな」

「で、では……このまま、お昼は外で食べませんか？」

「そうだな。近くにいい店があるといいんだが……」

「(王やシャルロットにカンザシには悪いですが今はマスターを一人占めさせてもらいます／＼)」

「お、近くにカフェがあるみたいだな。そこに行くか。シユテル？」

「なんでもありません。では、そこに向かいましょうか」

「おう」

——同時刻、 I S 学園内学生寮——

「ダイアーチエー！」

「王様！」

「ふむ、珍しいな。帰ってきたらいろいろ聞かねばならんな」

「どうしたの？む、お兄ちゃんが何か嬉しいって思ってる気がする」

「あらあら、これは珍しいですわね」

「珍しい……ああ、なるほどね」

—同時刻、更識家—

「むー！」

「どうしたの？簪ちゃん」

「今、龍輝が女の子と一緒にいる気がする」

「（あらあら、簪ちゃんも本当にあの子が好きなのね。そこまで感じとるなんて）」

「この感じは………シユテルかな？」

「（……凄い感じとるわね。ってシユテル？）」

「もしそうだとするならシユテルが龍輝と一緒にか。珍しいな」

「あの、簪ちゃん？姫柊君がシャルロットちゃんじゃない女の子と一緒にだとしたら怒ら

ないの?」

「え?別に怒らないかな」

「(簪ちゃんと言ハルロットちゃんが姫終君のことが好きでずっと一緒にいるのはいいんだけどその他にも女の子と付き合ってるっていうの?だとしたらちよつとお話が必要かしら)」

「だってシユテルは龍輝の家族だしね」

「へ?家族?」

「あれ?噂を聞いたことないの?龍輝の回りを小さい人形みたいなものが飛んでいるっていうやつ」

「あ、それなら聞いたことあるわ」

「その回りを飛んでいるのがシユテルたちで龍輝の家族。龍輝は妹たちだって言ってたな」

「そうなのね。それなら安心したわ」

「なにが?」

「こつちの話♪(姫終君、誤解しちゃってごめんなさいね)」

「帰ったらいろいろお話ししないとなく♪」

―戻ってカフェの前―

ぶるり……

「し、シユテルどうした？」

「いえ、なんでもありません……」

「ざつき震えてなかったか？」

「気のせいです。そういうマスターも震えていませんでしたか？」

「大丈夫だ。たぶん（シユテルも悪寒を感じたのか。原因はわかりきっているが……）」

「（……なるべく遅くに帰りたいですね。帰ってしまうとマスターと一緒に王になんかを

されるか……）では、入りましょう」

若干顔を青くしているシユテルが先にカフェの中に入り、龍輝もそれに続く。中に入るとすぐく見覚えのある店員が二名いることに驚いたシユテルと龍輝。店員の方も驚いている。

「な、なんで……」

「なぜシャルとラウラがここにいる？」

「それにシャルロットはなぜ執事服を？」

「こ、これは、その……成り行きで……」

「へえ、似合ってるじゃないか。どうせならシャルのメイド服も見たかったけどな」

「こうなるんだつたら龍輝にメイド姿を見せたかったよ……」

「師匠、席に案内する。こっちだ」

「お、すまないな。ラウラ」

ガシツ！

「ん？」

「マスター」

「わかってる。あの、何か用ですか？」

「君たち、ちよつといい？」

龍輝とシユテルの腕を掴んだのはこのカフェの店長らしき女性だった。龍輝はまさ

かと思いいシャルを見ると諦めてという風に顔を横に振るのだった。

数分後……。

「突然ですがお客様！今日限定で新しい執事とメイドをご紹介します！さあ、入って！」

店の奥の扉が開き、執事とメイドが入ってくる。言わずもがな龍輝とシュテルである。その場にいたお客は全員が女性だったので執事の龍輝を見ると頬を赤くしてポーッと見ているのだった。シャルもお客と同じように龍輝を見ている。ちなみに龍輝とシュテルの服はシャルとラウラが着ているのと同じで違うのは二人して伊達メガネをしていること。龍輝は長い髪をポニーテールにしている。

「うんうん！やっぱり似合ってる！」

「まさか執事服を着ることになるとはな。どうだ？シャル」

「うん……すごく似合ってる……／／／」

「それじゃあ、今から今日限定の写真タイムです！」

『はっ？』

店長の声でお客の女性たちが凄い勢いで龍輝たちを撮る。たまらず龍輝たちは戸惑いながらポーズを決めていく。

「店長、写真タイムなんか聞いてないんですけど」

「いや〜ごめんね？なんかそうしたいってお客様の目がそう言ってたからさ〜。あ、君たちも写真撮っていいよ？」

『ありがとうございます！』

「シャルたちまで……」

「ごめん龍輝。これは簪にも見せなくちやいけないから」

「さいですか……。シユテルとラウラもなぜだ？」

「王に見せるためです」

「クラスのみんなに見せるためだ」

「シユテルは構わないがラウラ、それはやめてくれ。後で俺が大変な目にあうから、絶
対」

バンッ！

「(客か) いらっしやいま」

パアンパアン！

「きゃあ!!」

「騒ぐんじゃねえ!! 大人しくしろ!!」

乱暴に入ってきた男たちがいきなり銃を天井に向かって発砲する。女性は悲鳴をあげてしまうが銃声で驚いてしやがむ。他の人たちも同様にしやがみこむ。

(強盗か……なら、ん?)

ウー!!

『君たちはすでに包囲されている！大人しく降伏しろ!』

店の外からパトカーのサイレンが聞こえたかと思つたら拡声器を使つていられる警官の音が聞こえると強盗の一人が銃で窓ガラスを粉碎する。その行動で何人かの女性がまたもや悲鳴をあげる。

「人質を殺されなくなかつたら今すぐ車を用意しろ!!」

マシンガンを持つている男が一台のパトカーに向けて発砲し、パトカーをボロボロにした。

(ずいぶん荒くれてるな。さて、どうしたもんか)

龍輝は強盗が発砲したと同時に近くにいた女性三人の前に素早く移動して守るように左手を女性三人の前にかざしていつでも動ける体勢でしゃがむ。すると、一人の男が龍輝に気づいてライフルを向けながら近寄ってくる。

「おい、お前。女だらけのこの場所で男一人で働いてずいぶんと偉そうだな」

「は? いえ、臨時で今日だけこの店にバイトすることになっただけなんです」

「理由なんか聞いちやいねえよ!!」

「ええ……」

「俺はお前が気に入らねえんだよ!!もういいや、お前早くここに立てや」

男が店の中心部分に銃を向けながら言ってきたので龍輝は黙ってそこに移動する。

「おい、警察に伝えろ!ここに気に入らない奴がいるから殺すつてな!!」
『!?!』

男の言葉で店内にいた女性たちが驚愕の表情を浮かべ、何人かはこれから起こる惨劇を見たくも聞いたくもないために目を瞑って耳を塞いでいる。

「……」

龍輝は黙って男のライフルを見つめているが男はそれが死の恐怖からなっていることだと勘違いしてしまう。

「死ぬのが怖かったら土下座しろ!!」

「……わかりました」

龍輝が右足を少し後ろに動かし膝を曲げて重心を下げた。と、思った瞬間……。

「ぐっ!!」

龍輝が一瞬で男に接近して鳩尾に肘鉄を喰らわせた。男はドサリと倒れ、気絶する。それを合図に隠れていたラウラが氷を指で弾いて他の強盗の喉や額に当てて強盗の動きを抑制する。龍輝はその隙に一人ずつ首に手刀をいれたり、蹴りをいれて倒させる。

「援護ありがとな、ラウラ」

「師匠の力になるのは弟子として当然だ」

「くっ!こいつら!!」

強盗の一人が銃を龍輝とラウラに向けて発砲するが龍輝たちの前にプラスチックロウを展開したシユテルが入り、弾丸を防ぐ。

「な!？」

「もう一人いるんだよ! 残念ながら!!」

「ぐは!!」

シャルも出てきて龍輝と同じように蹴りをいれて倒させる。これで、強盗たちは沈黙した。

「ふう」

「ナイスだ、シャル」

「うん」

「シユテルも防御ありがとな。ただ、あまりブラストクロウは出すなよ?」
「すぐに消したから大丈夫だと思います」

「まあ、確かに一瞬だったけどさ。ん?」

「……ど、どうせ捕まるなら、ここら一带吹き飛ばしてぐべら!?!」

「黙って寝ている雑魚が」

男の一人が突然立ち上がって着ていた上着の裏に爆弾を付けていたらしく、爆弾を見せたと同時に龍輝がプラスチックロウ（龍輝専用カラー）を展開して男の顔面をぶん殴った。殴られた男は後ろに飛び、大の字で床に倒れる。

「あ、やべ」

「やりすぎです、マスター」

「いや〜なんか手加減できなかつたわ」

「流石にプラスチックロウで殴られたら誰だつて気絶するよ」

「流石師匠だ。あそこまで反射神経を持っているとはな」

「まあ、まずはここいらで失礼させてもらおう。店長、俺たち用事があるんで失礼します。あ、警察にこの事はあまり言わないでくださいね。皆さんも。格闘経験のある店員が制圧してくれたついで」

「え、あ、うん。ありがとうね、みんな！」

「ありがとう！執事さん！メイドさん！」

「ありがとう！」

そこからは裏口から出て警察の包囲網をただの野次馬のように見せかけて脱出した

のであつた。

「マスター、そろそろ帰らないと。王たちが待っています」

「ん、やつべ、もうこんな時間か。遅くならないうちに帰るって言つたからディアーチエが怒りそうだ。シヤル、ラウラ、俺たちは帰るけど二人はどうする？」

「僕たちはまだ用事があるから帰らないよ」

「先に帰ってくれて構わないぞ、師匠」

「わかつた。じゃあ、学園でな。気をつけて帰ってこいよ？」

「わかつてるよ」

「うし、じゃあ行くぞ、シユテル」

「はい。ではお先に」

「うむ。そちらも気をつけるのだぞ、師匠にシユテル殿」

二人と別れ学園行きモノレールに乗る龍輝とシユテル。夕陽が射し込む車内で二人は最初は話していたが人間の大ききで初めてのお出かけと予想外のことが起きて疲れてしまったのかシユテルは龍輝の肩を枕にして眠ってしまった。龍輝は眠ってしまったシユテルの頭を撫でて先程の本屋で買った小説を読むのであつた。

―帰宅後―

「さて、主にシユテルよ。二人がなぜこうなっているか」

「わかつてるよね？」

「はい……」

寮の部屋の扉を開けると仁王立ちしてディアーチエと簪が待っていたのであった。そして現在、龍輝とシユテルは正座をしていて二人の前に腕を組んでいるディアーチエと腰に手を当てる簪がいる。琴音はベッドに座ってユーリの髪をといている。レヴィは龍輝たちの様子を見ながら飴を舐めている。

「主と二人つきりのお昼。普段からわがままを言わないシユテルが主にわがままを言うのを我は嬉しかった。だが、少々楽しみすぎたのではないか？」

「……申し訳ありません。ですが王」

「なにより！」

「はい？」

「帰りの電車の中のことには狙ってやっていたことか？」

「帰りの電車……っ！／／／」

「思い出したか」

「あ、あの、王／／／あれは、その……／／／」

「……どうやら狙ってやっていたことではないようだな」

／／／

「ディアーチエ、遅くに帰ってきて悪かった」

「主もあまり心配をかけるでない。遅くなるのなら連絡はいれてほしいのだ」

「報、連、相はちゃんとしないとだよ？龍輝」

「すまん……」

「ディアーチエはずっとマスターとシユテルがいつ帰ってくるのか、どこかで事故にあったのかってすごい心配してたんですよ？」

琴音に髪をといてもらいながらユーリが爆弾発言をする。たまらずディアーチエは顔を赤くしてしまう。

「それは黙っておれ！ユーリ！！／／／」

ガシツ！

「シユテル、マスターの隣になぜシユテルもメイド服を着ているのか詳しく聞かせてくれますか？」

「え、あの、ユーリ？」

「聞かせてくれますか？」

「あの、ま、マスター……」

「……ごめん」

「マスターもですよ？」

「えっ!？」

「さあ、詳しく、話してもらいます!!」

「は、はい!!話します!!」

「デИАーチエと簪からの説教の次は嫉妬したユーリに包み隠さず話すことになった龍輝とシユテルたちであつた。

後日みんなでそのカフェに行ったり、お出かけをするという約束で落ち着いたので

あ
つ
た。
。

第三十二話

「だああああああああ!!」

ドゴオオオオオオオン!!

I S学園の第一アリーナで男性の雄叫びと同時に墜落音と土煙が上がる。

「くっそ……(っ)まで強いとは……」

雄叫びを上げた男性、龍輝は現在纏っているガンダムバハムートマーナガルムを操作して起き上がりながら愚痴り、上空を見る。そのアリーナの上空には緑色の粒子を放出しながら滞空している全身装甲の機体がいる。

緑色の粒子。そして全身装甲。その機体は右手に大きな刀、太刀を握り、左肩に青いシールドを装備している。公式設定では逆だが、その機体はガンダムエクシアリペアIVである。そして搭乗者は……。

「どうした？お前が作ったガンダムはその程度か？」

「言つてくれますね、織斑先生」

織斑千冬、その人である。龍輝が千冬が以前使っていた専用機はないというのを知り、簪のガンダムを作る際に追加して作り上げたのだ。

今は、新型ガンダムの稼働テストである。

「時間もないからすぐに終わらせようか。このガンダムの力、使わせてもらう」

「なら、こっちもー」

龍輝はバハムートを引き上げらせて大剣（烙印剣（カオスブランド））を構える。

「トランザム」

『『暴食（リロード・オン・ファイア）』!!』

エクシアリアピアIVが赤く輝き、バハムートも一瞬だけ赤く輝いてエクシアに突撃す

る。『暴食』によって強化されたバハムートは物凄いスピードで迫りー。

再度、アリーナに轟音が響いた。

「今日はここまでにしよう」

「ありがとう………ごさい、ましたあ………」

千冬はエクシアを待機状態にし、待機状態になったエクシアを見つめる。その目は、新しい相棒を手に入れて嬉しそうな目だ。

対して龍輝はバハムートを解除して地面に寝転がってゼエゼエと息をしている。

「大丈夫？ 龍輝」

龍輝のところに簪が来て持っていたハンカチで龍輝の額にある汗を拭っていく。

「なんとか……。やっぱり……。ブリュンヒルデには勝てねえ……」

「[VTS]を圧倒していたではないか」

「あんなパチモンと一緒にするな、ディアーチェ……」

「それにあの時は《イグナイト》モードでしたからね。それもあつたと思われませう」

「なんだ、姫柊。本気を出していなかったのか？」

ディアーチェとシユテルの会話を聞いていた千冬が龍輝に問いかける。それだけで龍輝はピタッと動きが止まる。文字通り、呼吸もせずに微動だにしない。

「なら今度はその《イグナイト》を使用しての模擬戦をしようか」

「そう言うと思ってましたよ!!だから言わなかったのに!!」

千冬の言葉に龍輝はダダをこねる子供のように手をバタバタする。簪はこんな龍輝を初めて見たことで呆然としている。

「……………すまぬ。主よ」

「……………すみません」

事の発端のディアーチェとシユテルが目をそらして謝る。

「ところで、龍輝。私を呼んだ理由って？」

「ああ、簪にこれを渡したくてな」

起き上がりながら右拳を出す龍輝。簪は首を傾げながら見ていると拳が開かれる。そこにあつたのは緑色の水晶玉のような物が付いている指輪だった。

「指輪？」

「こいつはある機体の待機状態でな。簪のために作った」

「え、ってことは、これはまさか、ガンダム？」

「そう。名前は……」

アリーナに先ほどまで龍輝と簪がいたが、今は簪一人である。

『それじゃあ簪。テストを開始するぞ』

「うん。いつでもいいよ」

『よし、ターゲットを出すぞ』

そして簪の目の前にアリーナを埋めつくさんばりの数のターゲットが出現する。

『ちよ、姫柊君!?!なにもあんな数を出さなくても!?!』

マイク越しで真耶が慌てているのがわかり、簪は苦笑してしまう。

『大丈夫ですよ山田先生。あの機体は、これぐらいないとダメですから』

『それでも、あの数は……!?!』

「山田先生。龍輝の言うとおり、この機体はこれぐらいじゃないとダメなんです」

『更識さん……』

『じゃあ、始めてくれ』

「わかった!おいで!」

そして、簪のガンダムの稼働テストが始まり、終わった。それは一瞬で、ターゲットだけでなく、簪の周囲まで地面が抉れてアリーナは悲惨な姿になったのだった。

余談だがこれを見ていた真耶は顔を青くしており、千冬はため息しかしていなかった。

—数時間後—

「で、文化祭でのクラスの出し物だが……」

教壇のところは一夏が立っている。龍輝たちが新型の稼働テストを終えて学校が始まると、近々学園祭が開催されるそうでその出し物を決めている最中だった。一夏が教壇に立っている理由はクラス委員だからである。そして後ろの黒板にはクラスメイトたちが言った出し物が書かれている。

「全部却下だ!!」

『えええええ!?』

若干顔を赤くした一夏の声にクラス全員が驚きの声をあげる。なんせ、書かれている出し物が……。

一・ 織斑一夏と姫柇龍輝と王様ゲーム

一・ 織斑一夏と姫柇龍輝とポツキーゲーム

e t c .

である。一夏が顔を赤くするのも当然だ。

「アホか！誰がこんなやつて喜ぶんだよ！」

「私たち全員だよ！」

「そうだ！そうだ！」

「織斑一夏と姫柇龍輝は共有財産である！」

「ぐぬぬ……。山田先生は反対ですよね!？」

「私は……ポツキーゲームがいいかと……／／／」

「なっ!? 龍輝! こんな反対だよな!」

真耶に同意を求めた一夏であったが、相手が悪かった。真耶は一夏の予想に反して顔を赤くしながら自分がいいなと思ったのを言った。それに驚きながらもなんとか同意を得ようと龍輝に求めてくる。そんな龍輝は――。

「確かに反対だな」

「だよな!」

「そんな事より姫終。〈プラストクロウ〉を展開するな」

「あれ、いつの間に」

「え、無意識で展開したの? 龍輝」

無意識でなぜか〈プラストクロウ〉を展開していた龍輝。千冬に注意されて気がついた反応にシャルがツツコミする。

「失礼しました。んで、出し物だけど俺も反対だ」

『えええええ!』

「当然だろ。この出し物だと俺と一夏だけに負担がかかる。それも相当のな。それにお前らは何をしているんだよ？お客に混ざって何回も列に並ぶつてのは無しだからな」
『う………』

龍輝の予想通りでその出し物になったらクラスの女子たちはお客に混ざつて何回も並ぼうと企んでいたようで、龍輝に言われたことで思惑は無になったことで肩を落としていた。

「確かに二人への負担がすごいか……」

「ならメイド喫茶はどうだ？」

「メイド喫茶？」

「うん……いいんじゃないかな。龍輝と一夏には厨房とかをお願いしてたまに接客とかもや」

「織斑君と姫終君が厨房か……」

「二人の手料理を食べれる……メイド喫茶だから執事もアリ……」

「執事姿の二人が見れる……」

『それでいこう!!』

「欲が見え見えだなお前ら」

ラウラの提案にシャルが考えて提案したのを聞いて他の女子も自分でいろいろ考えた結果、ラウラの提案に賛同した。欲がダダ漏れだったが……。

「そうと決まれば服とか準備しないと！」

「お裁縫得意な子いる？」

「私できるよ！」

「私も！」

「それじゃあできる子たちはできるだけ多くの服をお願い！」

「メイド服と執事服はアテがある。私がそこに頼んでみよう」

「お願い！ボーデヴィッツヒさん！」

団結力の凄さに一夏は圧倒されてなにも言っていないのにどんどん決まって行くのを見続ける。

「まあ、変装してる喫茶店って思えばいいか……」

そう呟くことしかできない一夏であった。

—ある建物内部—

「近々I S学園で学園祭が開かれるそうよ」

「狙うならその時だな」

「……」

「あの男たちのI Sを奪える絶好の機会よ。二人で行きなさい」
「俺一人で充分だ」

「ダメよ。これは命令だから」

「チツ！」

「M。準備は怠らないように」

「……わかつている」

「(こ)これで……ようやく『兄さん』に会える……。待ってて、『兄さん』……」

第三十三話

学園祭。それは、生徒たちがいろいろな出し物をして訪れた人たちに精一杯楽しんでもらうため、そしてこの学園がどんなに素晴らしいかをわかってもらい、新入生をなるべく多くするという学園の目論見もある行事である。

「織斑君！オムライス追加！」

「わかった！」

「姫終君！ケーキも追加！」

「了解！」

「王様！王様特製クッキーも追加お願い！」

「うむ！」

龍輝のクラスメイトの女子たちが忙しなく動き、オーダーを言ってくる。それに答えながらクラスで仮設置した調理場で龍輝、一夏、ディアーチエ（人間サイズ）がどんどん調理していく。

「ディアーチエ」

「うむ。このペースなら問題なからう」

「うし。一夏、先に休憩行ってこいよ」

「え？いいのによ？」

「このままならディアーチエと俺で問題ない。休憩できる時にしといた方がいいからな」

「わかった。じゃあお言葉に甘えるとするわ」

「おう」

「王様も頼んだぜ」

「任せろ」

一夏はエプロンを外し、執事服のまま教室から出ようと歩き出す。

「あ、待った。一夏」

「つと。なんだ？龍輝」

龍輝に声をかけられ、ブレーキをかけて振り向く一夏。龍輝は調理場からヒョコツと顔を出している状態という光景。これをクラスの女子が見たらどんな反応をするのか。

「シユテルから念話で報告されたんだが、どうやら新聞記者のような女性が来てるみたいなんだ」

「記者ねえ。それがどうした？」

「忘れてないか？俺らは貴重な存在だつてことを」

「あ」

「そういうことだ。変にデータ取られたり、しくじることはないだろうけど自分のＩＳを奪われたりとかなるかもしれないから極力一人では行動するなよ」

「わかった」

「ということだ。シャル、頼んだ」

「なっ!？」

「えっ!？」

「わかった。それじゃあ一夏、僕と回ろうか」

「おう。頼んだぜ、シャルロット」

「任せて」

執事服のままの一夏に着けているリボンを少し緩めて楽にするメイド服のシャル。二人が教室から出ていく時に教室にお客として来ている生徒たちが顔を赤くしながらポーッと見つめている。教室から出た一瞬、シャルがチラッと龍輝にアイコンタクトをしてきたのを見て、龍輝は小さく頷き、料理を再開していく。

「師匠」

「どうした？ラウラ」

「なぜシャルロットなのだ？私と回っても良かったのではないか？」

「ああ、それはー」

「そうですわ龍輝さん!!一夏さんと回るのはわたくしでも良かったはずです!!」

「同意見だ!!なぜ私ではないのだ!!」

「落ち着けバカ共」

「あうっ!!」

「きやつ!!」

ラウラの質問に答えようとした瞬間に騒ぎながら入ってきた箒とセシリアを黙らせ

るために料理に使っていないお玉を二人の頭に叩き込む龍輝。

「はあ……。師匠の言う通りだ。少しは落ち着け、二人とも。ここは普段の教室ではなく、喫茶店なのだからな」

「う……。すまない……」

「申し訳ありませんわ……」

ため息をしながらラウラに正論を言われ、叩かれた箇所を押さえながらしゅんとなる二人。

「わかればいい。それで師匠、理由とはなんだ？」

「これは護衛みたいなものだ。お前らだとそれを忘れて学園祭を利用して一夏を振り向かせようと企むだろうと思つてな。シャルならそんな事しないでちゃんと護衛をしてくれるから頼んだだけだ。まあ、どっちにしろユーリとレヴィが合流する手筈になつてから二人つきりになんてならないが」

「なるほど、さすが師匠だ。確かに師匠の言う通り、私だつたらそつちのけで嫁を振り向かせようとしてしまっただろうな。そこの二人もそうだろう？」

「……………していただくろうな」

「……………わたくしもです」

「わかったなら接客に戻れ。お客さんはたくさんいるんだからな」

「……………わかった」

「……………わかりましたわ」

「あの二人はまだ納得してないか……。では師匠、私も持ち場に戻る」

「ああ。ラウラ」

「なんだ？」

「俺が言うのもなんだが、なぜそこまで落ち着いてるんだ？ 想い人が他の女と一緒になんぞぞ。二人のような反応をしてもおかしくないだろうに」

料理場から出ていこうとしたラウラに気になっていたことを聞く龍輝。確かにラウラはずつと落ち着いていた。そして龍輝の理由にも素直に納得していた。なぜ落ち着いていられるのか疑問にもなる。

「その事か。シャルロットが嫁を狙っていないのは知っているからな。だからだろうな。それに、嫁は唐変木だからシャルロットを好きになることはまずないだろうし、

ユーリ殿とレヴィ殿がいればそんな気にもならない。これが私が落ち着いていた理由だ」

「納得したよ。ありがとな」

「いや、礼を言われることはない。それじゃ私は戻るぞ」

「おう」

今度こそ、ラウラが調理場から出ていく。それを見送った龍輝は調理を再開していく。

「さすがはわが主だ。対処が完璧であつたよ」

「褒めるなよディアーチェ。二人は渋々納得したって感じだから褒められるようなことじゃない」

「謙遜するな主よ。普通ならあそこまでできん。主にしかできないことだと我は思うぞ」

「ディアーチェがそう言ってくれるだけで満足だよ」

「うむ」

……こんな風に会話してるが二人の手は一切止まっておらず、次々に料理を作っていく。やっぱりこの二人は最強のタッグだろう。料理に関しては。

「そういえば主よ」

「なんだ？」

「姉上はどうしてるのだ？まさか部屋にずっといるわけではあるまい？」

「琴音なら今は簪のクラスに行ってるはずだ。一人は危ないからやめとけよって言ったら簪のクラスにずっといるつもりだから大丈夫って言われてな。簪も任せてって言って張り切ってたから任せた」

「なるほどな」

「マスター」

「お？シユテル、どうした？」

「ダイアーチェと話していたら調理場にシユテルが入ってきた。シユテルもシャルと同じようにメイド服を着ており、接客などの仕事を担当している。」

「調理中、すみません。マスターにお会いしたいお客様がいます」

「客？しかも俺に会いたいだと？さつき念話で言っていた新聞記者か？いや、それだとシユテルが通すとは思えないしな……」

「時間切れだ、龍輝」

「は？……なんだ、お前かよ」

一人でうんうん唸っていると時間切れと言いなながら調理場に入ってきた人物を見つめつちや考えていた自分がバカらしくなつて落胆する龍輝。

入ってきた人物は、公表されていない第三の男性操縦者、龍輝の幼馴染、黒葉蒼だった。灰色の袴というなぜか和服を着ているが。

「なんだつてことないだろう」

「悪い悪い。それで？なんで蒼が来たんだ？それにその格好は」

「順に説明するよ。まずこの格好についてだが俺のクラスは和風喫茶だからだ。だからこの格好なんだよ。で、休憩を貰えたから龍輝を見にここに来た」

「理解した。和風喫茶なんてなんか、渋いな」

「お前らのクラスがご奉仕喫茶をやるつてことをどうやって聞いたのか知らんがわかつてな。クラスの女子が対抗するために同じにするつてなつたが被せるのは違うつて

なつて美森と友奈と先生が俺が和服とか凄い似合うつて言ったらこれになつた」
「お疲れさん」

蒼の説明で苦労したのを感じたので労う龍輝。

「で、ソレは本物か？」

「そんなわけないだろう。ちゃんと偽物だが、先端は尖ってるから突けば大変なことになるな」

「物騒だな」

「俺はクラスメイトにこれを絶対持つてつて言われて持つてるだけだが」

蒼の腰に黒い棒、良く見るとそれは鍔がない刀、忍者刀のような直刀だった。龍輝に言われて鞘から抜いて刀身を見せてから先端を龍輝に向ける。対して龍輝はさつき箒とセシリアを叩いたお玉を持つて構えている。

刀相手にお玉という謎空間がここにできている。

「主とアオイも愚かなことをしていないで料理をせんか」

「すまん、ディアーチエ」

「悪い、王」

ディアーチエの静かな一喝で龍輝はお玉を置いて料理を再開する。蒼も鞆に閉まつてシユテルが余つてる椅子を持つてきてくれたので椅子を受け取つて邪魔にならないところに座る。

「クラスに戻らないのかよ」

「言つたら？休憩中だつて」

「そりや言つてたけどよ。俺はまだ休憩にはならないぞ？」

「お前の料理してる姿なんてこんな近くで見たことないから見てるだけだ」

「楽しいか？それ」

「案外楽しい」

「さいですか」

「それに、一人で回っていたらいろいろ面倒なことが起こるからな。ここにいれば安全だし」

「避難所じゃねえんだぞ」

「男子にとっては避難所のようなもんだ」

「あつそ」

「どうぞ」

「ありがとう、シユテル」

シユテルがここに居続けると判断して飲み物を蒼に差し出している。

「蒼、なんか食うか？」

「いいのか？」

「おう」

「なら……王様特製クッキーで」

「俺が作る料理を頼まないんだなお前は」

「冗談だ。ケーキ頼む」

「あいよ」

この二人、本当に仲良しだとデИАーチエとシユテルは思ったのだった。

学園祭はまだまだ始まったばかり。さあ、一体どんな学園祭になるだろうか。

「兄さんに、会いたい……会って、いろいろ話したい……」

……どんな出会いが起こるのだろうか。